

# このTSな会話不可少女 に救いの手を

零点

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なぜか死んでしまった零（レイ）はカズマとともに1つ願いを叶えてもらい異世界に送られる。

彼の願いは自身が考えたキャラになること、しかし零は運悪く頭がパア、になってしまい言葉と文字を理解・話すことができなくなってしまう。しかもなぜかロリ姿で

そんなお話

新たにイラストを追加しました、★が付いているのがイラストありの話です。

アニメを元にしたので小説と違うかも。

キャラ設定を活動報告に移しました。

# 目次

## 会話不可なTS少女

この素晴らしい機会に喜びを	1
このTS少女に救済を	7
このスキル持ちに収入を	20
この異世界の転生者にクエストを	30
この欠陥パーティにクエストを	42
このパーティに爆炎を★	50
この記憶喪失に遭遇を★	63
この転生者にお宝を	76
このTS少女に服装を★	86

この操陰使いに敗北を…。	96
この操陰使いに不穏な影と希望の兆し	
を★	107

## 言葉を知りたいTS娘

この記憶喪失にハテナマークを	115
このTS少女にリベンジを	126
このロリコン少女に休暇を★	139
このTS少女に二回目を	151
この喪失少女達に真実を	162
この記憶喪失に回想を…★	171
この死後の世界にお別れを。	186
このパーティに帰還を	194

この家なしパーティに豪邸を1

199

この宿無しパーティに豪邸を2

206

この古代兵器に終止符を

——  
215

この二次創作（一期）に終止符を

225

このすば二期

この物語に二期突入を

——  
236

この裁判に逆転を（前編）

——  
240

この裁判に逆転を（後編）

——  
245

# 会話不可なTS幼女

## この素晴らしい機会に喜びを

(…あれ自分死んだんじゃないやなかったけ?)

そこはただただ白い部屋の中だった。

そこに、唐突に自分は突っ立っている。

そして、目の前には椅子に座った一人の

自称女神、そして隣にはジャージ姿の高校生くらいの男。

どうやら自分は確かに死んだようだ、死因は…いいや、思い出すのメンドイ。隣のジャージ君も死んだようだが死因をこの自称…いや、死後の世界にいるわけだしリアル女神か、一応、その女神が爆笑しながら喋ってるわけなんだけど、うざい、死因がどうであれ笑うのはどうなのさ?…まあメンドイ  
とりあえず挨拶しとこ。

「どうも、初めまして。…零(レイ)です。」

なんか某忍者アニメみたくなっただけどまあいいか、名前はリアルの名前持ち出しても面白くないし。

「え…ああ、初めまして、カズマっていいですよ…。」

話の途中ではなしかけられて驚いたらしくキョドツてる、まあいいや。

「ちよつと聞いてるのその2人！」

ああ、女神よ、ちゃんと聞いてる。

「聞いてますよ、つまり天国か日本で生まれ変わりするかって話ですよね、どっちも嫌ならなんか魔王いるとこに行けみたいな」

「むぐつ…ちや、ちゃんと聞いてるようね、で続けるけど、さすがに童貞ニート…アア貴方はニートではなかったわね、まあそんな2人に魔王退治を命じるほど神は無責任じゃないわ！」

…とりあえず眠い、説明終われって思ってみたり。

「話を続けるわね。だから1つだけ好きなモノを持つていける権利を上げているの、強力な武器だったりとんでもない才能だったり、貴方たちは記憶を引き継いだまま人生をやりなおせる、しかも貴方たちは1つだけ好きなモノを持つていける、異世界の人にとっては即戦力になる人がやってくる、ね？悪くないでしょ。」

あ、なんか面白そう、隣を見るとカズマって人はまんざらでもない顔をしている、自分？無表情ですが？

そんなことを思ってみたらカズマ君、何か質問？

「ちよつと、聞きたいんですけど？ 俺、異世界語とか喋れるの？」

あつ：：：「そういえば。」

「その辺は問題ないわ。私達神の親切サポートによつて貴方の脳に負荷をかけて一瞬で習得させられるわ、副作用として、運が悪いとペアになるかもだけど：：：だから後はすごい能力か武器を選ぶだけね♪」

ペアか、まあほとんどは大丈夫だろ、つて。

「今、重大なことが聞こえたんだけど：：：ペアがなんだつて？」

やっぱ気になるか隣のカズマよ。

「言つてない☆」

そんな満面の笑みで言われても事実を変えられませぬよ女神。

「まあいいじゃないですかカズマ君、どっちみち日本に生まれ変わる選択をすれば記憶がペアしますし。」

「そうよ、さあ選びなさい！ 貴方たちに1つだけ何者にも負けないチカラを授けてあげましょう！」

カズマ君選んでる選んでる、自分はもう決めてる、昔から1つだけ無理な願望があったからそれしかないと確信してる。

「ねー、早くして（ポリ）ドーせなに選んでも一緒よー（ポリ）、引きこもりのゲームオ

たくに期待してないから」

おい（汗）なに普通にポテトチップス食つとんですかいwあとやる気なさすぎ、自分もそうだけでも。

「お、おオタクじゃないから！出かけて死んだわけだし！引きこもりでもないからー！！」

荒れたなーカズマン、無表情じゃなかったらこつちにも怒りの矛先が向いてたかも。

「ドーデもいいから早くしてー、死者の案内がまだたくさんあるんだからー」

おい、女神が何故か不良の取り巻きみたいなんだが、そしてカズマ君も怒ってらっしやるよ？

「そういうえば貴方は決めたの？貴方も早く決めなさいよー」

ふむ、こういう時はあれだな、1つの願いで何度も美味しい オリキャラなる！な考え方で。

「じゃあ女のオリキャラになる事で。あつ、能力とか、声とかもちゃんと反映させてください。」

「えっ？」

やめてカズマツチと女神、そんな引きつった顔しないで…女って所に反応したんだろうけど、ちゃんと理由がある。



「えつと…実は自分は性別とかの色眼鏡に振り回されなくなかったんだ、ぶっちゃけぬいぐるみとかフリフリの可愛い服とか欲しかったさ（男なら着ないだろうけど）…逆に男としてもカツコよくきめてみたかったし、でも見た目がこれでしょ？ないですよ、太つててブサくて…カツコよくきめられる要素ゼロですわ。」

「そ、そう…わかつたわ、じゃ、じゃあ貴方はそれでいいわ、その女の子キャラ設定は話さなくて大丈夫…。め、女神だからねー（――；）」

やめて、かわいそうなものを見る目で人を見ないで、心が折れそう…。

「もう一人、早く決めさなよね、今手に持つてるモノでいいじゃない、ちやつちやと済ませてよね」

「早く決めろつてか、じゃあ決めてやる。異世界に持つていけるモノだろ？」「そうそう（ポリポリ）」「じゃあ、あんた」

ふあ!? カズマ君がそういつて指差したの女神さんなんですけど、なに？女神さんを武器にして振り回すの？かんがえたらすこしわらつてしまつたよ。

「ん（ポリ）それじゃあ魔法陣出ないように立つて…て、今なんて言つたの？」

女神さん2号がログインしますた。

「承りました、では今後のアクア様のお仕事はこの私が引き継ぎますので。佐藤カズマ様の希望は規定にのっとり受諾されました」

隣を見ると女神さん、もといアクアさんが尋常じやない慌て方ワロタ。

「いつてらっしやいませアクア様、無事魔王を倒された暁には迎えのモノを送ります」

：おい2号、あなたはわりとヤバイ人？こんな状態のに笑顔って案外腹黒？

カズマ君はカズマ君でザマア感たつぷりの顔でアクアさんをいじつてらつさるお、自分もいくつか言いたいことがあつたんだつた。

「アクアさんアクアさん、自分女になるんでついたら色々教えてくださいねー、女の子の色々色々、じゃつ向こうで会おうぜカズマ君（ ^ ^ ）／」

「おう、またな零」

「ちよつと、私の話を無視しないでー!」

「さあ勇者よ、願わくば幾多の勇者候補のなかから貴方がたどちらかが魔王を打ち倒すことを祈っていますー!さすれば神々からの贈り物としてどんな願いでも叶えてさしあげましょう」

自分はパスかな、カズマ君は乗り気みたいだけでもう夢叶えちゃったし、よし!自分の女子生活の始まりだ!隣から悲鳴やら笑い声やら聞こえるけど関係ないのですよ、レッツ異世界ライフ…!

## このTS幼女に救済を

駆け出しの冒険者たちが集う町

ーアクセルー

気がつくのと立っている場所はすでにあの白い部屋などではなく、のどかな町だった。

文明レベルを考えればやはりファンタジー世界にありがちな中世ほどだろうか？

町は見渡せる場所はざっと見た、そして今度は夢にまで見た自分自身のTSチエックだ♪横がうるさいが今は後回しだ！

：髪は白色の長髪ストレート、所々毛がはねて触ってみるとなんとも言えない感触が気持ちいい、前髪はぱつっん気味だが適当な間隔で長さがバラバラだ。

服装は下着の上にカッターシャツ・クリーム色のパーカー・青い迷彩のような模様の半纏の順に重ね着されて、スカートの色は紺で走り回っても下着が見えない程度の長さになっている。

他というと頭に狐の面、眼はジト目で靴は走っても大丈夫そうな短めのブーツになっている、身長は：アレ？確か零点（女体化）は確か155程度だったはずなのに明らかに低い、100くらいだろうか？



「どうしたらいい(泣)って、グスン…なんで零があんたの裾、グスン、掴んでるの…。」  
ーカズマ side ー

なぜかオレのジャージの裾を零が掴んでる、しかも泣きながら、女神はほつといて話を聞いてみよう、今ここにいる日本人はオレの以外に零だけだし。

「おい、どうしたんだよ？なんで泣いてんだよ？」

…返事が無い、その代わりに首を傾げてくる、まさか。

「おい女神、まさかコイツ運が悪くてペア、なんてことなんて無いよな。」

オレの中にあのとき言われた言葉が思い出される『副作用として、運が悪いとペアになるかもだけど…』

「…ああーこれ軽くだけどなってるわね、多分正しく頭にはいらなかったせいで言葉とか文字とかすらわからなくなってると思うわ」

『副作用として、運が悪いとペアになるかもだけど…』とか言っていたのをいいじや無いか発言してた本人がなるなんて…。

とりあえず今は様子見で一緒行動するか。

さて話を戻そう、こういう異世界に来た時、やるべきことは1つだ。

「…思ってもみない誤算はあったが異世界に来たからにはまずはギルドだ、そういう場所に行つて情報収集するのがRPGゲームの基本だ、もしかしたら零を治す手段も見つ

かるかもしれない」

「なっ！ゲームオタクで引きこもりだったはずなのに、何故こんなに頼もしいの!？」

相変わらず女神のやつは俺がいいこと言っているのに嫌みしか言わない、いつか思い知らせてやろう。零はなんとか泣き止み今は不思議そうな目でこつちを見ている、コイツがただ好きだからといってこの零点（女体化）とかいうのにしてもらったとは考えにくい、能力者だった場合うまく戦力になって欲しいものなんだが…。

「よし、行くぞ女神・零」「あっ！待って」

そう言つて俺はついてくるかわからない零の手首をひいて歩き出した（別に、女姿の零を意識しすぎて手をにぎれなかつたんじゃないぞ？）



―零side―

―冒険者ギルド―

カズマ君が私の手を、というより手首だけど持つて歩いてくれた、カズマ君とアクアさんが一緒にいてくれるか不安だった私にとってはそれがこのうえなく嬉しかった。

程なくしてある建物に着いていましたよ、この感じはもしかしたらギルド？魔王や勇者といった存在があるのだとしたら多分あるとは思っていましたが案外立派な建造物なのです、一言で言うなら石レンガの教会？ですかねー。

「いらつしやいませー！お食事なら空いてる席をどうぞ！お仕事案内なら奥のカウンターへ♪」「ありがとう」

やっぱりわからない、多分いらつしやいませの様なことを言われたんでしようけど推測しか出来ない。それにしても中は何んともギルドっぽい雰囲気、昼からお酒がお客様さん運ばれて肉体派な男たちが多くを占めて賑やか、ここに腐女子を置けばいい！一日でどれだけのカップルがあたまの中に誕生するのやら。そんなバナナ考えをしているといまだ手首を持つてくれているカズマ君に世紀末風の男が話しかけてますけど気のせいだよー、気のせいだと言つて欲しい…完全にはなしちゃってるー。とりあえず私はカズマ君の足にかくれときますよ。

「見かけねえ顔だな、それになんだ？その妙な格好は」

「いや、実は遠くから来たばかりで、今この町に着いたところなんだ…俺も、魔王軍戦う冒険者になりたいんだ。」

「…ああ、そうかい命知らずめ、ようこそ地獄の入り口へ！ギルド加入の受付ならあそこだ。」

…内容はわからなかったけどカズマ君が軽く笑顔で軽く右手を上げていたから良い人だった？とりあえず去り際に世紀末の人にわずかに微笑んで手でバイバイしたら相手は手をgoodの形にして笑つて見せてくれました、この人良い人確定です！覚えと

かなきやです。

あ！あのお肉美味しそう。

「くくく、今日はどうされましたか？」

お肉のジューシーさに見惚れて最初の言葉が聞き取れなかったけど大丈夫、だってわか  
かないんだもん♪

「えつと、冒険者になりたいんですが？」

「そうですか、では最初に登録料がかかりますが？」

「はいはい……て、金持ってる？」

アクアさんが会話途中に首を横に振りましたよ？嫌なことあったんでしょーか？そ  
んな考えを持つてる私に関係なく会話は再開する、アクアさんが喋り終わるとカズマ君  
はあからさまにいやな顔、やっぱり嫌なことあったんですね。

その後2人は私も忘れてテーブルで項垂れてしまつて、いつの間にか自由になった右  
手、とりあえず椅子をも1脚持つてきて小さい体でちよこんと鎮座。カズマ君の顔を覗  
き込んでなんとか疑問の意思を顔で伝えてみるとわかつた様で人差し指と親指で輪っ  
かを作つてみせる、要はお金の問題だったらしい。

お金がないと何もできない、ウエイトレスさんが来たけどカズマ君サツと受け流す。

「おいどうしよう、いきなりつまずいた。普通は最低限の装備が手に入つたり生活費



だつてどうにか手に入るものなだけ……不親切だぞ？」

「いきなり頼り甲斐がなくなつたわね、まあしようがないわね、ヒキニートだものね」「ヒキニート言うな」「まあ良いわ、次は私の番ね！女神の本気を見せてあげるわ！」

アクアさんが最後に意気揚々とカズマ君に何か言つた後、近くにいたおじいちゃんと話してますね？というか私つて空気になつてます？あ、なんでかアクアさんおじいちゃんからお金を貰つてますね、すごいです流石ポテチ食べても女神だけはあります……、あれ？なんで泣いてるんでしょう。

ー少し戻つてアクアと老人の会話ー

「そののプリーストよ宗派を名乗りなさい！私はアクア、そう！アクシズ教団の崇める御神体、女神アクアよ！なんじもし私の信者なら……お金を貸してくれると助かります。」

そう言つてアクアは頭をさげる、しかし老人は……

「エリス教徒なんですが」

「なっ！」アクアはしまったとばかりに声が出てしまう、なんとも気まずくなつてしまつた、まさかべつの宗派だつたとは思ひながらアクアは謝り、一刻も早くたちさろうとするが

「あ、お嬢さん、アクシズ教徒なのかな？女神アクアと女神エリスは先輩後輩の間柄らしい、これも何かの縁だ、さつきから見てたが手数料がないんだろう？」

そういうと老人は3人分の手数料を分けてくれた

「ほーら、エリス様のご加護つて奴だ、でもいくら熱心な信者だからでも女神を名乗っちゃいけないよ。」

「…あ、はいスママセン。ありがとうございます…」

アクアはお礼を言うがそこには喜びの感情は一切なく、あるのはただ虚しさだけだった。

―零 side 1―

「ふふふ…女神だつて信じてもらえなかつたんですけど、ついでに言うとエリスは私の後輩の女神なんですけど、私後輩の女神の信者の人に同情されてお金もらえちゃったんですけど…」

「お…おう。」

アクアさんなんで泣いてるの？言葉がわかんないから分かんないよ、ああ…言葉がわからないとこういう時不便だよ、つてカズマ君は言葉わかるのになんで慰めないでそっぽ向いちやうの…。ただわかるのは受け付けに行くまで2人とも項垂れていたこと、それを見た巨乳の受付の人があからさま嫌な顔をしていることだけだった。

「では改めて説明を、冒険者にはかく職業というものがございませう、そしてこれが登録カード、冒険者がどれだけ討伐をおこなったかも記録されます。レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、頑張つてレベル上げをしてくださいね。」

それでは御三方ともこちらの水晶に手をかざしてください。」

受付の人は説明らしき事を言っているだろうと推測するのは難しい事じゃない、ただもちろん内容はわからない、ただ地球儀の様なガラス玉を指差しているのが特にわからない、説明（予想）が終わるとカズマ君がガラス玉に手をかざす、そうするとカタカタと音を立て、カードにビームが発射される、もしかして免許書みたいなものを作ってるのかな？

「これであなた方のステータスがわかりますのでその数値に応じてなりたい職業を選んでくださいね。」

さっきまで沈んでたカズマ君がワクワクした顔でガラス玉に手をかざしてます、もしかしてステータスとか見れる感じなんでしょうか？そうならワクワクです、文字もわかりませんが。そういう考えてるうちにさっきまで出ていたビームは止まっていた、どうもカズマ君の分は済んだ様。

「はい、ありがとうございます。：サトウ カズマさんですね、えつと：どれも普通ですね、知力がそこそこ高い割には：あれ？幸運が非常に高いですね！あつまあ冒険者に幸運ってあんまり必要ない数値なんですが：これだけの幸運があるなら商売人になることをお勧めしますが？」

話し終わるとアクアさんは微笑し、カズマ君は今にもため息をつきそうな顔をしてい

る、微妙な数値だったんだろうな、でもそこまで文明は進んでないみたいだったからステータスで知力があるとすれば平均以上じゃないかな？

「おい、いきなり冒険者人生否定されたぞ？どうなってんだ。…えっと、基本職の冒険者でお願いします」

「ま、まあレベルを上げれば転職も可能ですし（汗）」

「で、ですよね！」

受付の人に何か言われてちよつとは笑顔が戻ったもののまた沈んだ顔になってしまいうカズマ君。

とりあえず次はやり方もわかったから私が挑戦したいところ、背が届かないから受付の人に抱つこのポーズをとる、どうやらわかつてくれた様で抱きかかえてくれた。しかし背中当たると胸の大きさに元男の私は興奮どころか嫉妬を覚えた。やつぱり無性におっぱいは大きい方が羨ましいと思ってしまう、貧乳好きだったにもかかわらず、女の子になった変化ですよ（オツパイプルンプルンチクシヨーマー）。

カズマ君と同じ様に手をかざすと同じようにカタカタと音を鳴らしビームが発射されていく…。

「はい、ありがとうございます…オガミ レイさんですね、えっと…知力が平均より若干低く幸運も低いですね、後防衛力も…え!?腕力が平均を大幅に超えていて、素早さも高

いですね…これなら魔法を使わない剣士系統ならほほなることができますよ♪あれ？もうスキルがついてるんですが、なんでしょう【操陰（そういん）】に【文字・言語習得不可】？」

「…いまなんて？」

「操陰に文字・言語習得不可…と」

ーカズマ side ー

ナンテコツタ！ただ忘れてるんならともかく、取得不可!?これなんて無理ゲー？

だが、これはチャンスでもある…言葉と文字がわからないだけなら対策はある。

「では、職業はどうされますか？零さん。」

「あ、スミマセンこいつ会話できないんですよ、ちよつと紙とペン貸してもらえませんかね？」

「あ、それで文字・言語習得不可なんですわ。分かりました、少々お待ちください」

そういうと受付のお姉さんは奥から紙とペン、それにインクを持ってきた。俺はそれ  
に今、零がなれる職業の絵を描き零に選ばせようとしたのだ…

ー零 side ー

カズマ君が私に絵を描いて見せてくる、どういう事？…もしかしてジョブ？ジョブって事なんですか？

零点は大剣使いなので大きな剣を持つてる人の絵を指差します。

「じゃあ大剣士でお願いします。」

「はい、大剣士ですね、ではこれで零さんの登録は完了です」

受付の人が話し終わると私にカードが手渡される：うん、やっぱり免許証みたい、文字も読めないから貰ってもカードとしかわからないし。最後にアクアさん、女神だからいっぱい魔法使えたりするのかな？

そう思っていると同じ様にアクアさんがガラス玉に手を近づける。

「はああ!?! 知力か平均より低いのと幸運が最低レベルな事以外は全てのステータスが大幅に平均値を超えていますよ!」

!!? 受付さんいきなり声あげないでください、びっくりしちゃうじゃないですか。

でも声を荒げたって事はやっぱり女神だからすごかったのかな？

「ん? 何々?? 私が凄いつて事?」

「凄いつてもものじゃないですよ! 知力を必要とする魔法使い職は無理ですが、それ以外ならなんだつてなれますよ! クルセイダー・ソードマスター・アークプリースト、最初からほとんどの上級職に。」

「そうね、女神つて職業が無いのが残念だけれど…私の場合仲間を癒やすアークプリーストかしら!」

「アークプリーストですね！あらゆる回復魔法と支援魔法を使いこなし、前衛にでも問題無い強さを誇る万能職ですよ♪」

周りが今の話聞いていたのか一気に歓声が上がる、私はあまりそういうのがニガテナ方なのでカズマ君の足元に隠れて耳を塞ぐ。

従業員も出てきてえらいこっちゃ。

「~~~~~」

カズマ君が呆れた顔で何か言ってるけど耳を塞いで聞こえない、もつとも言葉が理解出来ない私には意味が無いけど…。

ともかく、これから冒険者人生の始まり、リアル冒険者は駆け出しならまだフリーターみたいだろうけど、万能に近い私のスキルがあれば何とかなる、はず…改めてレッツ異世界生活!!

## このスキル持ちに収入を

レッツ異世界生活！……って意気込んだのに、どうしてこうなったのです、今の私のくえすと、お茶の配給……まあ幼女ですし、あはは……はあ、カズマ君は力仕事、アクアさんはなんか塗っててみんなからの歓声浴びて……、私もお茶を注いでるときにはできるだけのロリっ娘スマイルをしてみんないい笑顔で仕事に戻っていくけど……物足りない、せつかく万能スキルがあるのに、使えないのですよ。



お昼休憩、カズマ君にその事を打ち明ける……といってもジェスチャーですが。

ピツケルと運搬道具を指差しし、私自身を指差しし、ピツケルを振り下ろす動作と運ぶ動作をする。

「もしかして力仕事がしたいのか？……確か零は小さいくせに力がかなり高かったな（ボソツ）よしわかった、何とか頼んでみる」

そう言つて手を good の形にしてみせた。

休憩が終わるとカズマ君と話していた親方？がピツケルを渡してくれた、これで私もらしいことができる、子供のお手伝い感覚とはおさらばですよ！



そう思いながらみんなを真似てピツケルを振る：が、みんなの一振りの間に私は大剣を軽々と扱う零点（女）のキヤラ設定通り馬鹿力で四振り近くしてしまっている、周りも異常なまでの早さに手を止めカズマ君に至っては口が開いたままでピツケルも落としてしまっている。

なんとか作業を終え日当を支給され見てみるとあからさまに私の方が多い、もしかしたら銅貨・銀貨・金貨と、わけられているんじゃないやあ？と思つてカズマ君たちの中身も見せてもらったのだけど同じ模様のコインがあるだけでした。

鼻歌を歌いながらカズマ君たちの手を引き店に向かった、はたから見れば親か兄に欲しいものを買ってもらいたい少女に見えちゃうけどそんなの関係ないですよ。

店に着くと私は「ん！ん！！？」と言葉ではない声をあげ黒い板を指差す、そう！黒板（小）なのですよ♪これがあれば唯一の伝達方法の絵がチョークの補給だけで半永久的に使える優れもの、異世界にも黒板があつてよかつたですよ、黒板様です。

さて、カズマ君たちについてきてもらったのは他でもなく値段です、私は数字読めない書けないわからない＋ $\alpha$ の三拍子＋ $\alpha$ なのでカズマ君たちにたよるしかないので、＋ $\alpha$ はもちろん言葉がわからないことですよ？

そう冗談交じりにワクワクしている零にカズマ君が下した判断は意外にもNOだった、厳密に言うところ「確かにいるけども、今買ったら今日の晩飯が食えなくなるから無理

だ、明日持たん。」と声を発しながら顔を横に振ったのだ。

何でだめ？ヤツパリお金たらないのです？

あからさまにしょぼくれている私に対してカズマ君は相変わらず手ではなく手首を握って店の外へ連れ出してくれました。

今日の夜ごはんは骨つきの肉、生野菜、蒸かした芋などかなり美味しそう、私は夢中でがつつき最後には残しておいた骨つき肉を食べようと目を伸ばした時妙な視線を感じる、カズマ君とアクアさんの目つきが明らかに驚愕を表すかのような顔をこっちに向けている。何かと思いい皿に目をやると骨つきの肉は3個あつたはずなのにそのうちの2個が骨とともに消えていた。あれ？肉部分は食べた記憶があるのに何で骨がないんでしょう？そんなことを考えながら最後の一つを頬張る：「バリッ！」いきなりの音に少し驚いたが何となくわかった、私骨ごと食べてた！。

つまり、私は料理が美味しくて一心不乱に食べてたら骨ごとお肉を食べてしまった、ということ、零点（女）は割と歯が丈夫という設定がまさかの發揮、実害ないので骨もろとも胃袋に入れて完食しました。

お風呂がないのが残念だけど多分貴族とかしか使えないんだらうな、そんなことを思いなからガチな馬小屋で眠りましたキャンプみたいで楽しい♪

…ピンチ、おトイレ行きたいけどやり方がわかりません、とりあえずアクアさんに起

きてもらわなければ朝には大きな水溜りが出来てしまいます、そう思いながらアクアさんを揺する…起きない、もう一度揺する…。

「何よ、こんな時間に起こして女神である私に…って零もしかしてトイレ？」

「むーむー！」と言葉にならない声をあげ、おトイレと言わんばかりにモジモジし涙を浮かべる、最近どうも涙腺が弱くなつたですよ、たぶん話せないことに恐怖ともどかしさが相まって胸にたまるモヤモヤが涙として出てしまうんでしょう、そう考えてるうちにアクアさんのもと、目的のおトイレ指導が開始、感想？羞恥プレイかと思いましたよ。

次の日…

今日は土砂と岩石の運搬を任せられました、なんだが微笑ましい視線を感じるのですが無視です。運搬用の道具は日本の江戸のTAXIなカゴみたいな形で大きい、二人がかりじゃないととても持ってません…フツフツフツ、ついについて私のスキルのおでましですよ！

いでよ操陰！そしてスキルを発動する、すると目の前に全身が黒く目だけが妖しく光る人が一人出てきた、これが操陰、陰のような黒い何かを変幻自在に操る能力、その形は触手・人・車・銃・剣・服など創造出来るもなら様々な形態に変化可能、強度・柔軟性なども変更可能な万能スキルである。

またもやみんな驚愕している、今度は全員が口を開けて手が止まってしまふ。そのお

かげで今回の日当はさらに増え、昨日の倍ほど入っていた。

その日は念願のお風呂♪まさかこの世界にあったとは、建物の中は銭湯のようになっていて町は中世風なのにお風呂は和風：大丈夫だ問題無い。

「はい、零バンザイして」

そう私にはわからない言葉を発して私の服を脱がせているのはもちろんアクアさんだけど、アクアさん私が本当の幼女じゃ無いこと忘れてませんか？

浴室に入るとお風呂独特の温もりが私たちを出迎えた、男時代の私はテキトーに髪や体を洗っていたけど今は女の子、上手くできない自信があるのでアクアさんのやり方を真似するほか無いのですよ。

…よく考えたら周りは女の子の裸だらけ、でも元男だというのにムスコのあった場所は何の反応も無いしとくに興奮もしない、これも女の子になった影響なんでしょうけど。

お風呂を満喫したあとカズマ君とアクアさんとともにミルクを飲む、やっぱりお風呂あがりはミルクにかぎります。

そうそう、服は魔法とかで入っているうちに綺麗にされました、魔法って便利ですね。

「そういえばアクア、零は大丈夫だったか？」

ミルクを飲み終えたカズマ君が何やら言っているですよ。  
「大丈夫って何が？」

「イヤ、零は元男だろ？男が女風呂には入れるなんて最高すぎて流血沙汰（鼻血）だぞ？  
？エロい目してたとか女の子の裸を目で追っていたとか無いのか？」

「…そうだったわ！零ってすっかり忘れてたけど男だったのよね。そうね…ぱつと見て  
久しぶりのお風呂を楽しんでるようにしか見えなかったけど、つて言うよりカズマ？あ  
んなそんなこと考えてたの？wwwwまさに童貞オタクね！ぷくすくすくす（笑）」

そんなこんなで時間も経って夜ごはんの時間、私は昨日と同じく骨もろとも食事を平  
らげる「ケフツ」と子供じみたゲップが出たのはご愛嬌…大丈夫だよ？それにしても  
ロリ体型のせいでさほど多くは食べれない、子供なりには多く食べれた方だけど。

又次の日、仕事していつも通り私が周りより多めにもらい2日連続でお風呂にはいれ  
て食事をする、そして眠るのですが今晩からシート付き、直接薬とはおさらばですよ。

又々次の日、仕事していつも通り私が周りより多めにもらいお風呂にはいつて食事を  
する、途中で親方達がエンカウントしました、何かされると思ったらまさかのパー  
ティー、私は親方に頭をナデナデされて髪がグチャグチャでガツクリです、でも大きな  
手でされるナデナデはまんざらではありませんでしたよ♪その後カズマ君とアクアさ  
んがいつの間にか居なくなっていました、今まで二人にくつついてばかりだった私は怖

さで涙が出そうになりました、でも大丈夫！すぐに帰ってきてくれたので泣くのは防げました。夜遅くまで続いた馬鹿騒ぎに私は睡魔に負けて親方の腕の中で寝てしまったそう、又々次の日にジェスチャーでカズマ君が教えてくれました。

又々々次の日、仕事していつも通り私が周りより多めに日当をもらいお風呂に行く時、アクアさんがどこからかあの欲しかった黒板を「はいこれ」と私に差し出す、まさに女神様です！今までで一番女神様らしいです、そう目をキラキラさせてアクアさんを見る。

「はい、代わりに買ってあげたんだからその分お金もらうわね」

？ 笑顔を浮かべているアクアさんが言葉を喋りながらサイフを指差し手招きをしてくる、勿論モノを買えばお金を使う、多分その金額をわたすよう言っているんでしよう、そう思った私は値段もわからないので全財産をアクアさんに渡そうとした…が。

「何やってんだアクア！」

バシッ！カズマさんのチョップがモロにアクアさんの頭を直撃する。

「痛いじゃないのカズマ！いきなり頭叩かないでよ」

「いや、今明らかに黒板をダシに零のあり金全部取ろうとしただろうが。」

「そ、そんなわけないじゃない、ただちよーっと代わりに買ってあげたんだから少しくらい多くとって良いかな〜って思ってた…。」

そう言つてアクアさんはカズマさんから目をそらす。何か言っていることは嘘である。

「やっぱりじゃねーかー!」

カズマ君はアクアさんのほつぺたをつねりながらそう叫ぶ、言葉がわからないから私はただ見ているしかない。

「らっへ、れいらけあんらりもらっへふほうへひひやひやいの〜! (だつて、零だけあんなにもらつて不公平じゃないの〜!)」

「あれは零が指定した力だ、何も不公平じゃない、なんならお前は俺が指定した“モノ”なんだからお前の金全て俺のものにして良いんだぞ〜?」

「それだけはやめてー! お願い致しますカズマ様〜!!?」

カズマ君とアクアさんの口論(他人事)は終わり仕事の仲間と食べ、眠る。

又々々々々次の日、仕事していつも通り私が周りより多めにもらい、お風呂にはいれてみんなと一緒に食事をし、そして眠る。

又々々々々次の日、仕事していつも通り私が周りより多めにもらい、お風呂にはいれてみんなと一緒に食事をし、そして眠る。

又々々々々…次の日、仕事していつも通り私が周りより多めにもらい、お風呂にはい

れてみんなと一緒に食事をし、そして眠る。

又々々々々：次の日、仕事していつも通り私が周りより多めにもらい、お風呂にはいれてみんなと一緒に食事をし、そして眠る…

：「つてちがーう！」

「何？カズマも零みたいにトイレついていって欲しいの？」

「むう？（何ですか？いきなり吠えて、起きちゃいましたよ。）」

「違うわ！零も迷惑そうにするな緊急事態なんだから、だから！」

ガタツ！とカズマ君が緊急事態を話す前に隣の馬小屋を使っている住人に壁を叩かれた。

「うるせーぞー！」「すつすみません！」

多分うるさかったんだろう、だって真夜中だもの。二人が見事なシンクロで謝罪を終えた後カズマ君が「…また明日にするわ…。」と言って二人が寝付いたので私も間も無く眠りについた。

その明日、カズマ君はアクアさんとレンガを積み上げながら話している。聴きたいのは聴きたいですけど仕事に手抜きは厳禁です、それに私は言葉がわからない、だから行っても意味がない、だけど行きたいと思ってしまう、多分二人と別れるのが怖いんだろう、いつも側にいないと見放される気がして…。



そしていつも通りお風呂に行く、なんとなく今日はアクアさんの背中を流します、アクアさんは最初はびっくりしたみたいですけど気持ちよさそうにしてたです。前も洗ったかつて？元男だからそれはアウトでしょ？

アクアさんが「あゝ」って言った気がしましたけど流石に気のせいですよ、ポテチ食べてたけど女神様ですからね。

アクアさんより一足遅くお風呂から上がりミルクを買う、ミルクはコインが数えられる量の料金だったので一人でも買えちゃいます、そして噴水みたいな所のふちに座るアクアさんとアクアさんと話しているカズマ君、最近こういう風景をよく見る、私は蚊帳の外。分かっている、私は会話が出来ない、だから輪に入れない…って！アクアさん水中落ちたく！!?私とカズマ君は二人で水に落ちたアクアさんを引き上げる、まったく…こんな二人だからそんな私でも退屈しない、ずっと一緒にいられたら…。

## この異世界の転生者にクエストを

俺だカズマだ、俺は今クエストボードをみてるんだが…初級のクエストなんて一個もねえじゃねーか！どうなってるんだ？相変わらず不親切だぞこの世界。

てな訳で、俺たちはやむなく土木作業のバイトを装備が整えられる金額になるまでやる事になった。

1日目はアクアは壁塗り、零はお茶(?)をみんなについている、俺はというと力仕事ですわ、男女平等、何それおいしいの？

そんなわけだがちよくちよく親方に怒られながらも頑張つて働いたわけだ。

昼休み、零が俺の元へ来てピツケルと運搬道具を指差した後、零自身を指差し、ピツケルを振り下ろす動作と運ぶ動作をする。

まさかジエスチャーか？つまりは…。

「もしかして力仕事がしたいのか？…確か零は小さいくせに力はかなり高かったな(ボソッ) よしわかった、何とか頼んでみる」

そう言つて零に手をgoodの形にしてみせた。

休憩が終わると俺は親方のところに向かい零のステータスや本人が力仕事をやりた

いという事を話した。

「…なるほどな、よし分かった！みんなあの嬢ちゃんが（飲み物）注いでくれるってんで仕事に華が出たって言うからよ、出来れば辞めてほしくはないんだがな。」

「え？じゃあなんでokしてくれたんですか？」

「そりゃあ嬢ちゃんの頼みを断つたとあつちやあオレが奴らにぶつ飛ばされちまうよガハハハ！まあ華はお前が連れてきたもう一人の美人のネーチャンがいるから大丈夫だ。」

親方はそう言つて笑いながら俺の背中を叩いてくる、滅茶苦茶痛いんだが、メチャクチャ痛いんだが…親方は多分まったく痛くない程度で叩いてるつもりだろうが俺からしたら滅茶苦茶痛い。

「まあ、そういう訳だお前の連れの二人のことで何かあつたらいつでも寄つてくれや。」  
零とアクアだけつて、男女差別ダメ絶対！そう思いながらも流石に親方に喧嘩を売る度胸なんて俺にはない。

数分したところでピツケルを持った零が来た、配置は俺から少し離れた所だがちゃん見える位置に入る、お手並み拝見…とはいかなかつた、早すぎる、通常の三倍か!!？赤くないけど通常の三倍なのか！俺はその早さを目の当たりにし口を開け・ピツケルを握っていた手は離れ、呆然と立ち尽くしていた、他の作業員もピツケルを落とさないま

でも口が開けっ放しになっていた、数分間は作業が零以外止まっていたらしい。

夕方、日当を3人とも受け取ると明らかに零が俺とアクアより多い、まああのスピードなら領ける増額だ、アクアは明らかに不満そうな顔をしてるが大丈夫だろ。

仕事が終わりに早速晩飯を食べるにギルドに向かおうとしたら零に手を尋常じゃない力で引つ張られた、こんな力で仕事してたのかー(棒読み)俺は諦めてアクアとともに引つ張られながら零の目的地へと向かった。

しばらく歩いて着いたのは雑貨屋、そして零が「ん！ん!!」と言いながら指差して催促しているのは黒板、授業なんかを使う紛れもない黒板が手持ちサイズで店頭に鎮座していた。

たぶん唯一の伝達方法である絵を描くためだろう、確かにそれがあれば意思疎通が楽になる…が

「確かにいるけども、今買ったら今日の晩飯が食えなくなるから無理だ、明日持たん。」と俺は首を横に振る。

そう、食費がばかにならないんだ、ちなみに黒板の値段は7000エリス、チョークはそこまで高くないが合わせると明日の仕事までもたない。

そう零の目的を一応終え、暇だからと店の雑貨を物色していたアクアを呼び戻し、晩飯のため零の手を引きながらギルドに向かう。

初の給料での晩飯は骨つきの肉、生野菜、蒸かし芋などがある割と値段的に手頃なメニュー、働いて食べる飯がこんなにも上手いとは！「バリツ！」なんの音だ？不穏な音を聞いて目の前で食べていたアクアと目が合う、違うと言いたげにアクアは顔を横に振り零の方へと目を向けると青ざめて零を見たまま固まってしまった。

「おい、どうしたアクア、零がどうk…。」

「どうかしたか？」と言う前に零を見てしまった俺は啞然とした、ホネゴトクツトルヤンケ。

俺たちが食べる手を止め、見ていることに気づいたのかこちらを見るがすでに手に持っているのみになった骨つき肉を食べながら視線を皿に移し固まるが程なくして食事を何事もなかったように食べ進めた：骨もろとも。

その後3人完食した後は風呂呂…と行きたい所だができるだけ装備をかうお金にした、なので今日の所はすぐに就寝、風呂呂は2日にいっぺんのペースで大丈夫だろう、ちなみに寝床は親方の口添えで無料で馬小屋にすまわせてもらえることになった。

2日目、俺は相変わらずピッケルを振り回す、アクアは零に変わってお茶を注いでいた、零はというと俺の作業で出た土や石を運ぶ作業、零は今日もあのパワーで作業するんだろう…：そう思っていた時期が俺にもありました。

零は突如として黒い物体を出しそれが人型になる、俺は案の定ポカ〜んと口を開け手

からピツケルが溢れる、他の作業員達も流石に今日の出来事ばかりはピツケルを落とす人が続出してしまっそう。ちなみに今日の零の顔は明らかにドヤ顔、それを見た俺は違う意味で冷静になり零のスキル？を目の当たりにした作業員達の中でいち早く作業に復帰することができた。

仕事が終わわり2日目の日当が渡された、うん：明らかに零だけが二倍に膨れ上がっているまああの黒いものを出した事で二人分以上の成果が出たことは言うまでもない。

「ちよつとカズマ、零だけあんなにもらつて一体何があつたの？私も女神としてかなり頑張ったんだからあのくらい貰つてもいいはずなのに」

アクアは朝がお茶注ぎ、昼に壁の色塗り作業、普通程度のペースでどこが「あのくらい貰つてもいいはず」だよ！それに女神関係ないし。

「はあ」「ちよつとなんで私を見ながらため息なんてつくのよ！女神である私に失礼じゃない！」

この後俺はもう一度ため息をつき、アクアの声をスルーしながら久々の風呂に向かった。

そう！この世界にも風呂がある、中は純和風な雰囲気でもしかしたら他の転生者が作り出したんじゃ？とも思える。

俺は男湯、アクアと零は女湯へと入って：零が女湯!!? おい：零は元男だぞ? しかも童貞、女の裸には耐性が「おい、ニイちゃんそんな顔して困り事か? それなら俺g「大丈夫です」そ、そうか：」隣のおっさんの話を回避してすぐさま思考を戻す、零は今頃裸の女の子達のいる風呂で：うらやましい! だがアクアが居る、鼻血なんて出せばあのアクアでも即退場させるだろザアマミロ。

：俺の予想はどうやら外れた、俺が零の風呂での様子を聞くと不思議な顔をして「大丈夫って何が?」だ。

「イヤ、零は元男だろ? 男が女風呂には入れるなんて最高すぎて流血沙汰(鼻血)だぞ!!? エロい目してたとか女の子の裸を目で追っていたとか無いのか?」

「：そうだったわ! 零ってすっかり忘れてたけど男だったのよね。そうね：ぱつと見て久しぶりのお風呂を楽しんでるようにしか見えなかったけど、つて言うよりカズマ? あんたそんなこと考えてたの? w w w まさに童貞オタクね! ぷくすくすくす(笑)」

こいつはいつか後悔させてやる、それにしても零、お前一体なんなんだよ!!? 男なのに女の裸に反応しないなんてまさか中身まで女になつてないよな?」

そんな考えが頭をめぐり気づけば俺は馬小屋の中で眠りについていた：。

3日目、仕事して相変わらず零は周りより多めにもらう、お風呂は2日に一回のペースがいいと思ったが汗のにおいがやばい、そこまで高くはないからこれから毎日にしよ

うと思う、俺たちはその後晩飯を済ませシーツを買いに行った、馬小屋ではいつも藁が布団代わりシーツは少々高かったが寝心地には変えられない、安眠ってこれのこというんだなあ。

4日目、今日の寝起きは快適だ、やはりシーツは最高だな、そう思いながら仕事へ向かう、相変わらず多い零の日当を横目に見ながら俺は仕事を終え風呂にはいつて食事をする、その突如親方達が俺たちを睨みつけた、何かされると思ったんだがまさかのパーティー、親方は酒を飲みながら零の頭をかき回す様に撫でていた零も抵抗はしてないから放置しよう、そう思っていたのもつかの間、アクアが酒をラツパ飲みしたせいで吐きそうならしい、一人で行けばいいのに他の作業員達が「女の子には優しくせんとな」とか言って半ば無理矢理俺をアクアとともに外に連れ出し俺は裏路地に入りアクアの背中をさすってやる。

数分も経たずに戻ってみると零が親方の膝の上で頭を撫でられながら俺たちを見るなり涙目だ、いったい何があったんだよ？全くわからん。

俺たちが戻ってから数分、泣き疲れたのか零はもう寝ている、最近零が中身まで子供になつていると思うのは気のせいだろうか？

5日目の仕事の後、アクアが珍しく雑貨屋に行くという、あの女神（笑）は金のほとんどを酒に費やすというのにどういう風の吹き回しだ？



俺たちが銭湯に到着すると同時にアクアも戻ってきた、手には何やら黒いもの「ちよつと待つててカズマ、少し零に話があるから」

そう言つて零を人気がない店の裏に連れ込む：まずアクアはミスをしたと言つておこう、零に話なんかできるわけなどないと。

はあ：とりあえず監視はしておこう、アクアを放つておくとロクなことにならない。

アクアは隠していたモノを零の目のまえに出す、案の定黒板だ、それを見ると零は分かりやすく目を輝かして黒板を見つめている。

アクアはその手の黒板を零に渡した：それだけなら良かったんだが。

「はい、代わりに買つてあげたんだからその分お金もらうわよ」

そう言つてサイフを指差し手招きをしてくる、あれは。

「何やつてんだアクア！」

俺はすかさずアクアに一撃、そのチョップは正確にアクアを直撃する。

「痛いじゃないのカズマ！いきなり頭叩かないでよ」

「いや、今明らかに黒板をダシに零のあり金全部取ろうとしただろうが。」

「そ、そんなわけないじゃない、ただちよつと代わりに買つてあげたんだから少しくらい多くとつて良いかなゝつて思つて：。」

アクアはそう言いながらも俺に目を合わせずに顔ごと目を逸らす。

「やっぱりじゃねーかー!」

俺はアクアのほつぺたをつねりながらそう叫ぶ、全く油断も隙もないじゃねーか。

「らっへ、れいらけあんらりもらっへふほうへひひやひやいの〜! (だって、零だけあんなにもらつて不公平じゃないの〜!)」

「あれは零が指定した力だ、何も不公平じゃない、なんならお前は俺が指定した”モノ”なんだからお前の金全て俺のものにして良いんだぞー?」

「それだけはやめてー! お願ひ致しますカズマ様〜!!?」

結局今回は零の金を黒板の代金だけとつてアクアに渡し終わった、その後はいつも通り風呂に入り、仕事の仲間と食べて馬小屋に戻った。

6日目、今日も仕事だ、いつも通り金を稼ぎ風呂に入り仕事仲間と酒を飲み交わし眠る。

7日目、昨日とさして変わらなかった。

8日目、昨日とさして変わらなかった。

9日目、昨日とさして変わらなかった、仕事をする日常というのはこんなに楽しかったのか、そう考えながら俺は目を閉じる、日常最高…

…「つてちがーう!」

「何? カズマも零みたいにトイレついていつて欲しいの?」

「むう?」

「違うわ! 零も迷惑そうにするな緊急事態なんだからな、だから!」ガタツ! つと俺が緊急事態を話す前に住人に壁を叩かれた「うるせーぞ!」「すつすみません!」「」確かに真夜中にこんなに大声で怒鳴っていたらうるさかった。アクアと謝罪を終えたが言う気が失せてしまった、何よりまた怒鳴られるのは勘弁だからな、よし。

「…また明日にするわ…。」

翌日、俺はアクアと同じ仕事してもらいレンガを積み上げながら話す。

「労働者やりに来たんじゃないぞ…」

「おお、そうだったわカズマに魔王を倒してもらわないと帰れないじゃないの!」

おおって、それに忘れてたのかよ…。

…あいつは知力のステータスが人より低いんだった、そう思いながら俺は湯船に浸かる、確かに俺も若干だが忘れかけていた、だが忘れることはなかった。零のおかげで分に武器は買える、だが最初に見たクエストポートには簡単な依頼は見つからなかった、付近にモンスターがいないとなると討伐クエストも採取クエストも発生しない、そんな現実的なこと知りたくなかった…。

「まいどあり!」

ふと声のする方を見るとアクアがいつものように牛乳を買っていた、黙っていればそ

「そこ美人なアクアの事を思うと自然に溜め息が出てしまった。

「何?」

「アクアが溜め息に気づいたが俺は「何でもない」と流した

「ねえ」

?

「私考えたんだけど少し遠出して討伐クエストに行きましょうよ。」

「俺たちレベル1だぞ…」

「アクアにしてはまともだった俺たちはレベル1、討伐できるモンスターなんてたかが知れている。」

「大丈夫、この私がいるからにはサクツと終わるわよ、期待して頂戴!それに零も何だか変な力を使えるから、十分な戦力よ。」

確かに零の能力は凄まじい、だがなぜか嫌な予感がしてならない。

「ものすごく不安なんだが…私を誰だと思ってるの?」そうだよなあ、一応お前女神だもんね」「うん、任せて。」

こうして、俺たちの冒険は改めて始まつて…!アクアがなんか知らんがすつ転んで水の中にも落ちた!俺はすぐさま駆けつけた零とは二人で水に落ちたアクアを引き上げる、まったく余計不安が募っていく、いったい俺の冒険者人生はどうなっていくんだよ



## この欠陥パーティにクエストを

今日も気持ちいい朝、早速仕事場へ、と思つたら。

「今日は仕事場へ行かなくていいぞ」

? そう言つてカズマ君は私の肩を持つ。

「零…今の状況俺の考えていた異世界の暮らしと違うんだよ。駆け出し冒険者の収入は不安定、寝床も馬小屋で寝るとかだ、よくよく考えてみれば冒険者なんてしがないフリーターみたいなもんだからな、裕福な日本ですらホテルで寝泊まりするフリーターなんていていねー。最低賃金? 労働基準法? 何それおいしいの? (泣)」

カズマ君はそう言いながら溜め息をつき項垂れる。

…アクアさんが目を覚ましません、それどころかイビキまでかいてグーグーと。  
女神様の面影ありませんよ、これ。

そう思っていたらアクアさんに買ってもらつた黒板に何やらカズマ君が書き出す。

「…つと良し、零…アクアにダイビングしてやれ。」

黒板を見るとアクアさんらしき人に私らしき人がダイブしている絵…なるほど、ダイ

ブでアクアさんの目を強制的に目覚めさせると、やりましょう、そう思いながら私は足に力を入れアクアさんに向けてジャンプする。

「むあつ（ダイビング！）」

私の体は見事にアクアさんを捉えお腹にクリーンヒットする。

「ぐほっ!?ちよっ何するのよ!」

「何するのよ!じゃねえ、何時だと思っただ、クエストに行くんじゃねえのかよ。」

「ああ、工事の仕事に行かなくて良いと思っただぐへっ!?ちよっと零何すんのよ!」

会話がわからなくて暇なのでもう一度ダイブしてみた後悔はしていない。

「零…。というかこの世界は魔王に攻められてピンチだったんじゃなかったのかよ、平和そのものじゃねえか、魔王の魔の字もないぞ。」

暇。

「ここは魔王の城から一番遠い街なのよ、しかも駆け出し冒険者しかいない街なんてわざわざ襲いに来ないわよw」

暇だ。

「だよなあ…」

ひくま、あつアクアさんが立ちましたね。

「じゃあ、討伐クエストいきましょ!この私に期待してちよがはっ!?また零!?いつたい

さつきから何なのよ！」

アクアさんのお腹にタツクルを決めアクアさんの体はシーツの上に倒れていった、案の定お仕置きとして二人にゲンコツをくらいましたよ。



ージャイアントトード六匹の討伐ー

《説明しよう！ジャイアントトードとは見た目はただの巨大なカエルそのものだが決して侮つてはいけない、繁殖時期になると体力をつけるため餌の多い人里にまで現れ農家の飼っているヤギなどを丸呑みにしてしまう、他の例としては同時期に農家の大人や子供が行方不明になるといふ事件が多発することなどがあげられる。

ちなみに肉は多少硬いが淡白でサツパリしていてさてなかなか美味い。

さて：人間をも喰らうこの無駄にデカイ食用両生類にいったいこのパーティはどう立ち向かうのか！刮目してみよ。

b y m i s t a r k 》

：「ああああ！助けてくれアクア！零ー！」

カズマ君が雄叫びをあげてカエルから逃げてますね、助けた方が良さげですネOKです。

「ぷーくすくすw超ウケるんですけど！カズマつたら顔真つ赤で涙目で超必死なんです



けどww」

アクアの笑いも気にもせず私は武器を創造する。

【黒槍・グングニル】

イメージができればこつちのもの、思い浮かべた瞬間に私の掲げた手に乗るようにして相変わらず黒い操陰が槍へと形を変えてゆく。

私はそれをカエルめがけて放つ。

グシャッ！

「ぶーくすく…ええ？」

「助け…は!？」

私の思った通り槍は頭を直撃しカエルの頭部は汚ねえ花火になって木っ端微塵になりました。

「助かった零、アクアなんかよりよっぼど役に立つな！」

カズマ君はそう言うのと私の頭を優しくなでてくれる、親方の荒っぽい撫でも良かったですけどこうして優しく撫でられるのもクセになりそうです。

「ちよっ！私だって本気を出せばあんなデカいカエルなんてチヨチヨイのチヨイよ、見てなさい」

アクアさんはそう言って少し遠くにいるカエルにつっこんでいく。

「くらいなさいゴッドドロップキック、相手は死ぬ！」

アクアさんのキックは虚しくもカエルの柔らかかボディに威力を消され無残にも着地点でつつ立ってしまふ。

「カエルついで、以外とぶにぶにして気持ちいいわよね…？」

アクアさんがうろたえてますか？

そんな事を考えている間にカエルはアクアさんを丸呑みにしてしまふ、あつ、コレつて助けます？

カズマ君を見ると頭を抱えています。

：取り敢えず助けましょう、私は今度は右手に操陰を纏わせ巨大な手をイメージをする。案の定悪魔じみた黒くて指先が尖った巨大な手を伸ばし、アクアさんの僅かにカエルの口から出ている足を掴んだ：ううん、掴んだはずだった。

私の体には何故か衝撃が走り右手に纏わせていたはずの操陰は跡形もなく立っていた体は地面へと崩れ落ちた。

おかしい：体に力が入らない、なけなしの力を使っても「きゆう。」という声が口から漏れ出るだけだった。

「ど、どうしたんだよ零!?!てか今戦えるの俺だけかよ!」

カズマ君が代わりにアクアさんを救出しに行く姿をボヤツとする意識の中で私はカ

ズマ君が遠ざかっていくのを目に捉えていた。

…後ろからドスツと音が聞こえます、たぶんカエルでしょうね、操陰は…無理です、あの後割と意識もハッキリしてきたはずなんですけど、身体と操陰が全く動いてくれません、これじゃあアクアさんと同じです。

又チヨリと足がカエルの口に入っていくのがわかる、カエルは私を啜え上げ飲み込んでいく。

ははあ…このままカエルの血肉になるんでしょうか、目の前がボヤけて…何で、何でかな…嗚呼、何だか暖かい…カエルの中ってお風呂みたい…。

嫌だ…嫌だよ…、まだいっぱいしたい事あったのに…誰か…誰か

「あうう…（タスケテ…）」

グサツ！

「…\*ツ！\*いッ！零！」

「大\*夫\*？今\*\*\*か\*てあげ\*から」

カズマ…君？アク…アさん？二人が…二人が助けてくれ…た、まだ音が途切れ途切れ…だけど二人の声です、私はどうやら緊張が溶けたようで自分の意識を手放した。

―カズマ side―

零がジャイアントトードに食われかけた。

今はスヤスヤと眠っているだけだが助け出した直後は完全に気絶していた。それにしてはわからない、何故零が急に倒れたのか零自身に聞こうにも会話ができない。

零を助けた後、俺は撤退する為にカエルの体液まみれの意気消沈したアクアの元に行った。

「アクア今日はもう帰ろう、こいつらは俺たちが手におえる相手じゃない、もつと装備やら連携だとか「待って」へ？」

「私はもう穢されてしまったわ…今の穢された私をアクシズ教徒が見たら信仰心なんてだだ下がりよ！それにカエル相手に引き下がったなんて知れたら美しくも麗「待て」はい？」

工事のおっさん達と毎日の様に酒をラツパ飲みやらガブ飲みやらつまみをぼりぼり食ってるやつが穢されたとかwwそれより。

「人々を助けるはずの女神アクアであるお前はあそこで転がってる零を放つたらかして自分の威厳の為にカエルに立ち向かうというのかな？w」

「うっ。」

まだ零は動かない。

「ち、違うわよ今戦うとは言っていないじゃない！もちろん今日はせんりやくてきてった

い?…をやるわよ、言っておくけど私が本気になればカエルの一体や二体簡単に倒せるんだからね!今日のは油断しただけなんだから。」

アクアは少し涙目ではあるが俺の術中にハマってくれたようだ:計画通り。(ニヤリ)

結局俺達はまだ意識の戻らない零をおぶって馬小屋に戻った。ジャイアントトード三分分の報酬は明日に受け取るとして零がこうなった原因が不明だがおそらく操陰とかいうやつの子供だとは思う。

結局零が目覚めたのは夕方近くだった。

## このパーティに爆炎を★

私はたぶん夕方に目を覚ました、意識がなかったものでどうしようもなくそのままにしていたんでしょうけどなんだか体についていた体液がカピカピになるほど蒸発していました、嗅いでみるとなんだか魚介類のにおいがしましたが気のせいでしょう。

二人はお風呂に入ったみたいで私は結局一人で入る羽目になりました：やっぱり本当のお風呂の方が断然好きです。

気持ちいいお風呂の後は晩ごはん、相変わらず私抜きで二人は会話をします。

「素人の俺達三人じゃ無理だ、慣れてるヤツを仲間として募集しよう。」

今日の晩ごはんはあのカエルのお肉ですよ、カズマさんが食べる前に教えてくれました、菌ごたえがあり味も好き、前は砂ズリや猪肉や唐揚げの外側が好きなど、食感を気にする私としてはgoodな食べ物です、そして話は続いていきます。

「俺達は素人だ、それに前回みたいいきなり零がぶつ倒れたり技が効かない場合もあるだろうから回復以外のサポートや予備戦力が必要だろ。」

「なら私の出番ね！なんといいっても私の職業は上級職のアークブリースト、どこのパーティも喉から手が出るくらい欲しいに決まってるわ、そんな私がチョロっと募集をかけ

ればお願いですから連れてってくださいいって輩が山ほどいるわ♪わかったらカエルの唐揚げも一つよこしなさいよ…ハムハム。」

アクアさんがカズマさんのお肉取った…私はすかさず自分のお皿に残っているお肉をカズマさんのお皿へとうつす、カズマさんはびっくりしたようですけど私はそれに笑顔で返す、でも何を思ったか私の顔を見て一口かじると私のお皿に戻してしまいました、なんででしょ？そう思っていると口から滴った水滴がテーブルの上に落ちる、どうやらカズマさんは私がお肉をプレゼントしているのはわかったのだけどヨダレを見てとりあえず一口食べてもどしたと…優しい！カズマさん優しいです！

わかつていたけど結局その後はいつも通りで私は馬小屋で朝を迎えた。

毎度おなじみになりつつある黒板で今日は仲間を募集すると知らされる、だから仲間ができるまで待機なんだけど…

「レイちゃんかわいく！ほっぺプニプニ〜♪」

「レイちゃんこつち見て〜♪お菓子あるよ」

「おねーちゃん好き〜って言ってみてレイちゃん！」

「あんたねえ、レイたんは言葉がわからないのよ、言えるわけないじゃない」

「レイちゃんはいクッキーだよ」

私の座っている椅子の周りに集まった女の子達が私を愛玩動物であるかのように撫

でたり突いたりして口々に話していたり、私の口に甘いものを運んでくれたりしている、これがモテ期!…なーんて違いますよね。

どうしてこうなったかという少し前、カズマさんの近くでキョロキョロしていると一人のぴんく髪のウサ耳っ娘が手招きをしている、近寄ってみると私はヒョイッとウサ耳にゲットされてしまってそれに気づいた女冒険者達も私に群がって今に至るといわけです、ちなみに私は椅子ではなくウサ耳の膝の上に乗つけられています。

パクパク…

「レイちゃんアーン」

アーンむぐつパクパク…

それにしても来ませんね、仲間…そう思うのを待つていたかのように明らさまに魔導師ですよ感にじみ出ている子がカズマさんアクアさんの元に歩いていく。

「募集の張り紙、見させてもらいました」

「ー!」

「ふっふっふ、この邂逅は世界が選択せし運命(定め)私はあなたがたのような者の出現を待ち望んでいた…我が名はめぐみん!アークウィザードを生業とし最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者!!」

「…えつとw」



カズマさんが明らかに困った顔、いったい魔導師さんは何を初っ端からブツ込んできたんでしょう？

「あまりの強大さゆえ世界に疎まれし我が禁断の力を汝も欲するか、ならば我とともに究極の深淵を覗く覚悟をせよ、人が深淵を覗く時、深淵もまた人を覗いているのだ」

「…冷やかしに来たのか？」

「チツ違うわい！」

二人の会話を見ていたアクアさんが不意に何か気づいたような顔になった。

「…もしかしてその赤い瞳、紅魔族？」

「いかにも！我は紅魔族随一の魔法の使いヘツなう!？」

話が思ったより長く続いたので私は昨日の朝アクアさんに使った技を魔導師さんに使ってみました。

「ちよっ！なんなんですかこの子は、いきなり飛びついてきて折角の見せ場が…」

飛びついて何ですががこの魔導師さんは結構なロリでした、本当ロリって最高ですね魔女ツ娘さんかわいい。

「あー、そいつは俺たちの仲間で零っていうんだ、攻撃力だけなら俺らの中ではたぶん一番だ」

「そ、そうなんですか…『グ』あ。」

魔女っ娘さんはお腹が空いてる様子、メニュー表（だと思うもの）をプレゼントしましょう。

「え？これは…野生イノシシ十匹の討伐、依頼主は精肉店の店主、理由は猪肉がきれたからって何故我にコレを？…これを見ていたら何だかお腹が空いてきました、流石の我也三日間の断食では限界が来てしまったようだ。」

「…えっと、たぶん零はお前のお腹がなつたからメニュー表と間違えて持って来たんだと思う、ほらお前なんか食べるか？」

カズマさんは魔女っ娘に話し終えた後に一枚の紙を渡した、もしかしてそれがメニュー表ですか？そうだったら私いったい何を持ってきちゃったんでしょ？

私が疑問に思っている最中、魔女っ娘さんは私の顔を嫌悪した目で見つめながら口を開く。

「メニューとクエストの紙を間違えるなんていったいどんな頭してるんですかこの子は？普通じゃありませんよ。」

「ああ、こいつも悪気は…あったかどうかは分からんが零はスキルのせいで言葉がわからないどころか読み書きが出来ないんだよ」

カズマさんが喋り終わると魔女っ娘さんは私に向けていた嫌悪の目を不安感のある目に変え口を開いた。

「え…あつすみません、そんな事とは知らず不謹慎でした…思ったのですがスキルのせいとはどういう事なのでしょう？」

「ああ、何故か最初からスキルがあつて【文字・言語習得不可】つていうんだが、何かしらないか？」

「いえ、そのような現象が起こると言うのは故郷にいた頃にも聞いた事がありません。

あつ、私はこの大きい肉が乗つたやつが食べたいです、安いですし良いですよね。」

「今更だな…よし、それを食べ終わつたらすぐにクエストの続きだ！…てかその眼帯はなんだ？怪我でもしてるなら俺の背後にいる青い髪のこいつに頼めよ、回復魔法は得意だから。」

「大丈夫ですただのオシヤレですから、そんな事より早く食べさせてください。」

「…。」

結局魔女っ娘さんには料理が振る舞われて私は骨つき肉の骨を貰いました、まるで犬みたい、魔女っ娘さんはドン引きでしたけど、きつとカズマさん達のように慣れてくれるでしょう。

ージヤイアントトード6匹の討伐ー

「爆裂魔法は最強魔法、その分魔法を使うのに準備時間が掛かります、準備が整うまであのカエルの足止めをお願いします。」

「良しやってやる！」

「ツ！…カズマあっちも」

「二匹同時か…遠い方を魔法の標的にしてくれ、近い方は…おい行くぞアクア、お前一応は元何たらなんだろ、たまには元何たらの実力を見せてみる」

「元つて何！ちゃんと現在進行形で女神よ私は！」

…会話に隙がありません、文章で書いたら大変でしょうね、というかアクアさんが声を荒げていたところ魔女っ娘さんが不思議そうに振り向く。

「女神？」

「おう、自称している可哀想な子だよ、たまにこういう事を口走るけどそつとしておいてほしい。」

「可哀想に…。」

二人は口を閉じた後、悲しげな表情でアクアさんを見つめる私もつられてアクアさんの顔を見ますが何もおかしな所は見つけられません、いったい何なんでしょ？

「な、なによ！打撃系が効きづらいカエルだけど今度こそ…見てなさいカズマ！今日こそ女神の力を見せてあ『ドゴオンツ!!』え？ま・さ・か…また零。」

カエルの上から落ちてきたのはおよそ半径1メートル級の隕石に似せた操陰【黒槌・クレーター】恐ろしいほどのスピードの操陰にカエルの喉周辺は完全に跡形も無く消え

ていた。

当然お肉が残るようにしましたけどこれでは…。

食べる所がかなり削られてます、改良の余地あります。魔女っ娘さんという他のカエルに向ってブツブツ言っています、これはこのカエルは倒さない方が良いでしょう、  
「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたまう、覚醒のとき来たれり、無謬の境界に落ちし理、無行の歪みとなりて現出せよ！ 踊れ踊れ踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり、並ぶ者なき崩壊なり、万象等しく灰塵に帰し、深淵より来たれ！これが人類最大の威力の攻撃手段、これこそが究極の攻撃魔法「エクスプロージョン！」」

魔女っ娘さんが一際大きな声を上げた後、カエルのいる位置に巨大な爆発、その後カエルの姿は無く大きなクレーターができていた、カエルの肉が勿体無いです。

「すげえ、これが魔法か！」

カズマさんが感心しているなか、カエル達がどうやら今の一撃で起きちやつたみたいで地中からニョキニョキと這い出てきました。

「さっきの爆音のせいで目覚めたのか…めぐみん！一旦離れて…え？」

魔女っ娘さんは無気力にうつぶせに倒れピクリとも動きません、その姿はまるで前回の私のように

「ふっ、我が奥義である爆裂魔法はその絶大な威力故消費魔力もまた絶大、要約すると限

界を超える魔力を使ったので身動き一つ取れません。」

「えええ…。」

カズマさんが情けない声を上げて魔女っ娘さんの方を見る。

「近くからカエルが湧き出すとか予想外です、ヤバイです喰われます、すいませんちよつと助けて！ウツ、クパットウツ!!?」

魔女っ娘さんは奇声をあげ無抵抗のままカエルに食べられて…。

食べ…ら、れて…。

食べ…食べら、食べられえつ!!

「ツ！食われんじゃねー！」

私がカエルに食べられた時の事がフラッシュバックしてしまい立ち止まっているとカズマさんは前に買っていった短剣を片手にカエルの体力をみるみるうちに削っていく。終いには倒してしまった。

〔依頼達成〕

ーカズマ sideー

「ううう、生臭いよお…」

「むう」

「カエルの中つて臭いけど良い感じに温いんですね。」

「知りたくもない、そんな知識」

結局、俺たちはクエストを達成し帰る途中。

動けないめぐみんは俺がおぶってアクアは零をおぶって行く事になった。最初カエルの粘液まみれになったためめぐみんを背負うのは嫌だったが零の操陰でめぐみんに付いていた粘液は綺麗に落とされた…のだがいつの間にかめぐみんを食ったカエルに呑み込まれていたアクアに付いていた粘液も落とそうとしたようなんだがアクアに触れた途端、操陰は消え零もぶつ倒れてしまった。何故かは知らんがどうやら操陰でアクアを触るとダメらしい。問題なのはめぐみんもだ…。

「爆裂魔法は緊急の時以外禁止な、これからは他の魔法で頑張ってくれよ。「使えません」は？」

「私は爆裂魔法しか使えないんです、他には一切魔法は使えません。」

おい、ちよつと待て。

「マジか…」

「マジです…」

「…え？爆裂魔法が使えるレベルなら他の魔法だって使えるでしょ？私なんか宴会芸スキルを習得してからアークプリーストの全魔法を習得したし」

「宴会芸スキルってなんに使うんだ…」

「私は爆裂魔法をこよなく愛するアークウイザード、爆発系統の魔法が好きなんじゃないんです、爆裂魔法だけが好きなのです！ 勿論他の魔法も覚えれば楽に冒険ができるでしょう、でもダメなのです！ 私は爆裂魔法しか愛せない、たとえ一日一発が限度でも…魔法を使ったあとに倒れるとしても…それでも私は爆裂魔法しか愛せない！ だって私は爆裂魔法を使うためにアークウイザードの道を選んだのですから!!？」

熱すぎる熱弁はわかつたから俺の背中で暴れないでほしい、もしカエルの粘液が取れていなくなつたらと思うとゾツとする。

「素晴らしい、素晴らしいわ！ 非効率ながらもロマンを追い求める姿に私は感動したわ！」

まずい、この魔法使いはダメな系だ、よりもよってアクアが同調しているのがその証拠だ、てか腕を強くにぎりあつてるし…俺はこの二回の戦いでこの女神ちつとも使えないんじゃないかと疑っている。はつきり言ってこれ以上問題児は…。

「そっかー！ たぶん茨の道だろうけど頑張れよ、ギルドに着いたら報酬は山分けで機会があつたらどこかで会おう！」

うまく切り離そうとしたのにめぐみんは今までの力より強くしがみつき離そうとしてくれない。

「我が望みは爆裂魔法を撃つことのみ、なんなら無報酬でも良いと考えています、そう…



アークウィザードの強力な力が今なら食費と雑費だけで、これはもう長期契約を交わすしかないのではないだろうか？」

そんな誘惑めいた言葉には引つかからんぞ俺は。

「いやいや、その強力な力は俺たちみたいな駆け出しの弱小パーティには宝の持ち腐れだ」

「いえいえ、弱小でも駆け出しでも大丈夫です、私も上級職ですけどレベル6ですから、ねえ私の手を引き剥がそうとしないでほしいです」

「いやいや、一日一発しか撃てない魔法使いとかないわー」

ツ！こいつ魔法使いの癖に意外な握力を…。

「おい離せ！他のパーティでも捨てられた口だろ、離せて！てかダンジョンにでも潜った時には爆裂魔法なんて狭い場所じゃ使えないしいよいよ役立たずだろ！」

体を強く揺さぶつても引き剥がそうとしても取れねー！ふざけるな、お荷物はアクアだけでもうんざりしてんだよ、零は何気にバイトで多く稼いだしカエルを粉碎してる実績があるからいいがテメーはダメだ。

「どこのパーティも拾ってくれないのです！荷物持ちでもなんでもします！お願いです私を捨てないで下さい！」

こんなことを続けていたら「小さい子を捨てようとしてる」とか「隣には粘液まみれ

になつてる女の子も連れてる」だとか「あんな小さい子を弄んで捨てるなんてとんだクズ」だとか「ヌルヌルのプレイなんて変態だ」とかありもしないことを喋ってくる女ギャグが集まってきやがった。

「ち、違ーう!」

俺が否定したのにいつさい取り合ってもらえない、それどころかめぐみんの目があからさまに悪い目をしているんだが…おい、まさか嘘だろ?

「どんなプレイでも大丈夫ですから、先ほどのカエルを使ったヌルヌルプレイでもムグウ」

「よしわかった!これからもよろしくなっ!」

結局、めぐみんの爆弾発言のせいで仲間に入れることになってしまった、ああこの先が不安だ…たく、この先が思いやられる。

## この記憶喪失に遭遇を★

「クエストの完了を確認しました、ご苦労様でした。」

「一気に4もレベルが上がってる、本当にモンスターを倒すだけで強くなるもんなんだ…。」

「初心者の冒険者ほど成長は早いですよ、ではジャイアントトードの買い取りとクエストの達成報酬を合わせまして11万エリスとなります、ご確認くださいね。」

…11万、四人で山分けすれば約27,500エリス程度、はあ…。命を落としそうになって3万ない程度、割に合わねーよ、一応他のクエストも見てみたが。

【依頼者／ホワイトウルフの飼い主】（迷子になったペットのホワイトウルフを探してほしい）

【依頼者／子持ちの母】（息子に剣術を教えてほしい、要ルーンナイトかソードマスターの方に限る）

【依頼者／魔法の研究者】（魔法実験の練習台探してます、要強靱な体力か強い魔法抵抗力に自信のある方）

うん、ざつと見てみたが…ハハ、無理。

「はあ、もう日本に帰りたい。」

募集できた仲間はある感じだし、この世界で生きるのは甘くない。

…。

「募集の張り紙、見させてもらった。」

「！」

「まだパーティーメンバーの募集はしているだろうか。」

「あ、えつと…募集してますよ？と言つてもあまりお勧めはししないですけども…。」

俺の前に現れたのは女騎士、それもとびきり美人の！歳上の美人ということで緊張し若干上ずった声になってしまった…それもこれも俺が前世で引きこもっていた事の弊害だろう。

「そうかよかった、私は貴方のような方を待ち望んでいたのだ。…私の名はダクネス、クルセイダーを生業としている者だ、ぜひ私を…ぜひこの…パ、パーティーに加えてもらえないだろうか。」

あれ？えつと…何でこの女騎士は若干興奮気味なのか知りたいんだが。

「ざつき連れていたドロドロの青い髪の少女は貴方の仲間だろうか？いったい何があつた

らあんな目に！」

「ああ、ジャイアントトードに捕食されて、「なっ!?想像以上だ。」∴。」

何だろう?この女騎士、なにか違和感を感じるんだが。

「い、いや違う!あんな可憐な少女がそんな目にあうだなんて騎士として見過ごせない  
!」

女騎士のダクネスはそう言いながら顔を赤らめこちらを力強く見てくる、正直言つて目がヤバイ。それにアクアが可憐な?うん聞き違いだろ。

それより俺の危機感知センサーが反応している、こいつはアクアやめぐみんや零に通じる何かがあるタイプだと!この巨乳はもったいない気がするがやんわり断っておくしかないな。

「いやあオススメしませんよ、一人は何の役に立つのか分からないし、二人目は言葉が一切通じないし、三人目も1日一発しか魔法が撃てないし、そして俺は最弱職、ポンコツパーティなんで他のトコをオススメしツイテテ!?」「まう!」「クツ!?」何だ!?」

ダクネスに腕を強く握られて悲鳴を上げた直後、何かが横切りダクネスを突き飛ばしたかと思えば俺の目の前に立ち塞がって∴∴

「零?なんでこんな所にいるんだよ」

もちろん言葉は通じず零の顔は横に傾いた、そして直ぐに俺の近くへ寄るとさつきダクネスに強く握られていた腕を心配そうに撫でながら突き飛ばしたダクネスを見て「ううう…」と獣のように怒りを込めて唸つてみせた、どうやら風呂から帰ってきた時、ダクネスに腕を掴まれ俺が痛がったのを見てダクネスの事を敵と思いきんで慌てて助けに入ったといったところだろう。

「う、いったい何だったのだ今のは？」

俺が名推理していると突き飛ばしたダクネスが朦朧としていた意識から戻ってきた、流石クルセイダーと言った所なんだろうか？

「大丈夫か？どこか「ああ…あの強力な一撃、なかなかのモノだった、ハアハア…」え？」俺が心配している途中でダクネスはそう言いながらさつきは落ち着いていたはずの息を荒げている、こいつはアクアやめぐみんや零に次ぎ中身がダメなヤツな気がしてならないんだが。

「さつきの一撃で言いそびれてしまっていたが貴方のパーティは私にはなおさら都合が良い。…言いにくかったのだが私は耐久力には自信があるのだが不器用すぎて、攻撃が全くあたらないのだ。」

…どうやら俺の危機感知センサーは正常に作動していたらしい、…ダクネスは性能がダメな剣士だった。

「なので！ガンガン前に出るので盾代わりにこき使つてく「ミウツ！」クフツ！！？」  
ダクネスが俺に急接近したせいで零によるダクネスへの本日二回目の操陰攻撃が炸裂した。

「ほら零、ドウドウ。」

「フシャー、フーフー。」

俺は零を取り押さえて宥めると、やっと落ち着いてくれた。

てか、完全に獣じゃねえか…。

「えつと、大丈夫ですか？」

「あ、ああ」

「流石に男が女性を盾代わりにするなんて…」

「望むところだ」

「それこそ毎回モンスターに捕食「むしろ望むところだ！」は？…。」

…前言撤回だ、ダクネスは性能がダメな剣士ではなく、性能”も”ダメな剣士だったようだ。

「さあ、私を貴方のパーティに！」

…ここは直ぐに去らなくては、俺はそう思い零を抱き上げる。

「あ！もうこんな時間だ、スミマセンがこの俺のパーティメンバー見ての通りの子供な

のでそこまで遅くまで起きてるのはあれなんでー、今日の所はこの辺で…オヤスミ!!  
?」

そう言つて俺は速攻で馬小屋へと帰つた。

…はあ、結局昼近くまで寝てしまった、しびれを切らした零が俺の上にダイブしてきて起きたわけだが…こいつまさか俺が起きないから朝食を食べてないってことは…無いよな、うん。

朝食もとい昼食を取るため俺はギルドを訪れたのだが入って直ぐに見える二階でアクアが何やら扇子から水を出したり頭に乗せた植木鉢から花を咲かせたりと男の冒険者たちにバカをやつていた。

「どーもどーも…あつ！見てみてカズマ、どうよこの新しく習得したスキル、水の女神たる私にふさわしいと思わない?」

うん思わない、そしてこの言葉を送つてやろう。

「宴会芸じゃねえか、この駄女神。」

そう言い放ち俺はめぐみんが食事を取るために座つていた席の隣に行き昼食を注文、



待っている間にスキルの覚え方なんかを教えて貰った。

簡単に言うとうとうやら職業が冒険者の俺は誰かにスキルの使い方を見せてもらい冒険者カードに表示されてそこにポイントを使えば習得が可能らしい。

「…つまりめぐみに教えてもらえば俺でも爆烈魔法がなるのか、なるほど。」

俺はめぐみに爆烈魔法の話は禁句だとしてここで改めて知る、めぐみは俺の独り言を聞くやいなや、一気に俺との距離を興奮気味に狭めた。

「その通りです!!? その通りですよカズマ、爆烈魔法を覚えたいなら幾らでも教えましょう!!? というかそれ以外に覚える価値のあるスキルなんてありますか? いいえありませんとも、さあ! 私と一緒に爆烈道を歩もうじゃ無いですか!!? 歩もうじゃないですか!!!」

なんで二回言ったんだよ、そして顔が近い。

「ちよつ! お、落ち着けロリっ娘、て言うか今3ポイントしか無いんだが…ん?」

「ロ、ロリっ娘? ……」

『ギルティ…』

めぐみの顔は驚愕と絶望に満ちた顔に変わり落ち込み気味に昼飯のひとつの人参を口にした…つてなんか聞こえなかつたか?

「ふ、この我がロリっ娘…。」

『&ジャスティス!』

ポフツ。ポフツ。ポフツ。

「……え?」

俺の頭上に全く痛く無いパンチが数発繰り出され振り向けばそこに居たのは高身長でロングヘアの巨乳、見た目は昨日来たダクネスに勝るとも劣らない美女だ。

「……えつと、俺に何か用ですか?」

「……分からないっス!けど無性にその幼女をまもらなければ!みたいな思った気がするっス。」

「は?」

全然状況が呑み込めないんだが、しかも幼女って、めぐみんのことか?

「この我の事を、幼女……」

めぐみんはさつきよりも更に顔を暗くし落ち込む、だがそんな事はつゆ知らず謎の美女はロリやら童顔やら言って追い打ちをかける、やめたげて!めぐみんのライフはもう0よ!

「うう!よくも我を「あ、その紅い眼もしかして紅魔族のめぐみんっスか?」!?なぜ私の名を?まあいいでしょう……名乗りましょう、ええ名乗りましょうとも!我が名はめぐ

みんな！アークウィザードを生業とし最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！！」

「ふふふふ…やはり私の紅のナマコに狂いはなかったスね、では私も名乗らせてもらうっス…我が名はまゆたん！あまたの言語を理解し失われし魔法、古代魔法を使いたい者！！」

おいこいつ今紅の眼つて言おうとしたろ、紅のナマコつてなんだ！あまたの言語を理解？自分自身が使ってる言語すらもあやういじゃねえか…つうかこいつもめぐみんと同じ」あの〃紅魔族かよ！めぐみんと新しい紅魔族のヤツは握手まで交わして…。

「あの、一応なんで私の名前を知ってるのか教えて欲しいのですが。」

「ああ、それはっスね…あれ手紙がない？「ちよつとまゆたん、手紙ならこっちにあるから」おお！サンキューっスゆんゆん。」

どうやら俺の後ろ側にいた子も紅魔族だったらしい、だって名前がゆんゆんだよ？そして二人のようにあれな感じの子なんだろう。

「あ、初めまして紅魔族のゆんゆんと言います」

…どうやらゆんゆんはまともらしい、良かった紅魔族は普通の奴がいなかったかと思っただぞ、まあ名前は変だが。

「紅魔族にもまともな奴は居るんですね、変な奴しかいないと思ってましたよ。」

そう言っつて俺は手を差し伸べて握手をするがゆんゆんは「あ、あはは…そうですね」と

言うが俺に向くはずの目は明らかに違う方向を見ていた。

「変な奴とは失礼なのです！それにゆんゆん、みんなで考えた自己紹介はどうしてしないのですか！」

「あの変な自己紹介(笑)を強要するな、てかめぐみんお前ゆんゆんと知り合いなのか？」  
「ええ、ゆんゆんは自称私のライバルを名乗ってしまって、それに一応同級生ですから。」

紅魔族には学校があるらしい、めぐみんみたいな変な名前ばかりな紅魔族の学校の出席簿とか随分とカオスじみてるな。

「つちよ！自称じゃなくて本当にライバルでしょ!?!というよりは、ひよいさぶろーさん私たちにまゆたんについての手紙をまゆたん自身に持ってこさせたい。」

「私の父が何故まゆたんについての手紙を？」おい…今父親の名前がひよいさぶろーつて…」ええ、ちなみに母の名前はゆいゆいです。」

アクアが言ったように紅魔族には変な名前しかないらしい。

「カズマ、今随分失礼な事を考えてませんか。…まあ、とりあえず読ませてもらいます。」  
「なんて書いてあるんだ？」

「…確かにまゆたんの事を書いてありますね、後私に個人的な事が書いてあります。まゆたんについてですが紅魔族かどうかわからないそうです。」

「は？分からないって…一体なんで？」

全く意味不明だ、赤い目で変な名前前で自己紹介が中二病くさい奴なんて紅魔族で断定  
だろ？俺が考えている間にもめぐみんの話は続いていく。

「どうやらまゆたんは父が発見した時、何も身につけておらず、さらに記憶喪失だったらしいのです、自分の名前が分からない程に。」「そおつすよー、まっぱっす！」

「え？じゃあ…まゆたんなんて名前は？」

「名前がないと不便だと父がつけたそうなのです。」

マジかよ、父親ネーミングセンス無さ過ぎるだろ、まあ分かりきってることだけでも。

「その後、とりあえずで冒険者カードを作ってみたらステータスがいろんな意味で凄まじかったそうです、それに知力の数値がありえない異常をきたしているとも。」

言っている意味が分からない、数値がありえない異常？ゲームならバグで済ませられるがここは現実だ、となると冒険者カードに異常が？

「おい、そのカード持つてるか？持つてれば見せて欲しいんだが。」

「おお、いいっすよー！」

…確かにいろんな意味で凄まじい、まず魔力量を筆頭に魔法関係の数値がありえないほど高い、これはアクアやめぐみんの比じゃないほどに冗談抜きで…なんだがその他の運以外全てが最低レベルの域にまで達している、頭をパンチされても痛くなかったのはこのせいだと見て間違いないだろう。

問題の知力についてはなんだが霧がかかって見えないというより認識ができないと言ったところなんだろうか？ 見えてるはずなんだが分からない。

「あの一、もういいっすか？」

「あ？ ああ悪い、サンキューな」

俺は：まゆたんに冒険者カードを返したが結局知力は見れなかった、だがこの様子だと最低ランクだろう。

「あ、ちなみに職業はアークウイザードっす。」

ちよつと待てえ？ 確かアークウイザードは高い知力がないとなれないはず：ますますわからなくなつた。

「まあ、我はこの街に来て最初にゆんゆんと会って、今みたいな話を話したり雑談したりしてずつ友になり、その後パーティメンバーの関係になつたんす」

「ずつ友！ 私なんかとずつ友になってくれたの！？ 唐突に” やっぱりゆんゆんと一生涯達とか無いわ” とか言うんじやあ。」

「大丈夫っす、相変わらずっすねゆんゆんは。」

「へー。そう言えばめぐみん、お前のことについてはなんて書いてあるんだ？」

これはめぐみんの弱みを握るチャンス！

「私の家族の中だけのことなので言いませんよ、どうせ私の弱みを握ろうとしてるだけ」

なのでしよう。」

クソ、こいつ勘だけはいいな、まあ良いか。

「なあ、さつき俺たちはスキルについて話してたんだがポイントをあまり消費しないで覚えられるお得なスキルなんて知らないか？」

この異世界は魔法がある世界だ、できるなら魔法の一つでも覚えてみたい、その点では紅魔族はうってつけだ

「そうですね、えーつと？」

「ちよつと良いかな？」

「「！」「」なんスか？」

…とうーびーこんてにゅーっス…

## この転生者にお宝を

「ちよつと良いかな？」

「！」「！」「なんスか？」

俺たちが背後から聞こえた方向を向くとそこには白髪ショートカットの女子、服装はかなり露出度が高いありがとう。

「…えつと、貴方は？」

現れた彼女はクリスと名乗ってきた、冒険者として登録しているようで職業は盗賊らしい。

「実は用事があるのは私じゃなくて…」

「ッ！」

俺の前に来たのは昨日の晩にやんわり断ったはずの女騎士のダクネス、クソツ、俺の意図が全然伝わってねえ！

「探した…というより少し前には見つけていて声をかけ続けていたんだが、全く気付いてもらえずにいたのだ。だがそちらの話も終わったようであるしな、昨日の話の続きと



いこう。」

「は？全く気がつかなかった。マジでなんなんだよ!？」

「それにしても一方的に無視され続けられるというのものなかなかのものだな!」

そんな事を嬉しそうな目で言っている、確信できた、こいつ早くなんとかしないと。

「昨日はパーティーメンバーの睡眠のために夜では中断されたが今は昼だ、その心配は無用だろう、さて私を貴方のパーティーにい「お断りします!」な!?!即断:だと!はあはあ……!」

ダクネスはまた昨日の様に顔を赤らめ息を荒くしている:何だよエロいな!だがこいつは色々とダメすぎる!

「ダメだよダクネスそんなに強引に迫っちゃさ?というよりさつき話してたのを聞いたんだけどさ役に立つスキルが欲しいんだよね?だったら盗賊のスキル何てどうかな?

「え?」習得にかかるポイントも少ないしお得だよ、何かと便利だしね「へー!」今ならシユワシユワ一杯でいいよ!」

「安いなあ!」

ちなみにシユワシユワとはビールに近いものらしい、しかし年齢制限はなくて大人が飲むものというイメージだけはある様だ、俺もこの世界にきてから何度も飲んでい

俺は即座にその条件を受けて足早に近くの広場へと零・クリス・ダクネスと共に移動した。てか何でクリス以外についてくるんだよ。

結局俺はクリスに導かれるまま街の広場の一角へと足を運んだ。その後は盗賊系のスキルの一通りの説明、確かに聞いた限り盗賊のスキルはポイント消費が少ないものっていくつもあつた。

「…とまあ、盗賊系のスキルには敵感知や潜伏とか色々あるけど、私のオススメはコレ！いくよよく見てて。」「ウツス！クリスさんよろしくお願いします！」

クリスは俺が喋り終えたのを確認すると右手を前に突き出し「ステイル」と声を発しながら突き出した手を握りしめた、その瞬間手の中から眩しい光が発せられ俺たちの目をクラました、その光も引き改めてクリスの右手を確認するとそこには大量の金が入った財布が…ん？確かクリスの説明ではステイルは対象者の持ち物をランダムで一つ奪うスキルと言っていたはず、あまり言いたくはないが俺はあんなに金は持っていない。

「それ俺の持つてるものじゃないぞ…てかお前のじゃないか？零。」

零は数字が読めないのだから無駄遣いなどは縁遠く当然金は溜まるばかり、俺たちのパーティーの誰かがいないと食事すらままならないほどに金に関して是最弱だ…が、最近には女冒険者が零を可愛がりしまくっているせいで食べ物には困らなそうに見える。ク

ソツ、羨まけしからん！

それはともかくあの量は零以外にない。

「あれ？確かに君のことを対象にステイールしたはずなのに。」

クリスは俺の持つてるものをステイール出来ないことを不思議がっている、俺は零の運が悪いせいに関係してるんじゃないかと思う。

「まあ、使い方は今やった様なものだよ」

クリスの解説が終わり零はクリスの持つてる自分の財布を取り返そうとするが不意に財布を高く上げて零の手を拒む。

「ねえ、私と勝負しない？君も盗賊スキルを覚えて仲間の財布を取り返して見せなあつ！ちよつと足揺らさないでつてば！」

あんまり返さないもんだから零の奴クリスの足を揺らし始めてやがる。

だがせっかく冒険者らしいイベントが起きたんだ、零もたまたま俺に金を渡そうとしてくるし文句はないだろう。

「いんげー」

俺はクリスの足を揺らし続ける零を引き剥がしこちらに引き寄せる、たちまち零は動きを止めて俺の足にしがみついた…考えてみればなんでこいつは大金を奪われても俺に止められたくらいで大人しくなるんだ？うん、分からん。

俺は気を取り直し自分の冒険者カードに新たに加えられた盗賊スキルを次々とポイントを使い習得していく。

「敵感知1ポイント…潜伏1ポイント…窃盗1ポイント…花鳥風月、花鳥風月？」

なんか今までと毛色が違うぞ？

「ああ、それはさつきギルドでああなたの仲間がやっていた宴会芸スキルだ。」

「宴会芸の癖に5ポイント!?高!これはいらぬな。」

アクアの奴前に宴会芸スキルを取得した後にアークプリーストの全魔法を習得したとか言ってたがいったいどれだけのスキルポイントを使ったんだよ。そんなことを考えながら俺は選んだスキル3つの習得を決定する。

「さあ!これで盗賊スキルは君のもの!いつでもどうぞ。」

「よし、何を取られても泣くんじゃねえぞ!」

「ふふくん♪当たりはこのマジックダガー、40万は下らない一品だよ。」

クリスはそう言いながら自分のダガーをちらつかせる

「おお!」

だがその後クリスは両手に地面に落ちていた石ころをいくつも拾い上げる。

「ハズレは、この石だ!」

「汚ねえ!」

そう、持っている物をランダム盗むステイールは石ころを拾ってしまう可能性も出てくる、クリスはこれでダガーを引き当てる確率がぐんと減ったと言いながら軽く笑って見せた。

ちくしょう、確かにいい勉強になった、ここは日本じゃない、弱肉強食の異世界だ、騙される甘つちよろい方が悪いのだ。

だが俺は決意を決めだぞ！

「やってやる！『ステイール』！」

俺はさつきクリスがやった様に右手を前に出し拳を握る、すると手から光が発せられ光が止んだと思うと手の中に物の感触があった。

「よし、とりあえず成功！」

何気に横を見ると零がステイールのポーズと同じ様に手を突き出して握るを繰り返している、わかってないなこれは。

「結局何が？…おお！当たりも当たり！！大当たりだー！！」

何と俺のステイールした物は、あろうことか！ありがたい事に！素晴らしい事に！クリスの白いパンツ！！

「嫌〜！パ、パンツ返して〜！！」

クリスはパンツのあった場所を押しさえモジモジしている、うむ、いい眺めだ！そして頼んだ内容はわかった、だが断る！

「何という鬼畜の所業…やはり私の目に狂いはなかった！」

ダクネスが何か言ってるが俺には関係ない！

俺はクリスからステイルしたパンツを手に交渉を始めた…。

―零 side 1

カズマさんが髪の毛の白いショートヘアの人、略して白ショートさんのパンティをゲツチュしてウーロン状態になってから数分後、白ショートさんが私にお金を返してくれました、それに見慣れない財布も、パンティと交換でしようか？

そういえばあの物取りの技何度同じ動きをしてもできませんでした、何ででしょう？

『緊急クエスト！緊急クエスト！冒険者各員は至急正門に集まってください！』

急に街には鐘を叩く音と“ムダ”にデカイ乳のギルドのお姉さんの声が響き渡る。

「な、何だ!？」

「今年も来たか。」

「ちよūdい、有り金全部取られたしね。」

「?」

街の住人は慌てて家の中に入っていく、店を出していた人達は店をしまい、結局道に

は正門に向かう冒険者だけになってしまった、ちょうどその中にアクアさんたちがいました。

「なんだ！なにがくるんだ!？」

「皆は私が守る、カズマも私から離れないで。」

：カズマさんと以前の金髪騎士が近いです、カズマさんは昨日のこと忘れているのですか？いつでも反撃できるように備えます：ん？門とは逆の方から何か来ますね？緑色でしょうか？

「緊急クエストって何だ？モンスターの襲撃なのか？」「言ってなかったっけ、キャベツよキャベツ。」

カズマさんが焦っているところアクアさんが籠を持って明るく言った、というかあの緑色は：野菜？のモンスターなんですか？近づいてくるごとにキャベツにしか見えなくなつて来ましたよ。

『しゅうかk\*\*\*!!』

集まった人達が一斉に声をあげたので慌てて私は耳をふさぐ、皆さんうるさ過ぎますよう。

「\*\*\*\*\*!」

アクアさんもそれにつられるように声を上げているようですが耳を塞いでいる私

には届きません。

「街に飛来したキャベツをすべて収穫せよー

「ゆけー!」『おおお!!』

初めてギルドに来た時、最初に会った冒険者のおじさんが声をあげると他の冒険達も呼応するように雄叫びをあげ一斉にキャベツみたいなモンスターへと走り出していった。

「カズマは異世界から来たから知らないのも無理ないわね、いいわ、私があのキャベツのこ」キャベツを知らないとみたが説明が必要かね?」あつちよつと!」「よろしくお願いします…えつと?」

「ミスターk、皆からはそう呼ばれている、では説明しよう、あれはキャベツ…野菜だ、あいつらは大きくなり収穫の時期になるとああやって飛んでいく、食べられてたまるか!と言わんばかりに…つたく野菜の分際で(ボソツ)。キャベツたちは大陸を渡り、海を越え最期は未開の地にて死するらしい。つまり朽ちるのであればそいつらを捕まえて俺たちの食料にするというのが今回のクエストの内容である。ちなみにたまにレタスつてのが混じってるから、そいつらは安いから気をつけな。」「ありがとう、ミスターk。」

結局、どこから来たおじさんはカズマさんとひと通り喋った後、キャベツモンス



ターの群れへと消えていきました。

「皆さん、今年もキャベツの収穫時期がやってまいりました！今年のキャベツは出来が良く、1玉につき一万エリスです！できるだけ多くのキャベツをこの檻の中に収めてください！」

無駄乳が声高らかに紹介らしきことを言ってるんですけど私には分かりませんよーだ、ちくしよー。

…冒険者を見ていると皆さん倒すのではなく捕獲します、今日のクエストは捕獲のよう、私は操陰で作った触手を約10本出して応戦を開始した。

さあ！乱獲じゃー！

## このTS少女に服装を★

私は10本の触手を動かそうとしたのですが、何本しか思い通りに動いてくれない、どうやら複数動かすにはコツがいるようです、結局触手は3本になり次々とキャベツ達を絡め取っていく。

「なんだあの触手は！まさかあれがあの時私を突き飛ばした正体か！くっ、なんていやらしい動き方をするのだ！だが私は屈しない、あの様な触手に負けるものか！カズマ、私はいって来る！」

「行くなよ!?アレは味方だ、倒さなくて良い。」

あの女騎士が剣を持って突っ込んで来た、とりあえず一本を女騎士に向け臨戦態勢を取る、けどどうやらカズマさんが止めてくれた様です、いつかぶっ飛ばす。



…結局キャベツとの戦いは夕方まで続きました、女騎士は倒れた冒険者を庇い体一つでキャベツたちの猛攻を防いでいましたけど…私が気を利かせてあげて女騎士を含めた戦闘不能な冒険者の前に防壁を作ってあげたというのに女騎士だけは残念そうな顔でこつちを見るんです、それに魔女っ娘さんの強力な魔法から他の人たちを守った時

だって……。そうそう、私の捕獲量はひとつの触手だけでも百を超える勢いでしたよ、それにあの後、扱える触手が一本増えて4本になりました、これで人の手足を縛り拷問：なんて冗談ですよ冗談。

ところで今は夜ご飯の時間、料理はまさかの昼間のキャベツを炒めたものばかり、けどこれがなかなか美味しいのです、私はシャキシャキと音を立てながらキャベツを頬張ります。

「まさか貴方が昨日面接に来た人だったとはね、貴方の鉄壁の守りにキャベツ達も攻めあぐねていたわ、さすがはクルセイダーね！」

「い、いや私などただ硬いだけの女だ、不器用すぎて剣もまともに当たらない。」

「カズマ、何故こんな良い方なのに断ったのです？」

「……」

カズマさんは皆の発言に嫌な顔をして一つ溜息をついた。結局私が女騎士な仲間入りを知ったのは次の日の朝になった。

「【クリエイトウォーター】！」

朝、今日のギルドではカズマさんが高らかに声をあげると手のひらから水がどこからともなく現れてテーブルにのったコップに注がれた：あれ、魔法としか思えませんですけどあんな弱いのです？まるで便利などこでも給水装置じゃないですか。あ、出した水

飲みましたね。

「初級魔法じゃこの程度だろう、だが確かにミスターKがいう通り長期的なクエストもあるだろうから飲料水の確保は必須なんだろうな、まあアクアもあれで元水のなんちゃらだし水の確保はすでに出来てたかもしれないが、それにしてもスキルも覚えて俺も冒険者らしくなつて来たかな。「カズマ」？」

別の声のする方を向くとまたあの女騎士、オークにでも捕まつてくつころ（「くつ、殺せ」と言いたげな屈辱的なエロ展開）になれば良いのに。

「キャベツの報酬で鎧を直してみたのだがこんなにピカピカになった！どう思う？」  
「なんか成金趣味の貴族のボンボンが着ける鎧みたい。」

「私だつて素直に褒めて欲しい時もあるのだが…カズマはどんな時でも容赦ないな。」

女騎士、ニヤニヤするのやめて欲しいです、さつきまで落ち込んだみたいでしたけど何故変わるんですか。

「今はダクネスに構つてる余裕はないぞ、ほらあれ、お前を超えそうな勢いのその変態をなんとかしろ」

カズマさんが指をさした方向を見ると魔女っ娘さんが自分の杖を撫で回したり頬ずりしたりして息を荒げてました…かわいいですね！

「ハアハア、魔力溢れるマナタイト製の色つや！ハアハア…。」

何やらほんわかした雰囲気はこの後、一言で終わってしまうなんて思ってもみませんでした。

「なんですつて!」

「!」

「ハアハア…。」

突然アクアさんが声をあげたかと思うとあの無駄乳の胸ぐらを掴んでいたのです…いいです、もつとやってくださいです、ザマアです。

「ちよつとあんたどういう事よ!どれだけキャベツ捕まえたと思つてんの!!」

「それが…「何よ」アクアさんの捕まえて来たのはほとんどがレタスでして…。」

「…なんでレタスが混じつてんのよー!」

え?なんでアクアさんが泣いてるんですか、全然ザマアじゃないじゃないですか、乳デカ女(泣)!

「確かにレタスの換金率は低いな」

「よくわからんがそうなのか?…つてなんで零が泣いてんだよ。」

アクアさん諦めないで!そのワガママボディ、特に胸に一発でも入れて凹ます勢いです!だからこつちに帰つてこないでえ。

「あーこつち来るー」

あー無理です、カズマさん完全に諦めムード出しまくります。

「カーズーマーさん♪今回のクエストの報酬はおいくら万円？ちなみに零のも教えて欲しいなーなんて。」

「…俺は100万ちよい、零は70万ちよい。」

「なっ！…てあれ、零ってかなりの数捕まえてたんじゃ？」

「実はレイさんが捕まえた物もほとんどがレタスで…つてちよ!!」

「じゃあなんで零は70万も貰ってるのよ！不公平よ不公平！」

無駄乳リンチ再開ですねアクアさん！胸をへこましたれーです！

「た、確かにレタスは買い取り単価は安いですがレイさんの場合量で押し切ったといえますか、安さを量でカバーしたといえますか…。」

アクアさんはあの無駄乳から手を離し私の方へと近寄って来てサイフを指さした。

「ねえ、零？お金ちよーだい♪」

アクアさんは人差し指と親指で輪っかを作りお金を催促して来る、色々お世話になってますし良いですよ。私は必要な額がわからないのでサイフごと渡す。

「じゃあ遠慮なく「だめに決まってるだろうが！」ちよつとカズマ何するのよ！」

私のサイフはアクアさんに渡る事なくカズマさんのチョップで終わりを迎えました。

「…じゃあカズマが私にお金を頂戴よ、私今回のクエストが儲かるってふんでこの店に

十万近い借金があるから早く返さないといけないの、ツケ払う分だけで良いから！貸しなさい。」

「はあ、嫌に決まってるだろうが、これは馬小屋脱出の資金にするんだからな。」

「そりゃあカズマも男の子だし、たまに隣でゴソゴソしてるの知ってるから早くプライベートな空間が欲しいのはわかるけど「分かった！分かったからちよつと黙ろうか!?!」計画通り（ニヤリ）」

結局私の代わりにカズマさんがアクアさんにお金を与えましたね…アクアさんの口をカズマさんが押さえてましたし何か弱みでも握られてるんでしょうか？お可哀想に。

「しまった、あれは買つとかないとな…よし、零も行くぞ。」

「?」

カズマさんは思いついたように私の手を握り、ギルドを出てきた。



「おお！カズマがちやんとした冒険者に見えるのです！レイは…。」

「うむ…何だかごっこ遊びに見えるな、だが冒険者に近付いてはいるぞ！」

「ジャージと和服じゃあファンタジー感台無しだものね、まあ零はコスプレみただけど。」

「…ファンタジー感？コスプレ？」

私が連れていかれたのは服屋さん、確かにジャージで異世界は合わないですよ。

私はというと一見魔法使いと思えるような服に動きやすい短いズボンで可愛く決めてみました。

「レイの服装、見る限りかなり高いのではないですか？」

「ああ確かに高かった、零が今まで溜め込んだ金と今回の報酬をかなり使っちゃったからな。」

カズマさんは喋りながら薄くなったサイフをヒラヒラと見せつける、この服にかなりかかったみたいです、でも欲しかったんですもん。

「儉約なカズマがまさかそこまでお金を使うなんて何かあったのですか？」

「まあな、こいつに合うサイズも少なかったんだがその中で三番目に高いやつから零が離れてくれなくてな、結局買う羽目になった。」

「ちなみに上位二番と一番は？」

「装飾やら宝石やらがある貴族のボンボンが家に飾るようなやつだった、この装備とかなり値段に差があったからな、この装備でよかったとも言える」

「あー。」

「では二人が着替えたところで早速クエストに行きましょう、それもたくさんの雑魚モンスターがいる奴です、新調した杖の威力を試すのですよ」



「いや、一撃が重くて気持ちいい、凄く強いモンスターを！」

「いいえ、お金になるクエストをやりましょう、ツケを払ったから今日のご飯代もないの！」

「三人ともまとまりねえな、じゃあジャイアントトードが繁殖期にはいつていて町の近くに出没しているらしいか」「それはやめましょう！」「何故だ?」あー、この二人はカエルがトラウマになってるんだ食われて粘液まみれにされてな」

「ツ！粘液まみれ！」

「お前、今興奮したろ？」

「…してな「はうっ！」なんだ!?!」

みんな私を放置で酷いです、ホッペ膨らまします、というわけでアクアさんにダイレクトアタックです。

「またアクアがやられたのかよ、まあしょーがないアクアだからな。」

「そうですね、アクアですし。」

「た、たまには私もやってもらえないのだろうか…。」

「ちよつとみんな私の扱い酷すぎなんですけど!?!」

「まあまあ、クエストボードでも見ようぜ…ってあれ?なんか高難易度のクエストしかない気がするんだが?」

「申し訳(わけ)ないません」

「?」

あ、無駄乳、スイカ割りしましょう、お前スイカな、二回もできますし。

「実は最近魔王の幹部らしき者が街の近くに住み着きまして…。「え!」その影響か、この近辺の弱いモンスターは隠れてしまい、仕事が激減しております。」

「まじか…」

「?」

ーカズマ side ー

前々から思っていたんだが、零はもう寝てやがる、いささか寝るのが早すぎる気がする、まあやることある時は寝ずに頑張ってはくれるが俺より年上なはずなのに早い、これも俺が毎晩ゲームをしていたからなのか?これが普通なのか!?!…うん、多分違う、零幼児化してんのか?

「全く、幹部だか何だか知らないけどもしアンデットだったらみてなさいよ。」

アクアは内職の造花を作りながらふと愚痴る、まあ俺も内心若干ふざけるなどは思っているがな。

「つまり腕利きの冒険者や騎士が王都から派遣されてくるまではまともな仕事が出来ないって事か。」

まあ魔王の幹部だから悪どいことをするのは当然といえば当然だがこっちからしてみればはた迷惑な話なのだ。

「見てみて改心のでき！買取単価上がらないかしら♪」

異世界で胸躍る冒険か…。

当分クエストが受けられないことを知った俺達のパーティはいったん別れることになった。

一文無しのアクアはその日からバイトで金を稼ぐことに。

ダクネスは実家で筋トレをずっと言っていた。

そしてめぐみんと俺は…。

この操陰使いに敗北を…。

「カズマ、私の爆裂に付き合ってもらえませんか？」

「…は？」

うん、こいつは何を言ってるんだ？

「えつとまず一から説明をし「師匠！爆裂魔法また一日一発打ちに行くんっスね！」まゆたん？てかめぐみんなが師匠!？」

…めぐみんの話によると魔王の幹部が住み着いてからというもの、毎日街の近くで爆裂魔法を撃っていたらまゆたんと偶然出会い意気投合、それからというものめぐみんはまゆたんに嬉々として爆裂魔法を覚えさせていたらしい。

「じゃあ二人でいけばいいじゃないか、お前が動けなくなったらまゆたんにおぶつてもらえよ。」

「私もそれは考えました、でもダメだったのです、カズマは覚えているでしょう？まゆたんのステータスが魔法関係と運以外は底辺だったのを。」

覚えていて、まさかあんなステータスが存在するのかと思っただほどだ、俺としてはあの知力のステータスの方が気になるが…。俺はすぐさまめぐみんの問いかけに首を

縦に振った。

「それでレイがない時一度おぶってもらおうようお願いしたのですが。」

「全く持ち上がらなかつたつスね、結局我も疲れて二人で数分ぶつ倒れてたつス。」

つまり俺はめぐみんをかついで帰れというのかよ……てあれ？

「零がやってくれるなら俺はいらないんじゃない？」

「今度から撃ちに行くところは体力的にまゆたんには無理そうなのでカズマにはまゆたんをおぶってもらいたいです。」

「分かつたやってやるよ！」

……何故俺がすぐさまOKしたかというとおぶる相手がまゆたんだからだ、おぶるだけであのおっぱいの感触が背中を感じれるのはいいことだ、うん。

「では早速行きましょう！」

俺達は街の外へ出るため門へと向かつた、だがそこにはこの世界にあるはずのないものが轟音とともに空から出現していた。

「へりだど!!」

そう、俺達の前にあつたのは真っ黒なへり、見た目は軍が持つていそうな感じだ、それがバラバラと音を立てながらゆっくりと降りていき、降りたと同時に消えていった。

「おいおい、こんなのまで作れるのかよ……。」

ヘリが消えた場所に立っていたのは案の定零だった、まあ当然といえば当然か、他にできる奴を俺は知らない。

結局、俺達はめぐみんが先導するせいでヘリには乗れずに徒歩で行くことになった。少し残念だがまゆたんの柔らかい感触が味わえるのはグツジョブだ！

…てかどんだけ進むんだよ、この程度進めばめぐみんの爆裂魔法は街には被害が出ないはずだ、なのにめぐみんのやつは止まる気配がない。ちなみに零は新しく買った服と着ていた服を交替して使おうらしい。

「もうこの辺でいいだろう？ 適当に魔法撃つて帰ろうぜ。」

「ダメなのです！ 街からはなれたとこじゃないとまた守衛さんに叱られます。」

「おい、今お前またって言ったな、音がうるさいとか迷惑だつて怒られたのか。」

凶星だったようめぐみんは少し恥ずかしがりながら頷いた。

歩いた結果、俺達は近くの森の少し奥に廃城らしき建物とそれを一望できる丘を見た、若干薄気味悪い城だがここはめぐみんの爆裂魔法の犠牲になつてもらおう。

「アレとかどうだ？ あの城随分ボロボロだし、人もいないだろ。」

「確かに廃城のようですね…そうですね！ あれにしましょう。」

「よろしくお願いしますっス！ 師匠。」

まゆたんが頼むとまんざらでもない感じで魔法の詠唱を始めた、毎回聞いているが相変

わらず長い。

「く深淵より来たれ、「エクスプロージョン」！」

放たれた魔法は見事に廃城に命中し爆音をたてた、それと同時にめぐみんはいつものように魔力切れで倒れ込んだ。

「おーい、帰るぞ零。」

まゆたんは案の定めぐみんを観察して爆裂魔法を覚えようとしていた、零は何故か分からんが崖の近くでゴソゴソと何かをしているようだったんだが呼ぶと言葉は理解してないにしてもめぐみんを見て声を出した意味が分かったようでめぐみんを担ぎ、俺の後ろに付いてきた。

こうして、俺達の新しい日課が始まった、俺も他の二人もやることがないようでめぐみんと共に毎日あの廃城に通い、めぐみんは爆裂魔法を放ち続けた。

それは寒いひさめの降る夕方…。

「(以下略) ロージョン！」

それは穏やかな食後の昼下がりに…。

「(以下略) ジョン！」

それは早朝の散歩のついでに…。

「ふんー！」

「60点、か。音圧が物足りない。」

どんな時でもめぐみんはその廃城に爆裂魔法を放ち、めぐみんの傍らで魔法を見続けた俺は、その日の爆裂魔法の出来がわかるまでになつていた。

そして今日も。

「【エクスプロージョン】！」

めぐみんの放った爆裂魔法はいつものように轟音を上げながら廃城に爆発を起こしていった。

「お！今日のはいい感じだな、爆裂の衝撃波がズンと骨身に浸透するかのごとく響き、それでいて肌を撫でるかのように空気の振動が遅れてくる。ナイス爆裂！」

「ナイス爆裂…、カズマも爆裂道が分かってきましたね、どうです？！いつそ本当に爆裂魔法を覚えてみては。」

「我は必ず物にしてみせるっス！」ハイハイソウデスネー…。うーん、でも将来余裕があつたら習得してみるのも面白そうだな、そんな時は頼むなめぐみん。」

「いい心がけです。」

「バラバラバラバラ…。」

「！」



俺とめぐみんはその音を聞き逃さなかった、へりだ、前に霧が見せていた真つ黒なへり、乗れることはないと思っていたが今出したということとは。

「カズマ、あれは乗れということですよ、アレには興味がそられます、乗せてくださいカズマ！」

「皆早く乗るつすよ、さあカサツカに乗って帰るつすよ。」

カサツカ？何故まゆたんはあのへりの事をカサツカなんて言うんだよ。

「なあまゆたん、なんで今カサツカって言ったんだ？」

「それは見た目からしてカサツカ……て、あれ何で知ってるんスカね？」

予想外の答えと本人が1番分かってない事に戸惑いながらも俺達はカサツカと呼ばれているらしいへりに乗り、帰路についた。

「将来……か。」

転生特典がああ駄女神とかいつときの気の迷いで決めるもんじゃないな選択を誤った、更には一緒に転生した同じ日本人の零とは話ができなくなるわ女の子になるわけで、人生ハードモードだわ。なんて事を次の朝に馬小屋で考えていた。……でもまあへりは良かったな。

「ただいま、みてみて！お店の賄いが余ったから持って帰って良いって、儲かっちゃったね。」

…はあ。本当に何でこんなヤツを選んだんだろ俺。

「なあアクア、言いたくないけどさ…」

「ん？何？」

「ぶつちやけ魔王討伐なんて無理だと思えてきたんだが。」

確かにめぐみんと零は高火力、アクアは回復だけは良いしダクネスは壁役的には優れている、だが最強の布陣ということは一切無く欠点が長所の足を引っ張るところか引きちぎる勢いだ。

「俺には物語に出てくるようなすごい力なんてなかった、魔王軍と戦うのは先に送り込まれた強力な能力だの装備だのをもらった連中がやれば良いんじゃないか？」

そんな事を言ったらアクアは涙目だし、やだなー。

「そんな！そんなんじや私帰れないじゃない！」

「そんなセリフはもつとこう、女神として勇者を導いたり、勇者が一人前になるまで魔王を封印して時間を稼いだりしてから言え、この宴会芸しか取り柄のない穀潰しが!!」

俺の怒りを洗いざらいぶちまけてみたら案の定泣き崩れた、俺の苦勞もせめてわかれ駄女神。

「カズマは結構エゲツない攻撃力がありますから、遠慮無く本音をぶちまけると大概の女性は泣きますよ。」

めぐみんはギルドで俺をなだめるようにそう言った。

そう、あれからアクアは機嫌が戻らず今は昼、あの夜から同じ状態で泣きじやくっている…あ、今こつち見やがったな、嘘泣きかよこいつ。

「緊急！緊急！全冒険者の皆様は直ちに武装し戦闘態勢で街の正門に集まって下さい！」

―零 side 1

無駄ち…受付の人が声をあげるといきなり慌しくなった、またキャベツかな？と思っただがその考えは崩れ去った、目の前にいるのは首なしの馬に乗ったデユラハンだった。

デユラハン…確か大抵は頭と首から下が離れていて厚い鎧を身にまとったキャラだったはず、目の前にいるのはまさにそんな感じ。他にも赤髪で赤いマントをつけたやつやライダースーツを着て馬の形を変えてバイクとして乗って彼氏とイチヤイチャしてるやつやらがいたはずだけど今は関係ない。

「俺は先日近くの城にこして来た魔王軍の幹部の者だが…毎日毎日毎日毎日！俺の城に毎日欠かさず爆裂魔法を撃ち込んでくる頭のおかしい大バカはだれだアアア!!」

声を荒げた感じを見るとどうやら怒ってる様子、あれ？あの姿って確かお城の中に入った人ですよ。見えなかったですけど操陰の触手で大体の形は分かりましたし。

「爆裂魔法ついたら…」

カ●ジみたいなザワザワしてきました。

「おお！我らの事っスね師匠、名乗り出ましよう」

「ちよ、ちよつとまゆたん離すのです！」

魔女っ娘さんとお城に一緒に来てた巨乳が魔女っ娘さんの手を引いてデュラハンの前に出た。

「呼ばれたので出てきたっス、鼻塩塩（話をしよう）っス。」

「まさか二人だったとはな…たくつ、おまえらか！毎日毎日爆裂魔法をポンポンポンン放ちおつて！俺を魔王軍の幹部だと知つての事か！「知らないっス。」は？ええ？」

なぜかデュラハンがすつとんきような声を出してますね、ちよつと笑えます。

「いや知らなかったんス、マジツス」

「お、おう…。じゃあこれからは爆裂魔法魔法などを撃ち込まぬようにな、分かつ「マジイヤっス」何で!？」

さつきから面白い声をあげるもんだから笑いが止まりません本当に本当にw。

「フプツ。」

「こいつほんとと声が分かるんじゃねえかって程反応してるんだが…。」

…カズマさんが私に何か言ってますけど何言ってるんでしょう？カズマさんの言葉

に私は反射的に首を曲げて（？）のポーズになってしまっていた。カズマさんも言葉が無理だと改めて分かったらしくため息をついてデュラハンの方へと向き直った。

「何故やめない。まあ良い、そうなればこちらにも考えがある、汝、死の宣告を、お前は一週間後に死ぬだろう。」

そう言つて黒っぽいものがまとわりついた手で巨乳の方を指差した。

「ホヒュン」

「へ？え？あれ…何故だ、俺の呪いを弾いただど!?ありえん、一体どれほどの魔法耐性を！ええい代りにお前が受けるがいい、死の宣告！」

「ガキンツッ！」

デュラハンの鎧と剣が重なり合い金属音が門の前に鳴り渡り、デュラハンの体はその反動で仰け反らせることに成功した。

「ツッ！大剣使い、まさかこんな少女が俺の死の宣告を邪魔するとは！つてアアアア!!」

そう、私が魔女っ娘さんの危険を察知し突っ込んで何かよくわからない攻撃を回避したのです、でも何ですか大きい声出して。

「その黒い触手！お前がああ諸悪の根源か！」

なにか騒いでますね、忙しい人だなー。

「えっと、何があつたんスか？」

「こいつは俺の体を弄んだんだ！」「は？」毎日毎日爆裂魔法の度に触手に絡まれて俺の身体中を這いずり回って、変な扉が開くところだったんだぞ！」

「…あの時かよ。」

カズマさんは呆れた表情でデュラハンに話しかけていました、何でしょね。

「女子供をいたぶる趣味はないが、俺にあんな無礼を働いた報いだ、その身をもって償え。」

「ザシュツ！」

デュラハンが剣を振り下ろすのが見えた、多分デュラハンに斬られた…みたい、血が出てる、熱くて寒い。みんなごめんね、意識が…遠退く。

私の意識はそこで切れた。

「零ー!!」

## この操陰使いに不穏な影と希望の兆しを★

「零ー!!」

零がデュラハンに斬られて動かない、アクアに治療イヤめぐみんなに爆裂魔法撃つてもらって一時撤退か…ちくしょう!こんなことならめぐみんなに廃城を勧めるんじゃないかった!

「お前ら冒険者にとつては仲間の死はさぞ辛いだろうな、これに懲りたら…ん!」

何故デュラハンが(!?)を浮かべるのかと思つたがその正体はすぐに分かつた。

「なんだよ、これ…。」

零だ、しかも髪が黒いが多分これは操陰だろう、それに体がまるで糸が切れたように体に一切力が入っていない、まるで魂が抜かれたように。

「本当に零なのか…? (ボソツ)」

「ふん、まさか生き絶えてアンデットに堕ちたか?ではこれは俺の配下になつたということの良いのか?...よし、ではまずはここにいる冒険s yブファア!!」

零(?)は操陰を伸ばしデュラハンに攻撃を仕掛けた、しかしその数が今の状態が普

通ではないことを物語っていた。零が出せる触手形態の操陰は単純な動きなものでせいぜい六が限界らしい、しかし今目の前にあるのは一つ一つ形の違う歪な動きをした触手、数はざっと見て二十はある。：デュラハンの奴はもう復活してるしどうする。

「ゴツドブローー!!」

「\*\*\*\*\*!!」

思考をめぐらしていると突如アクアが零へと突っ込み光を帯びた拳を叩きつけた、案の定零(?)の操陰は消え去り操陰を失った零は地面へと力なく落ちた。

「よしー!」

「よし!じゃねーよ!何やってんだアクア!」

「え?だってさつきあのデュラハンがアンデットに堕ちたって::私は女神だもの、迷えるアンデットになってしまった仲間を::ん?おかしいわ。」

「お前がおかしいのはいつものことだろ。」

本当にいつもいつもおかしなことを言うやつだ、しかしアクアは反論する。

「違うわよ!零の体は生きてるわ、それに傷まで治ってる、でも肝心の魂がこの体には無いの。」

「え?」

— zero side —



眼が覚めると見覚えのある場所で椅子に座っていた、周りは白一色で神秘的、アクアさんにあつた場所で間違いなさそう。

あのデュラハンに斬り殺されたのかな…。

「大丈夫、まだ貴方は死んでいませんよ。」

声のした方を見ると女の人。…それにしても大きい、どことは言いません、死んでないならどうして此処に…。

…!? 私なんて言ってるのが今分かった!?

「驚くのも無理はありません。そうですなまず自己紹介から始めましょう、私は女神エリス、今こうして会話できるのは女神としての力なんです。」

なるほど初めまして零です胸。

「え、えっと、実は私達は一度会っているんです、貴方にその記憶は無いですが。」  
「どういう事ですか? 胸。」

「…はい、実は零さんの転生でのトラブルはこちらの不幸です、申し訳ありません。」  
エリスさんはそう言うのと私に深々と頭を下げた。

で、不幸とはどう言うことですか? 胸?

「え、えっとそれが今までは死者一人を女神が一人ずつ応対していたのですが今回試験

的に二人同時に一人の女神で対応させる事になりました、さらにその女神も転移させると言うイレギュラーも発生してしまい、そのせいで結果零さんが文字・言葉を失うという事態に陥ったのです。」

なるほど、だから椅子もカズマさんだけだったとそういう事ですか胸。

「…あのさつきから語尾に胸って付ける口癖的なものをやめていただきたいのですが。」

口癖じゃないですよ胸、貴方の事ですよ胸。

「私の名前は胸じゃ無いですよ！」

私胸無いだど!!そんな胸をしてよくもそんな事をこのド《自主規制》ツチが!

「落ち着いてー!」

◆◆◆

…。

少し熱くなりすぎた、今度から気をつけなきやですね。そう思い私は女神エリスの方へと顔を向き直した。先ほどはすみません、続けてもらっても大丈夫です?」

「ええ、大丈夫です。」

女神様まじ神対応、女神だけに!

「…えつとそうですね、順々にお話ししましょう、まず私達が合うのは初めてでは無いという事から、まだ貴方が転生前のお姿だった時、トラブルが発覚し貴方は一度ここに呼

ばれました、そこで今回の件が解決するまでの間だけ、転生の特典のように好きなものを一つだけ持っていたというわけです。」

つまり言語治るまで特殊能力一つ貸したると、あれ?…私何ももらってませんよ? そう私は転生の特典にこの姿を、それ以外は何も無い。

「貴方はその幼児体型を望んだのです。」

はあ!? なんて! 詳しく教えてプリーズ。

そう意識を集中させるとエリスさんはゆっくりと話し出した。

「私もそれは聞きました、何故そんなものを願うのかと、そして貴方は『ロリコンだからさ』と。」

アホー! 過去の私のアホー! なんてそんなこと言うかな!? 他にあるでしょテレパシーとか!

「私もそれは言いました、そして貴方は『ロリコンだからと言うのは本当だよ、でも他にもテレパシーだと言葉が戻り能力が無くなればテレパシーを使った戦術が崩れる、そして会話ができ無ければ行動が幼児的になりやすい、だからそんな行動をしても大丈夫な幼児体型を望むんだよ、ぶっちゃけかわいいと思うしね。』と。私自身貴方がどこまでが本気でどこまでが冗談かはわかりませんでした。」

ふむ、意外とやりおるな過去の私。

あ、そういえば何で今なんです？ 私が呼ばれたのは、クエスト受けてない日もあった筈ですけど？

「…それはここには通常死んでからしか来れないからです、ですが無理をして瀕死の状態で何とか零さんだけこちらに来れるようにしたんです、そして今回のデュラハンを利用して…。」

え、利用？ デュラハンを呼んだの？ 私を瀕死にさせるために。デュラハンを呼んだり出来るのであれば魔王も…と思っていました。

「いえ、デュラハンも含めて現世に私達は直接的には干渉できません、ただ貴方の攻撃される可能性つまりヘイト値を上げただけです、今回はその前にこの状態に至ってしまいました。…こんな方法でしか行き来出来ない事、本当に申し訳ありません。」

まあそつちにも事情はあるですよ、しようがなしです、ちなみにあの世界に戻ったら言葉が分かるようになってるんですか？

「残念ながら原因が分かかっていない以上現在零さんに言語を付与する事は出来ません、今回はスキルとしてついている不具合を修正します。」

スキルなんてあるんですねあの世界は！じゃあきつとレベルもあつてレベルが上がること新スキル覚えるとかですかね、私はいくつ覚えたんでしよう♪ニヤニヤ

「えつとスキルはレベルが上がることに貰えるスキルポイントを消費して覚える必要が

∴」

∴スキルのレベルがない世界樹の迷宮みたいな感じでしたか、はしやいじやつてた自分がバカみたい(棒読)。

「世界樹の迷宮というのはわかりませんが多分そういう風だと思います∴あの大丈夫ですか?」

ダイジョウブダ、モンダイナイ。

「で、では続きを話しますね、今までは文字・言語習得不可というスキルのせいで名前すら覚えられないでしたがそれを消すことで次からは名前も、頑張れば現地の言葉も理解できるようになるはずですよ。」

どうやらその言葉を聞いて舞い上がってしまったみたい、ニヤケてる、確実に。

「それでは今からスキルを消し、貴方を今の体へと戻します、よろしいですか?」

最後に質問、なんで前の記憶がないのですか? 質問するとすぐに答えは帰ってきた。

「はい、貴方が『そっちの方が面白いから出来れば消しておいて』と言っていたので。」

やっぱ私のアホー!!

「それではまたお会いしましょう。さようなら。」

エリスさんは答えるとすぐさまお別れの挨拶をし、私の意識は暗闇へと落ちていった

∴。



「にう」

可愛らしいうめき声をあげて私は多分無事異世界へと帰ってきました。

知らない天井、知らないベッド、綺麗なベッドで気分がいいです。

「おーい、零が目を覚ましたっすよ。」

あの魔女っ娘さんについて回っていたポイントが声をあげると奥にいたみんなが顔を出し口々に「よかつた」「めをさまさないかとおもいました」などと saying していた、意味はわからないけどちゃんと言葉として分かる、どうやらエリスさんはちゃんと saying していた通りに仕事をしてくれたよう。

転生の時から一緒のカズマさんとアクアさん

爆発する魔法？が使える魔女っ娘さん

一応仲間の金髪騎士

みんなの名前も呼べるようになるのかな、ワクワクです、さてと、

「待たせたな。」

「零が喋った!?!」

「!?!」

# 言葉を知りたいTS娘

## この記憶喪失にハテナマークを

私の意識が戻ってから数日、昔の記憶を頼りに日本語をいくつか覚えた。

「待たせたな」はメタルギアのスネークが登場シーンでよくいうセリフ、起きた時びつくりさせようとして思い出した、と言つても意味は分からず今後は多分使わない、変な言葉じゃないとは思いますが挨拶じゃなかったはず。

「やらないか」これはホモのエッチなセリフだけど他にもパロディでよく「ポケモン勝負やらないか」とか「デュエルやらないか」みたいに使われていたから推測できる、でも確かに使えますけど日本語だからカズマさんとアクアさんしか分かりません。

他の言葉はちらほらとある程度は推測が立つ、それに歌はモノによつては歌えるようになったものもある、でも今は…。

「これは 杖 です。」

「つえ」

「これは 剣 だ。」

「けん」

めぐみんちゃんとダクネスはギルド内で自身の武器を持ち名称を教えてくれる、それに私は復唱する、そう私は今言葉を覚える真つ最中、この数日でかなり覚えた…と思う。「おーい、どうだ？ 順調か？」

そんなことを言いながらカズマさんが様子を見にきた、私がさつき覚えた武器の名前を言うとカズマさんはよしよしと頭を優しく撫でてくれる、やっぱりカズマさんには撫でる才能がありますね、そう思いながら私はカズマさんの手の温もりに身を任せる。

「カズマ、私はレイに自己紹介を教えたのです、さあカズマに見せてやるのです！」

カズマと自己紹介2つ言っているのでさつき教えられたものをカズマさんに見せたいんでしよう、私はそう思い口を開く。

「わがなわレイ、くおきまほー、そういんおあやうもお。（我が名は零、黒き魔法、操陰を操るもの。）」

「何が言いたいのかは大体わかった…めぐみんアホか！ 何あの変な自己紹介教えてんだよー！」

カズマさんは私の自己紹介が終わると少し間を置きつつも直ぐさまめぐみんちゃんの方を向いきなり怒鳴りつける、怒る理由のわからない私は直ぐさまカズマさんめぐみんちゃんの間に入り仲裁を開始する…と言っても。

「カズマ、めぐみん おこる ちがう！（カズマさん、めぐみんちゃんを怒ってはダ



メですよ!」

「レイ……!」

このざま、数日でこれならいい方だと思っけど正直伝わらないと思う、でもめぐみんちゃんも喜んでるし良いかな。

「…零、これは教育なんだ、教育なんだ。」

「きよーく?」

「あー…、まあオシオキだよ」

「オシオキ?めぐみん わるい?」

「ああそうだ」

「うー、オシオキ いい。」

「レイツ!」

めぐみんちゃんには申し訳ないですけどいけないことは教えちゃダメです、NGです。

「てかなんで教育は知らないでオシオキは知ってたんだよ。」

カズマさんの問い掛けに今度はダクネスが「私が教えた」と自信満々に名乗りをあげる、ダクネスはオシオキを始めヘンタイ・ごーもん（拷問）・ドエムやろう（自主規制）・「自主規制」など変な言葉ばかり教えてきます、まともなものと言えばきしどー（騎士

道）・けんし・つーぎ（忠義）・せめ・うけ　みたいに騎士関係がおも、それを聞いたカズマさんは案の定呆れた表情。

「まあいい、それより今日はクエストだ、アクアが金金うるさいからとにかく行くぞ。」

ー水源の湖を浄化せよー

今回のクエストは湖を浄化して欲しいというもの、どうもこれはアクアさんが単独でおこなうらしく今アクアさんは檻の中、これでモンスターの攻撃を防ぐらしいです…大丈夫でしょうか？

ーカズマ sideー

「はあ！ふっ！まだだ、もっと踏み込んでみる！」

「とう！たあ！」

「私、出汗を取られてる食材の気分なんですけど…。」

ようカズマだ、聞いての通り俺の前ではアクアが体育座りをして浄化させようとひたすら湖の水に体をつけている。

対して　俺の後ろにいるのは零とダクネス、零がいつかデュラハンにリベンジしたいとかでダクネスは攻撃が当たらないなりにもちやんと教えてやってるらしい。

「はうわ！」

「操陰か！ふっ！」

零はダクネスの反撃を警戒し後ろに下がりながらも操陰を槍状に変形させ襲いかかるがダクネスは剣で受け止め零との距離を詰める、クルセイダーは伊達ではないということか、俺はアクアをめぐみに任せしばらくこの特訓を見ることにした。



「湖が見違えるようなのです、クエスト完了ですね。」

「みず きれい はいる！」

「ちよー！」

零は服を脱ぎ操陰を上手く使いスク水を創り出したちなみに旧スクの方をだ、しかし今はそんな事よりはいるのはまずい、だってあれは。

∴結果俺の思っていた通りになった、アクアが浄化したものはやはり操陰には向いてないらしく湖とて例外ではない、はいると同時に消えていき全裸の零が浮かぶだけとなった。

「アホか！」

結局アクアによる浄化は成功した、モンスターは出てきたらしいが檻に入っていたおかげで無傷だ、無傷なんだが∴。

「おいアクアそろそろ出てこいよ、もう街に着いたぞ、その様子は悪目立ちする、報酬も全部お前のもんだから出てきて受け取ってこいよ。」

「いやよ、外は怖いわ、だからこのまま連れてって。」

このざまだ、いくら言ってもモンスターの攻撃がトラウマになってるよう出てきそうもない。

「女神様じゃないですか!？」

「!？」

驚いた、アクアをちゃんと女神だと言えるのは俺と零のような転生者だ、それが今偶然にも俺達の前にいる。

だがそいつは俺達には目もくれずアクアの入った檻を無理矢理こじ開けアクアに呼びかけ続けていた、つかどんだだけ馬鹿力なんだよ。

「おい、私の仲間に馴れ馴れしく触れるな、お前何者だ。」

—零 side —

ダクネスはいきなりアクアさんの名前を連呼する金髪男を止めに入る。

その間にアクアさんとカズマさんが喋っていると急にアクアさんが元気になった、カズマさん何言ったんでしょ? アクアさん帰る時から元気ないから気になってましたけど。

「さあ! 女神の私に何の用かしら…ってあんた誰?」

「僕ですよ! 御剣響夜!」

アクアさんは金髪男を見るなり誰？発言、アクアさんも知らないんでしょうか？

金髪男は剣を出すとまた長々と話が続く、とりあえず私はカズマさんの後ろへと隠れることにした、息をすると汗の匂い、でも不思議と臭くないというより落ち着く、これも女性化の影響だろうか？

「はあー!?女神様をこの世界に引きずり込んで、しかも檻に閉じ込めて湖に漬けた!?君は一体なにを考えているんですか!」

金髪男は素晴らしいながらカズマさんの体を激しく揺らした、その姿はヤクザがチンピラを脅すが如く龍が如ゲフンゲフン、カズマさんの後ろに隠れていた私は仕返しにと足で蹴るが鎧が硬くてダメーじなぞ皆無である。

アクアさんが止めに入るけどどうやら火に油なことを言ったらしく白熱するだけだった。

「おい!やめないか、礼儀知らずにもほどがあるぞ!」

ダクネスが無理矢理間に入るとなんとか止まり次は私達を品定めするかのよう一人一人を見つめてくる、マジキモス。

「:クルセイダーにアークウィザードか、それにこんな小さな弱そうな少女、君はこんな優秀そうな二人がいるのにアクア様とか弱い少女を馬小屋で寝泊まりさせて恥ずかしいとはおもわないのか!」

カズマさんをこの男は説教しているようですけどカズマさんに限って説教されるようなことなんかありません！カズマさんは私を見捨てなかつた、一緒にいてくれた、いいことしたら撫でてくれた、居場所をくれた、守ってくれた：今までのことが鮮明に思い出され目には涙が溢れてくる。

「君達二人、これからはソードマスターの僕と一緒に来るといい、高級な装備品も買え揃えてあげよう、君ももう泣かないで、怖いモンスターに怯えなくていいんだ、僕の家に来たら不自由ない生活を約束しよう、勇者の名「ふん！」ぐっ！何故!?!」

私は男の左肩脇腹に操陰を帯びた拳で一撃を食らわせる、右肩に食らわせなかつたのは騎士道の一つだ、腐っても同じく魔王を倒そうとするものをわざわざ再起不能にするのはあんまりだ、だがひとつ言っておくことがある。

「カズマ わるい ちがう！（カズマさんは悪い人なんかじゃない）」

「零……。どうやらパーティメンバー全員あなたのパーティには行きたくないらしいんで、これで失礼します。」

「ま、待て！アクア様をこんな境遇には置いていけない、そうだ勝負をしないか？君が勝つたらなんでもひとつ言うことを聞こう、僕が勝てば……。」

「アクア……か？そんなの誰か受けるかってん？零？」

私はカズマさんの体に操陰を纏わせ鎧へと形を変えていく。

「しよーぶ　する　だいじよーぶ」

カズマさんは私の意図をわかつてくれたようで「勝負を受けるぜ」と金髪男に言ってくれた。

「いい心掛けだ、さて始めようか。」

金髪男はそういうと剣を勢いよく当てた、しかし流石は操陰だ全くもって歯が立たない、カズマさんもそれを見てたか笑いをし自分のターンだとばかりに攻めつとした時まばゆい光が辺りを照らし気づくとカズマさんの手にはあの男の剣が握られていた、片手では重いらしく重力に沿って男の頭に落ちていった。

「勝ったな、零。」

「うい。」

カズマさんの言葉に私は頷いた、そのまま馬小屋に帰ればよかったんだが。

「その剣を返しなさい、それはキョウヤにしか使えないんだから！」

あの金髪男の取り巻き女らしい人二人に絡まれた。

「え、マジで？」

「マジよ」

カズマさんの質問にアクアさんが答えた。

「ま、良いか、とりあえず勝ったから貰っとく。」

「ちよつとまつ！ひい…。」

私が触手を出し取り巻きに対してヤラシイ動きをちらつかせると二人は速攻で悲鳴をあげ逃げていった、早く帰りたいのです、眠たい。

「カズマジやないっスか！」

「カズマさん達はクエストの帰りですか？」

目の間にはまゆたんとゆんゆん…あ、ねむい。

「ん、その剣何っスか？見せてく、っ！」

そう剣を持った瞬間、まゆたんはいきなり苦しみ始めた、一体何が、カズマさん達は心配そうに見つめるばかり。

「だ、大丈夫か？」

「さあ、その魔剣グラムとともに旅立ちなさい、選ばれし勇者よ…女神様、必ず僕が魔王を打ち倒し世界を救つて見せます…はい期待していますよ。ぐはっ。」

苦しんでいる様子から一変、機械的に喋り始めたかと思えばまゆたんは意識を失った、その様子を見ていた私は眠気があつたことなど忘れ心配で頭がいっぱいになってしまった。

「今のは日本語？でもなんで？」

カズマさんは他のことが気になるようでしたけどゆんゆんの口からは「またなの」と



いう不安に満ちた言葉が飛び出した、どうやら前にもあつたらしくその時はアクアさん、カズマさん、私の名前が出てきたらしい。

「では行ってくる。」

そう言葉を残しダクネスはゆんゆんの代わりに倒れたまゆたんを持っていくらしい、まゆたん、お大事に。

## このTS 少女にリベンジを

あれから一夜過ぎ今はお昼でギルドにいる、結局あの時まゆたんはダクネスに担がれた直後、意識を取り戻したけどあの奇妙な出来事については何も記憶にないらしいです。

「はあ、今回のクエスト檻の修理代20万引いて10万エリスだって、わたしが壊したんじゃないのに、あいつまた会ったら絶対にゴッドブロー撃ち込んでやるわ。」

アクアさんは今回のクエストの報酬が不満らしいです、そういえばアクアさん私が言葉を使えるようになった時からお金の話ばかり、本当に女神なんでしょうか？疑わしくなってきましたよ。

「佐藤和真！」

そのけたたましい声とともにギルドに入ってきたのは昨日の金髪男、男はズカズカと歩いていきカズマの目の前まで詰めよるといきなりにも話し始めた。

「君の噂は色々な人から聞けたよ、パンツを剥ぎ取る変態だってね、他にも女を孕ませては捨てているそうじゃ無いか！子連れクズマだってね、君の隣にいる少女がいい証拠じゃ無いか！」

「ふざけんな誰が親子だ！つーか俺はまだ童貞だよチクショウ！」

金髪男に対して怒るカズマさんはなんだか悲しそう、と言うよりドーテーとかチクショウとかどういう意味でしょう？

金髪男は怒るカズマさんには目もくれず前と同じようにアクアさんに目を向ける。

「アクア様、僕は必ず魔王を倒します、だから僕のパーて「ゴッドブロー」!!？」はうう  
!。」

「ちよとあんた、昨日壊した檻の修理代払いなさいよね！30万よ！30万！」

アクアさんは自身が殴って倒れた男の首元を掴み檻の修理代を請求した、増えてる気がしますがど良いぞもつとやれい♪リア充爆破死路…しろでしたね、誤字です。

アクアさんはお金で機嫌をよくしたのかすぐさまカウンターで注文、あ！カエル頼みましたね私もひとつくださいよ。

「こんなことを言うのは虫がいいのも理解している、だが頼む魔剣を返してくれないか！代わりに店で一番いい剣を…ってどうしたんだい、お嬢ちゃん？」

だいたい男の言うことがわかったのでとりあえず教えよう、剣のことを。

「けん うる おわる」

「え？佐藤和真、か…彼女は一体何を言ったんだい、まさかとは思うが剣を売「売ったよ、お前の剣は。」チククショウ！」

カズマさんの通訳を挟んで男は発狂してギルドから飛び出していきました、ザマア！  
「緊急！緊急！全冒険者の皆様は直ちに武装し戦闘態勢で街の正門に集まって下さい！  
特にサトウカズマさんのパーティは大至急でお願いします！」

…ついに来たのでしょうか、この時が。

目の前には前回と同じ様にデュラハンのベルディアが門の前で馬にまたがっていた。

「なんであいつが？もう爆裂魔法は打ち込んで無いのに。」

「ええそうですカズマ、レイに言葉を教えるのに時間を費やしてしまい城には一回も行ってませんとも。」

「なぜ敵討ちにすら来ないのだ、この人でなし共が！」

ベルディアのキレ発言によりベルディア訪問の原因追求は直ぐに幕を閉じた、私は門の前にいる人を掻き分けながらそれを聞いていた。

「お前たちはあの少女の死に対して敵討ちに来ようとは思わなかったのか！前回の反応を見る限り女冒険者になりに入り込まれてはいたではないか、それが仲間どころかその女冒険者すら来ないとは一体どういうこと…ってあれ？」

ベルディアは私が見える位置まで出て来ると言葉を止め驚いた表情で固まってしまった、しかし何を思ったかなんとか立て直したみたい。

「なまえ レイ、べうであ たたかう する。（私の名前は零、ベルディアあの時のリ

ベンジです。」

私はそう言葉を知らないなりに使うと腰から大剣を抜きベルディアの方へと刃先を向ける、それを見たベルディアは少し考えた様子を見せた後、口を開いた。

「…なるほど、あの時の雪辱を晴らしたいということか、確かに真つ当な騎士だった生前の俺なら受けただろう、だが今の俺は魔王軍幹部の一人、まずは小手調べからだ、行け！アンデッドナイト達よ、冒険者の相手を「グザッ！」なっ…何だと。」

ベルディアが出したゾンビはいともたやすく私の操陰の「地黒槍・ニードルフォレスト」により戦闘不能になった、ベルディア以外は呼びでないのです…けどアンデッド系は物理がほぼ効かないらしく現に刺されているゾンビは元気に手足をジタバタしている、操陰も魔法などではなく単なる体の一部みたいな物なのだから当たり前だ、つまり。

「めぐみん！ ばくれつ うつ ひつよう！」

「最高ですよレイ、芸術的シチュエーションです！くらえ我が最強の攻撃魔法、エクस्पロージョン!!」

放たれた爆裂魔法は轟音とともにベルディア達をとらえゾンビを一人残らず消し去っていった…やっぱりベルディアはさすがに倒れませんか。

私は武器に操陰を纏わせていき構えなおしベルディアに剣を再度向けた。

「はははっ！おもしろい、おもしろいぞ！まさかこんなにも早く倒してしまおうとはな、では、望み通りに俺が…相手をしてやる！」

そう言うのとベルディアは一瞬で私の一歩手前まで詰め寄ると真上からその巨大な剣を振り下ろす、私はそれを操陰を纏わせた剣で受け止め押し返す、私が創ったこの子の力を甘く見てもらっては困りますよ、まったく。

「くっ…、一体何処からそんな怪力を！なら。」

力技が効かないとわかるとベルディアの攻撃は力を抑えて手数を増やしてきた、そして手数を増やして攻撃6撃目その剣は私が構えている方向とは逆の方向から首に向けて叩き込んできた…が、私は冷静に操陰を片手に纏わせいともたやすくガードをするがベルディアはそれを察知しすかさず剣の進行方向を変え剣に向かってくる、どうやら握りが甘かったようで唯一の武器を私は跳ね除けられた。

「やはりまだ子供だな、戦闘経験が少ない、だがまあ子供にして驚異的な強さと褒めてやるどころか。」

ベルディアはすぐさま二撃目を自信満々に打ち込もうとしているが実はそれほどピンチじゃない、さつきとは逆の腕に操陰を纏わせて防御すればいいだけだ、しかし。

「クリエイトウオーター！」

「くっ、誰だ水なんかかけて何のつもりだ！」

背後からカズマさんの声とともに水がベルディアの方へと飛んで行った、それをベルディアは盛大に避けていたが何故そこまで避けたのだろうか：お風呂とかが嫌いなんでしようかね？カズマさんは何か考えがありそうなので一時撤退、その間で飛ばされた剣の元へと私は向かった。

「こうするんだよっ！」

その間にもカズマさんの策略は続いているようで今度は冷氣でベルディアが避けきれなかった足の水を魔法で凍らせて氷に？

「くっ、ステイール…なにっ!? 剣が取れない!？」

あの魔法だ、いつものように光を出しパンテ…ランダムに物を奪える魔法、しかし光が収まった後のカズマさんの手の中には何も掴まれてはいなかった、代わりと言ってはアレですがベルディアが「格がちがう」だとか「バカめ」だとか口数が増えました、とりあえず作戦失敗なようです。

さてと、では反撃開始ですよ！

「ハアアア!!」

私は掛け声とともにベルディアに接近し連続攻撃を叩き込んだ、案の定油断していたベルディアは流石に全てには対応しきれずに十数撃ほどの私の斬撃をモロに食らった、もつと、もつとだ！まだ倒すまでにはダメージが足りない、しかし。





たんでしようか？

「【クリエイトウォーター】！」

カズマさんが水魔法を使うとベルディアはまた大げさに避ける、もしかして水タイプが効果ばつぐんだったんでしようか？

ともかくカズマさんはその一撃で何かを確信したようで他の冒険者に声をかけるとその冒険者とともにあの水魔法をベルディアにぶっかけ始めた。

ーカズマ side ー

あのベルディアってやつ弱点はわかった、水だ、水なんだが俺の魔法じゃあ当たりもしないし当たったとしても大したダメージじゃない、これならさつきみたいに零が物理で攻撃してたほうが…いや、零に頼りつきりじゃダメだ、くそっ！何か無いのか！

「ねえ？カズマったら一体何を遊んでるの？馬鹿なの？」

こいつ！俺の苦労も知らずによくそんなことを…ってそうだよこいつだよ！これなら勝てる！

「よし、アクアいいところに来た、あのデュラハン水が弱点なんだお前水の元anntらだろ、あいつに鬱憤ぶちかましてこい。」

「ちよつと、元anntらつて何よ！現在進行形で女神よ私は！いいわよ、見せてやろうじゃない女神たる私の本気を、見てなさいよカズマ！ギャフンと言わせてあげるんだか

らー！」

何だか嫌な予感がするんだが、アクアが張り切るといつもろくなことになるからな、だが今回は違ってほしい、てかもうすでにアクアの魔法やバ気な詠唱なんだが、なんかダメな気しかない。

「セイクリッド・クリエイトウォーター！」

アクアがそう言うのとデュラハンの頭上から大量の水が出現し当たり一帯に広がった、デュラハン逃げようとしてはいたがさっきの零のダメージが効いているらしくちゃんと動けず魔法は直撃した…したのはいいんだが威力が強すぎて俺を含む冒険者達に流されているどころか街の壁が水の勢いで崩れていく、止めようにも俺自身流されてアクアを止められないし、ヤツパ最悪だよこの駄女神！

―零 side―

アクアさんが水を出して数分、ようやく歩けるほどまでは水が引いた、けどこれは大丈夫って言うていいのやら、私はアクアさんが魔法を使うのを見て即座に操陰を消したのでいつもの戦闘不能にはならなかった、途中結構水を飲んでしまったけどなぜか美味しかったのは気のせいじゃないはず。

「何を考えているのだ、馬鹿なのか、大馬鹿なのか貴様ら…。」

色々損害はあるがとりあえずベルディアは瀕死の状態、そこにアクアさんとカズマさ

んが立ちはだかる、私はカズマさんに恩がある身、むやみに手を出すのは恩を仇で返すようなもの、そう思い私はせめてその一部始終を見ることにした。

「今度こそお前の武器を奪ってやる!」

カズマさんはまたステイールを使う気らしい。

「弱体化したとはいえ駆け出し冒険者のステイールごときで俺の武器は取らせはせんわ! ！まとめて始末してやる!」

ベルディアは成功を否定しカズマさんとの距離を近づけていく。

「ステイール!!」

…光が収まりカズマさんが持っていたのは予想外

「あ、あの。」

ベルディアの頭だった。(ていうかベルディアめっちゃ弱気。)

「カズマ、カズマ」

「ん? 何だ零。」

私は今日決着をつけに来た、あのデュラハンであるベルディアと、だからこれは返したい、そして最後の勝負がしたい、だから…。

「カズマ あたま かえす。レイ べうであ たたかう。」

カズマさんは少し考えた様子でいたが私にその頭を渡し「よし、いいぞ」と言ってく

れた、ベルディアは終始不思議がつていたが構わない、勝負が出来ればそれでいい。

「レイー！」

「？」

声の方を向いてみるとダクネスが自身の剣を差し出していた、使えと言うことらしい……やっぱり決闘といえればこれですよ、剣と剣がぶつかり合う真剣勝負、私はダクネスから借り受けた剣を強く握りベルディアの方へと向かう。

「……ふん、なぜこんなことをしたのかはあえて聞かまい、それにどうせこのダメージだ、今なら駆け出しのターンアンデッドですら耐えられる気がしない。そうだな、最後までいい真つ当な騎士として戦うのも悪くないか。」

頭が戻って話し終えた後、私は無言でその言葉を返す、ベルディアはゆつくりと戦闘体制をとり決闘の準備は整った。

「魔王軍幹部が一人ベルディア、いざ参る!!？」

「レイ、いくー！」

私達二人言葉を言い終わらないうちに剣と剣が交わり火花が上がる、顔は見えないけれど私もベルディアもきつと笑っているだろう。

ベルディアが強い一撃を叩き込んでくれば私もそれを防ぐため強い一撃を叩き込む。

ベルディアが連続攻撃を繰り返せば私はそれを防ぎつつベルディアの体に一つ、また

一つと傷を作っていく、私も一部防ぎきれずにダメージを負う。

：今回のベルディアとの闘いで突き・回転斬り・ジャンプ斬り・天空、エアスラッシュ・ツバメ返し・居合斬り、思いつく限りで再現可能な剣の技はやり尽くした、結局今は互いに連続攻撃を浴びせあっているだけになってはいるが互いにダメージは入っている、私の体にもかなり無理がきているようで多分明日は筋肉痛だろうな、などと思いつながらもすぐさまその考えを隅にやりベルディアとの闘い一点に絞る。

ふと何を思ったかベルディアは急に連続攻撃をやめ重い一撃を浴びせてきた、その時ガラ空きになった腹部に攻撃していれば良いはずなのに私はベルディアとの勝負に夢中になりすぎ真つ向からその一撃を跳ね返す体制を瞬時にとる、戦闘狂、当に今の私にふさわしい言葉だ、だけど悪くない、ああ悪くない、そう思っているうちにベルディアの一撃にかけたためいっばいの反発の力は上手くベルディアを仰け反らせ大きな隙を作った、これが最期だと言わんばかりに手や腕に力を込め、ベルディアの胴体を勢いよくぶった切った。

「悪くない最後だ……。俺は騎士として……。死ねるのだから、……。さっきのアークプリーストよ、浄化を……。頼まれて……。くれないか？」

ベルディアの胴体は真つ二つには切れていないにせよ鎧を突き抜けて深くまで突き刺さっていた、アクアさんがベルディアに何かを頼まれたようですが途切れ途切れの言

葉を聞き取るにはまだ練習不足なようなのだがなんとなくわかる気がする、今心を満たしているのはちゃんと真剣勝負をしてもらったことへの尊敬と感謝だ、相手の最期は見届けておきたい。

「分かったわ、【ターンアンデッド】：迷える魂よ安らかに。」

アクアさんが魔法を使うとベルディアは光とともに消えていった。

私はついにベルディアにリベンジしたのだった。

## このロリコン幼女に休暇を★

ベルディア討伐から1日が経った、その日もまた私とカズマさんはギルドに向かう、アクアさんがいないので聞いてみると先に行っているらしいです。

「聞いてくださいカズマ！ダクネスが私にしゅわしゅわはまだ早いというのですー  
！」

「イヤ、私は「ちよつとーおそいわよカズマーヒック、ウヘヘー。」だ、大丈夫かアクア  
？」

ギルドに着くとこの有様、アクアさんは完全に出来上がっちゃってます…面白いです  
ねこれ。

「お待ちしておりました、実はカズマさんのパーティには特別報酬が出ています。」

「え!?まじで!なんで俺達だけが?」

「おかね?」

「お前のパーティの嬢ちゃんと姉ちゃん二人の活躍がでかい、後はあの爆裂魔法の嬢  
ちゃんの攻撃、それにあんたはあのデュラハンの弱点をあんな短時間で見つけたんだ、  
当然の報酬さ。」

「あれ、私は?…」

「そうよ、私達の天使レイたんのあの功績は評価されて当然よ!」

「レイたんっておい…。」

カズマさんが私の取り巻き?の言葉に呆れてますね、なんででしょ?

しかしどうやらみんな私達だけ別に報酬をもらうのは文句がないよう。良かった、何か恨みを持たれたら大変でしたよ。

「カズマさんのパーテイには功績を称え、三億エリスを与えます!」

「二三!」 「?」

…知らない数値出てきましたけど、私にわかるように言ってくださいよチヨット、どうするんですかこれ、みんなと一緒に驚けないじゃないですか…あ、カズマさん集合かけましたね。

「大金が入った以上俺…と独り立ちできるまで零ものんびり安全に暮らして行くから、な!零。」

「?」 クエスト しない イヤ。」

カズマさんはいきなりおかしなことを言うますね、のんびり安全になんてこつちにきた意味ないじゃないですか、後私が元どおりになるにはもう一度瀕死にならなきゃですし。



「零の言う通りだ、私も強敵と戦えなくなるのはとても困る「困りません!」」

「私も困るのです、カズマ達について行き魔王を倒して最強の魔法使いの称号を「得ません!」ってお前らに俺は魔王を倒すなんて一言も言っていないぞ!」アクアがたまに言っていたのです、私達は魔王を倒すために冒険者になったの、と自慢気に。」

「おいアクア、お前出来もしないのにそんなこと言ってたのかよ。」

カズマさんの視線はダクネス、めぐみん、アクアとテンポよく流れていった…面白い。「だ、だって私達そのために来たわけじゃない!」

「これだけの大金があれば俺は遊んで暮らせるんだ、魔王討伐なんて危ない事やってられ「あ、あの〜。はい?」

めんどくさくさくになりそうになりかけた時、丁度ち…受付のお姉さんが会話に潜り込んで来てくれた、感謝感謝です。

受付のお姉さんは紙を取り出しカズマさんへと手渡した。

「うっ!」

…う? カズマさんの顔を見てみると明らかに嫌な顔、嫌な予感しかしない。

「実はアクアさんの召喚した大量の水のせいで町の外壁などに大きな被害が出ておりまして…で、でも全額弁償とはいきませんよ、魔王軍幹部を倒した功績もありますからね、だからその分差し引いて一部の4000万だけでも修繕費を払ってくれ…と。」

「どうやらアクアさんのせいで借金ができたそう、その金額がまた大きい、1万の4000倍だ、一体カエルの唐揚げがいくつ買えるのか想像しただけでも凄まじい金額だ。」

「カズマ、私達の冒険はこれからですね。」

「ふふ、まだ安全な暮らしは遠そうだなカズマ、借金返済のため明日は金になる強敵相手のクエストに行こう、一方的に攻められて：考えただけで武者震いが！」

「じゃ、借金は等分でいいわよ？」

「いんぎよ かいひ」

結局、私達は借金持ちになってしまったのだがベルディアを倒してから1日しか経っていない、ということもあり英気を養うため今日位は仕事はしないという事になった。

アクアさんはギルドで宴会芸を披露、カズマさんは友達とギルドでやけ酒、めぐみんちゃんはまゆたんと爆裂道について語り合うらしい、ダクネスは下着を着ないで街中をランニングだそうです。

ちなみに私の予定はというと久々に少女を愛でるため街中を歩いて回ろうと計画している、クエストの帰りなどでよく見かけますがこの街にはなかなか子供が多いのです、出来ればその少女達と遊んだりして是非とも友達になりたい、ちなみに私は真のロリコンですからね、少女が悲しむことはしないのですよ、少女を幸せにしてこそそのロリコンなのです。

「おいー」

「？」

今日の完璧な計画を妄想していると不意に後ろから子供特有の声が聞こえ反射的に声の方向へと向くとそこにはシヨタが一人に幼女が二人立っていた。

「おいお前どこの子なんだ？」

「名前はなんて言うのよ？」

「…どこにすんでるの？」

うお、イキナリの質問責め、でも子供はいいですね、素直で可愛くて、素直じゃなくても可愛いんですけどね。

「なまえ レイ、レイ ぼうけんしゃ、おうち うま こや。」

私は相手の質問に答えられるだけ答えていった、というか案の定私は同じくらいの年齢として見られていますよね。

「変なしやべり方、てか冒険者？お前俺らと同じくらいだろ、嘘つくなよ。」

私のしゃべり方に何か言うのはやめてほしいのですよ、だってまだ慣れてないので、逆に褒めてほしいくらい…まあそれは置いといて冒険者というところはどうかやらないでほしい、でもまあそっちの方が都合が良いのでしばらくは黙っておこう。

「そういえば俺達の名前は言っていなかったな、俺はマルト、それに妹のリリイと友達の

ルーティ、なあ一緒に遊ばねえか？」

「！」

最初に声をかけたのがマルトで可愛い幼女はリリイ、それに私に名前を聞いてきたのがルーティですか：それよりも待ってました！遊びのお誘い、遊びはどうやらかくれんぼなようでマルトが探す役らしいです。

：こちら零、草の茂みに潜入した。

「何だよ嬢ちゃん何たつてそんな所にいるんだ？」

「！」 99. 99

いきなり声をかけられ顔を向けるとそこに居たのはギルドに来た頃最初に会った世紀末の人、というか話しかけないでばれちゃう。

「あっち いく する！（あっち行っててください！）」

「：えつと俺がここに居たら何かまずいのか？何でな「レイミーつけた！」あ？なんだオメエは？」

GAME OVER

あー！開始早々終わったよ ちくせう、はあ：結局世紀末のせいであえなく真っ先に見つかってしまった、私は子供相手に手加減する気は無かった、だって楽しいからね？だから正直見つけたのはすごく残念だ、ちなみに他の二人はタルの後ろと家の陰に隠

れていたそう。実は私はオールドスネークを見習ってドラム缶に形が近いタルの中に隠れたかったのだけど空いているタルなどどこにもなかった、残念…。

「おい、そういうばお前自分のことを冒険者って言ってたよな、なら俺達にモンスターと戦つてるところを見せてみるよ。」

…唐突にそう言われた、もちろんNOであるが…。

「ごども もんすたー いく あぶない」

「お前だつてごどもじゃねえか！もういい！」

結局かくれんぼを一回しただけで終わってしまった…つてまゆたん屋根なんかで何してるんですか。

「おーい、まゆたん なにする だつた？（ちよつと、まゆたん屋根なんかでなにしてるんですか？）」

「んあ？ああ、幼女ウオツチングっす！幼女を愛でるのは最高っす！癒されるっすよ♪」  
ああ、幼女ウオツチングか、私も生前やったなあ、休みにお昼を食べ終わってから数分食後の休憩をはさみ公園に行くとか沢山の親子が遊んでいて幼女がすべりだいを滑り、ブランコを漕ぎ、空きスペースで追いかけてあつている、そこでベンチに座つて見ていた景色は生前の私にとってかけがえのない至福の時だった、勿論子供を不安にさせないよ

うな行動を心がけ一度たりとも私が原因で子供が泣いてしまった事も警察のお世話になつた事もない、しかしまゆたんは危ない、あれではただのストーリーカーですよ。

「まゆたん あとつける だめ あ「うちの子を見かけませんでしたか!」ん?」

母性のある女性がいきなり割り込んで来たけれどどうやらさつきさんのマルト君とリリーちゃんの母親らしい、どうやらマルト君はモンスターを倒そうとしているらしく家に置いてあつた剣を持ち出してしまつたらしいのです。

なぜ家に剣があるのかは分からなかつたし、父親の事でどうの言つていたけど今はマルト君達だ、私はすぐさまプリーストがいらないのを確認して操陰でカサツカを創り空に飛び立つた、空から探したほうが早いという事だ、まゆたんも何故か一緒にいつて来てるけど多分大丈夫:だと思う。

「あーあそこっスー!」

まゆたんが見つけた様だ、見てみると既にマルト君達は外に出てしまつた様、近くには何故か季節外れのカエルがそこにいた。

ーマルトsideー

俺の少し離れたところにジャイアントトードがいた、話には聞いてたけどそこまでかくないじゃないかよあれ俺の身長くらいだろ、と思つたのもつかの間ジャイアントトードはこちらに跳ねるごとに大きくなっていく、いや近づいて本当の大きさがわかつ

てきたのだ。

「ヤバい！逃げるぞリリイ・ルーティ！」

俺の掛け声に反応し二人も俺を追う形でジャイアントトードから逃げ始めた…が。

「きゃっ！」「リリイ！」

俺の妹のリリイが何かにつまずいてこけたのだ、俺はすぐさま駆け寄り妹の身体を起こしたがその隙にジャイアントトードが俺達の間近まで迫って口を開けようとしていた。

「エリス様助けて！」

俺は女神様に祈ったけれど何も解決はしてくれない、口はどんどん俺達を呑み込もうと迫ってくる。ああ、こんな事ならあいつの…レイの言うこと聞いとくんだった。

「マルト！リリイ！」

「…ルーティ？」

いつ喰われるのだろうと怯えていたけれど一向に喰われない、代わりに友達のルーティの声、辺りを見渡すと俺の背後には既に絶命しぐちやぐちやになったジャイアントトードがそこには居た。

―零 side 1

間一髪で間に合ったです、具体的には船についてるアンカーをカサツカの下側から

によきによき生やし高速でぶつけたのだ（カサツカも操陰の一部だからそんな事もできちゃうのだ（ω・ω）キリツ）、頭では兄妹に当たる可能性があったので心臓部で、これが思った以上に威力があつたらしく見事に当たった場所が四散した、スプラッターグロすぎであるです。

ともかく助かつたのでそばまで寄ることにしよう。

「おーい大丈夫っスか？」

「だいじょうぶ？」

「…お姉さんが、助けてくれたんですか？」

どうやらマルト君はまゆたんがカエルを倒したと思っっているみたい…というかまゆたんは一体どのくらい強いのです？魔法関係らしいですけどまだ職業の種類までは覚えきれてないのです。

「違うっス、やったのは零っスね、空からドカーンとやったんス。」

まゆたんが私の名前を出したので多分訂正してるんでしょう、そのおかげかアルマ君が私の方へとむく。

「レイがやったのか…すげえ、かっこいい。」

「けん いえ かえす、かぞく あやまる。（その剣はちゃんと家に返してあげてくださいね、後ちゃんと両親にも謝ること、心配してましたよ。）」



私は尊敬の眼差しを送るマルト君に対しわざとらしくニカツと笑って見せると何故かいきなり頬を赤らめて尊敬の眼差しは恋する瞳へと変化していた：恋愛フラグ立ちやつた？

「お、俺頑張って強い冒険者になる！お前：レイみたいにな！」

：マルト君は置いといて他の二人はまゆたんに目がいつていた、逆なら良かったのに、でも無理なのです、だつてまゆたんに対して言つてのが「キレイ」とか「大きい！」なのですからチクショー、私は可愛い系を目指してこの姿だし胸もそんなに大きくない、完敗だよ。

結局マルト君達はカサツカで家まで送つたけれどその途中に三人が興奮しすぎて気が散つた、危うく操陰が解けるところだつたです。

母親に真実を報告すると怒りより心配が先に来たようで兄妹を抱きしめていた：なんだかこういうのつていいですよね、となんて考えていた時に母親は思い出したように依頼料としてそれぞれ1000エリスを渡してきた、本当はお金なんていらなかつたけれど母親の笑顔を見ると多分返せないんだらうなと思えてしまうのは借金があるからだけではないはず、そう考えて私は財布にそのお金を入れて短い休暇は過ぎていった。



1日後

デユラハンのせいで討伐された後も数日はろくなクエストがなく私は結局壊れた壁の復旧作業のバイトに回された、そんな私は仕事量を優先し操陰を使い五体の人型とクレーン一つを創り全体を見渡せる位置に座り同時に動かしている、最近操陰が使い慣れてきているおかげで複数の人型も動かせるようになってそういうことが可能になった。

「なあレイ遊ぼうぜ！」

「遊ぼう」

「追いかけてっこしよ。」

声をかけてきたのはあの三人、あの一件のおかげで仲良くなったのだ。

「いま しごとちゅ」

「そっか、じゃあまたなレイ！」

「またね」

「お仕事頑張つてね！」

「うん」

私は操陰の操作のために振り向けないけれど笑顔を作る。

家族のみんな、私、異世界で友達できたよ。

## このTS幼女に二回目を

あの一件から時は過ぎ季節は寒い冬になった。

「金が欲しい！」

「しゃっきん ない する？（借金返済のためですか？）」

「ああそうだ！どっかの駄女神が町の壁を壊してくれたおかげでな。」

だんだんカズマさんが私の言葉を理解する能力が上がってる気がします、最近では一切の沈黙もないほどに。

「だ、だってあれはデュラハンを倒すためだったのよ！それに私がいなければ浄化しきれずにこの町に攻め込まれてたかもしれないのよ！もつと私の功績をたたえてよ！崇め奉つてよ二人とも！」

「よしわかった、デュラハンを倒せたのはお前がいたからだ、と言うわけで名誉も借金の4000万もお前のもんだ良かったなー（棒読み）」

「ゴメンなさいカズマ様〜!!」

…いくら言葉が上達してもここまでの二人の言葉全ては頭で処理しきれず私はぼーっとするしかない。…暇だなあ。

「またカズマはアクアをなじっているのか。か、かわりに私にたまった鬱憤をぶちまけて構わないのだぞ？ハアハア」

「カズマ、何か良い仕事はありましたか？」

息が荒いダクネスといつも通りのめぐみんちゃん、今日もパーティ全員集合ですね。

「いや、まだ探してないよ、だって…。」

カズマさんが目を向けた先には最近日常となりつつある冒険者がクエストもせずギルドにたむろしている風景があつた。

「ああ、まあ魔王軍幹部の報酬は参加した冒険者全員に支払われましたからね、懐が潤つていればわざわざ危険な冬のモンスター狩りに行く必要がありません。私はむしろ大歓迎です。」

「私もだ、敵は強ければ強いほど良い！」

「つよい いい。」

「…なんでうちのパーティはほとんどがろくに戦えもしないのにこんなにも好戦的なのかとツツコミたいんだが。というか報酬はいいがろくなクエストがないな」「カズマ！カズマ！」カズマです。」

カズマさんがグチらしい言葉をボヤいているとダクネスがクエストを指差した。

「これなんかどうだろう、『白狼の討伐』報酬100万エリス！ケダモノどもの群れに滅

茶苦茶にされる自分を想像しただけで…くう♪」

「アホらしい、却下だ。」

「カズマ！カズマ！」

「カズマだよ？」

「これはどうですか？【一撃熊の討伐】！我が爆裂魔法の一撃とどちらが強力か今こそ思  
い知らせてやろう！」

「却下だ、そんな物騒なモンスターに関わりたくない、首を撫でられただけで即死しそ  
うだ。」

二人とも案は出したけれどどっちも却下されたらしい、まあ欲丸出しでしたしね。で  
も私のスキルでどうにかなるんじゃないやあ？

「えーと？機動要塞デストロイヤー接近につき進路予測の偵察募集？…デストロイ  
ヤー？デストロイヤーって「すまない、それは俺が受ける。」ミスターK！」

声の主を見てみると何処かで見えた顔、誰でしたっけ？

「…だれ？」

「覚えてないのか？まあいい、俺はみんなからミスターKと呼ばれている、まあ俺がそ  
う名乗っているんだがな。」

「このおじさんよく考えたらキャベツの時の人でしたね、一体きどうよーさいですと

ろーやとは何なんでしよう？

「まさかその依頼を受けるとは、相当な手練れなのだろうな貴方は。」

「慣れているというだけだ、何せ…。この依頼を受けるのは5回目だ、他のギルドでもこの依頼はあつたからな。」

「5回目!?あのデストロイヤー相手に4回も偵察をして生きて帰ってくるとは、一体貴方は何者なのですか。」

そのですとろいやーとは中々に強いようですね、要注意です…殺れるかな？

「なに、ただの冒険者だよ。しかしこれを受けるのは俺の義務だからな。」

「うん?つまり結局はデストロイヤーっていったい何なんだ?ミスターK。」

異世界から来た私達二人は勿論ですとろいやーなど知らずカズマさんは質問した。それにしてもずいぶんこの人は信用されているようなのですね、確かカズマさんに魔法を教えたのもこの人だったはずですよ。

「…簡単に言うとな足のついた要塞、馬鹿でかい強力な兵器が誰の制御もない状態で歩いているようなものだ。」

「何だそれ怖いなおい…ってそんなのに何回も挑んでるあんたも大概だが。」

結局彼は解説を終えると去っていき、私達はクエスト探へと戻った。

「えーと、ん?なあ、雪精ってなんだ?名前からして滅茶苦茶弱そうなんだが…一匹10

万エリスって書いてあるぞ?」

「雪精は雪深い雪原に多くいて一匹討伐することに春が半日早くくると言われています。とても弱いモンスターで簡単に倒す事が出来ませんが「その依頼を受けましょうよ!」あ、ちよつと!」

めぐみんちゃんの解説を無視しアクアさんが会話へと割り込んだ、でもまあ私も依頼を受けるのは賛成です。

「いらい うける いい」

「ね、零もこういつてる事だし受けましょう!じゃあ私は準備してくるからね」  
「なんかダクネスの息が荒いんだが…まあとにかく今は金だ!」

―雪精の討伐―

「ゆきせい かわいい!」

ゆきせい、白くて丸くてふわふわで、かわいいです、でも借金返済のために犠牲になつてもらいますよ。

「実物を見たら余計弱そうにみえるな、というかそのカツコどうにかならんのか、冬場セミ取りに行くバカな子供みたいだぞ。」

「この網で雪精を捕まえて小瓶の中に入れるの、それで飲み物にでも一緒に入れておけ

ば……いつでもキンキンに冷えたシユワシユワが飲めるって考えよ！どう？頭いいでしょ？」

「いい あくあ いい！」

「でしょ！」

「オチが読めそうなかんがえだなおい。てか賛同すんなよ零。」

オチってなんでしょ？というオチになるんでしょう、まったくわからないのですよ。

「まあいいか、ダクネスは鎧どうした？そんな装備で大丈夫か？」

「ふう……問題ない。ちよつと寒いがそれもまた……ハア、ハア。」

うわー、ダクネスメスの顔です、またMモード発動ですね、ど変態ですね。最近気づいたのですけどどうやらダクネスはMな変態らしいのですよ。これからは少しばかりいじっていったほうがよさそうですね。

「なあカズマ、レイがなにやら私のことをケダモノじみた目で見て居るのだが（ニヤニヤ）」

「ダクネス、お前目悪くなったんじゃないか？まあいいや、じゃあ雪精の討伐開始だ！」

「「「おー！」」」

こうして雪精狩りが始まった、雪精はというと空中にふわふわと漂っている、今から



狩られるというのに呑気なものですね。



1. 2. 3…。

「三匹目までー！クソ、チヨロチヨロと。」

4. 5. 6. 7…。

「うんしょつと、カズマ！四匹目取った♪見て見て、大量よ！」

8. 9. 10つと、アクアさん捕まえるだけ捕まえて全然倒してないんですが、さっきの案ですけど一匹だけで良くないですか？一匹討伐で十万ですよ？

「おーい零、今どのくらいだ？」

不意にカズマさんが質問してきました、私は自信満々に「10」と言うと「おお！」と嬉しそうに驚いてくれました。嬉しい♪

「カズマ！」

不意にめぐみんちゃんがかズマをよんだ。どうやら爆裂魔法を撃つらしいです、カズマさんがG Oサインを出すと嬉々として呪文を唱え始める。うん、可愛い！

「エクスプロージョン！」

そう唱え終わると雪精達の集まっていた場所めがけて強力な爆裂魔法が炸裂した。爆風でみんな少し飛ばされましたけど私は大丈夫、操陰でアンカー作って飛ばされない

ようにしてましたからね！

「…大丈夫か？」

「八匹目やりましたよ、これで倒した雪精は九匹です。レベルも一つ上がりました。」

「おお！やったな、倒れてなかったらもうちよつとカツコ良かったが。」

それにしても何で誰も受けないんでしょう？いつかベルディアの時の報酬も尽きるはずなのに。

「来たか！」

「？」

…雪煙がこっちに向かって来てる？…いや、アレは！

「何故冒険者が雪精討伐を受けないかその理由を教えてあげるわ、零は忘れちゃったかもしれないけどカズマは日本に住んでたからニュースや天気予報で名前くらいは聞いたことあるでしょう、雪精の主人にして冬の風物詩といわれる…冬將軍の到来よ！」

無理ですよわかりませんよこんな長文、説明だと思えますけど理解できませんよ！

「おお！冬將軍、国から高額報酬をかけられている特別指定モンスターの一部！」

え？…今こうかくほうしゅうと聞こえましたが？

「おそらくあいつは將軍の地位を利用して私にあんなことやこんなことを…！たまらん

!! 「あぶない!」「へ?」

何故かは知らないですけどダクネスの方へと突き進み攻撃しようとする刀を甲冑の奴の攻撃を避けるためダクネスの体を亀甲縛りして後方へと無理矢理引っ張った。

「な、何だろうこの縛りは!そそのものがあるぞ!」

…とりあえずダクネスが切られることは避けられた。

「何でこんな奴がいるんだよ!」

「精霊は出会った人が無意識に思い描く思念を受けて実体化するの、けど町の外を出歩くのは日本から移住して来たチート持ちの連中くらいだから…。」

「つまりあいつは日本から来たどこかのアホが冬といえば冬將軍だとか連想したから生まれたのかよ!?なんて迷惑な!」

意味不明二回目ですよ、まったくどうすればいいのです!?アレは倒せばいいのですか!?攻撃しちやだめなんですか!?

「カズマ!零!冬將軍は簡単よ、ちゃんと礼を尽くして謝れば見逃してくれるわ!」

そう言つてアクアさんはさつき瓶に詰めた雪精を解き放つて…え?土下座しました?  
?

「土下座よ!土下座をするの!さあ、みんなも謝つて!」

「…。」

えっと？これはつまり土下座すればいいんでしょうか？でも倒れて動けなくなつて  
るめぐみんちゃん以外の二人してないんですよね。

「おい！ダクネス何してるんだよ、早く頭を下げる！」

「誰も見ていないとはいえ騎士である私がモンスターに頭を下げるなど！」

「いつもモンスターにホイホイついて行こうとするお前がこんな時だけくだらないプラ  
イドをみせるな！」

「や、やめろ！無理矢理地べたに顔をつけさせられるなど…最高だ!!」

「ちよつと零…は武器はなかったわね。カズマ、武器を捨てて！」

ダクネスを助けにいったカズマさんは必然的に甲冑の近くに寄ることになつてし  
まった、もうちよつと後ろに下げれば良かった！

甲冑は カズマさん達を切り捨てようとまた刀をあげていた、だったらもう一回縛つ  
て下げればいいだけですよ！

そう思つて二人まとめて縛り私の元まで引つ張つた…え…？

「助かつたよ零…つて何見てるんだ？」

ザシユツ!!

おかしい、おかしいですよ。私はたしかに甲冑が近づいたのに気づき、すぐさま操陰  
でシールドを作つたです。でも操陰はいともたやすく切られて…私達もろとも…。

カズマさん……ごめんなさい。

…私達がいた場所の雪は綺麗な赤で染まって見えました。

## この喪失少女達に真実を

「お久しぶりです、零さん。そして初めまして佐藤和真さん、それに…」

そうでしたね私達はあの甲冑に切られて…あれ、三人？ダクネスじゃない様ですけど…。

「…まゆたんさん、急にこちら側にお呼びしてしまいすみません。」

「まずここどこっすか？」

「まゆたん!？」

ーまゆたん side ー

どういうことっすかね？たしか我はゆんゆんと一緒にモンスター退治をするために馬車に揺られてる最中だったはずだったんすけど、今は何故か零とカズマと知らない人と我が椅子に鎮座してるんすけど…夢？揺られて気持ちよくなつて寝てしまつたんっすかね？じゃあ…。

「おやすみなさいっす。」

「えっ、ちよつと待っててください!？」

我が寝転がり二度寝を決行しようとすると思知らぬ人が止めに入った、本当になんっ

スカこの知らない人？

「まずあんた誰っスか？名乗ってほしいっス、その人。」

言つてやったっス！どうやら名乗るのは忘れていただけの様で思い出した途端ワタワタしだしたっス。

「申し遅れました、私はあなた方を導く女神エリス。今回は零さんの言語消失の原因が判明したのでこうして来ていただきました。カズマさん、すみませんが少々お待ちいただくことになりましたが宜しいですか？」

「あ、はい…良いんですけどなんでまゆたんもいるんですか？エリス様。」

それっス、なんで零の事で我も呼ばれなくちゃならないんっスカね？というか言語消失？

「じつは零さんの件について重要な存在なんです、わかりましたか佐藤和真さん。…いいですかまゆたんさん、落ち着いてよく聞いてください。貴女は…。」  
落ち着いてるっスよ、でなんなんスカね。

「貴女は人間ではありません。」

…。

…え？

ちよつと待つてほしいっす。え？我が人間じゃない？

エリスの言う事があまりにも想像を遥かに超えていたせいで我はその意味を受け止められなかった。

「な、何を冗談言ってるんっすか。そんなことあるわけないっすよ！あるわけないっす、あるわけが…。」

「お辛いでしようがそれが真実です。」

人間じゃない、それが真実なら…じゃあ我は…。

「…我は一体なんなんっすか。」

エリスは虚ろな目になって項垂れている我にこれから長くなるであろう我についての話の最初に「では1から話しましょう。」と言い、それに続けた。

「貴女は、いえ貴女こそ零さんが失った言語、そして新たに与えられるはずだった言語そ



のものです。」

「「ッ！」」

「異世界の言葉を転生者の方々の頭内に入れるには魔力を働かせ、しかしその魔力がイレギュラーによって誤作動を起こし自身の持つていた言語をも道連れにし零さんの記憶から分離、この世界へと行き着きました。イレギュラーとはアクア先輩を加えて三人で一度に異世界に飛ばされた事です。」

「…ほんとすいません。」

カズマが横で深刻な顔をして謝っていたっす、異世界…カズマと零は異世界人だったんっすね。

我は何の疑いもなく異世界の存在をすんなり受け入れていることに何故か疑問は抱かなかった。その間エリスはとうとうと何度も謝っているカズマを何とかなだめようと必死だったらしい。

「…そ、それでは続けますね。まゆたんさん、貴女が最初にいたのは紅魔の里の近くで間違いないですか？」

「…間違いは、ないっす。」

我はショックの余韻は残るものの質問については隠す必要がなかったのですんなりと答えた。

「これについては私達でも結局理由は説明されませんでした。しかし仮説としては高い紅魔の魔力に魔力同士で引かれたのではというのがありますが、いまだ眞実には至っていません。そしてその魔力は紅魔の里に漂っていた魔力と混ざり合い、何故か人の形になったのです。…実はこれも初めてのケースでして、一体何故人型になったのか、何故こうして人と変わらず動くことができるのか、全く説明できていません。」

…何なんっすか、それじゃあまるで化け物じゃないっすか…。

魔力の化け物、異形の者、モンスター、怪物、異物…頭に様々な単語が浮かび上がる。私の目からは沢山の雫が落ち、言葉にならない声から漏れだしそうになった。我はなんとかそれを押し殺し、エリスの方へと目を向けると、エリスは話を再開する。

「先ほども言いましたがまゆたんさんは零さんの言語そのものです、規定上ですと貴女が魔力として零さんの元に戻らなくてはなりません。」

「…じゃあ我は消えるんっすか。」

「記憶は零さんに引き継がれます、ですが貴女が存在は…そうなるでしょう。」

それを聞いた時、私の頭の中にはゆんゆんがいた。初めてあった時、クエストを一緒にやった時、めぐみんと出会った時…。

我と一緒にの時、ゆんゆんは笑顔だったっす。一緒に泣いたり、怒ったり、悩んだり、喜んでたり、どんな時も最後は笑顔だったっす。

じゃあ我が居なくなったら？紅魔の里では友達は沢山居たらしいっすけど、今はアクセル暮らっす、…ゆんゆんは悲しむっすかね。

一人で朝食を食べるゆんゆん、一人でクエストを選ぶゆんゆん、一人でクエストを終わらせるゆんゆん…そこに笑顔はあるっすか？そこにゆんゆんの楽しい生活はあるっすか？

何度考えても思い浮かぶのは悲しげにうつむいた様子のゆんゆんだけ。

たぶんゆんゆんに会う前の我なら悩みはすれど悲しみはしなかったと思うっす。でも、今はゆんゆんと一緒に居るっす、ゆんゆんと一緒に…居たいっす。

消えたくない…。

消えたくないっす。

ゆんゆんと約束したっす、ズツ友だつて…言つたっす、だから。

「ゆんゆんを…独りにさせた…ない、っす。」

ようやく導き出した自分自身の思いを口にするると今までせきとめていたものが崩れるように涙も、泣き声も、そして本音も止めどなく我から漏れだし始めた。

「我はゆんゆんと一緒に居たいんっす！ゆんゆんを悲しませたくないんっす！だから…だから…。うぎゅつ、うえええん…だからっすうああああん。」

「一つだけ、方法があります。」

「うぎゅ…グシユン。ほんと…スか。」

「ええ、しかしそれは零さんにも了承していただく必要があります。零さん、貴女がもし了承した場合、戻ってくるのは今貴女がいる世界の言葉だけになります、日本語は戻ってきません。覚えるとなるとーからやり直しですよ。零さん、どうされますか？」

その時、我から流れ出ていたものは止まり全身が強張った。次の一言で我の存亡が決まってしまうのだから。

「りようしよう だいじようぶ。」

…即答だった、なんで直ぐ決められるんっスか。

「…教えてほしいっス。なんでそんなにあっさり決められるんっスか？なんで…赤の他人みたいだった我に、過去の記憶そのもののような言語を捨てられるんっスか!？」

「すてる ちがう、あげる した。(捨ててませんよ、貴女にあげたんです。)」

「零…ありがとうっス、本当にありがとうっス!」

「了承は取れたようですね。ではご説明しましょう、まゆたんさんは未だ魔力の塊です、それはとても不安定ですのでこちらで変化させてもらいます。」

「その…危なくないんっスか？」

「今のままでいる方が危ないとだけは言っておきましょう。そこでまゆたんさんには天使となり、私の…後輩となってもらいますが宜しいですか？」

…ん？天使？我が天使っスか？

「えつと、それはゆんゆんと一緒に居られるっスか？ここに住み込みとかじゃないんっスよね？」

「はい、天使と言っても見習いのようなもので、たまにここに来ていただいて私からの指導を受けていただければ問題ありません。少し先の将来、私の補佐をしてもらうかもしれません。問題ありません。」

それなら大丈夫っスね…つて、なんで天使なんスかね？他にも種族がいる中で天使を選ぶなんて。

「なんで天使なんっスか？他に選択肢がないのはなんでっスか？」

という私の質問に、エリスは…。

「こういうことはさつきも言った通り規定上は本人に戻さなくてはいけません。でも私はまゆたんさんを助けたかった、だから私のそばに天使として置き、監視体制を作っておく事得上からの理解を得なければならぬ、という事です。さつき零さんに了承を得たのもそのためです。それで…天使になっても構いませんか？」

…エリスが私の事を気にかけてくれた、女神であるエリス…エリス様が我を救ってくれた。まったく、答えは決まってるのに…本当にエリス様は優しいっスね。

「構わないっス、我はゆんゆんと一緒に居られればあとは何にも望まないっス。本当に

ありがとうございまっす。」

我は素晴らしい頭を深く下げエリス様にお辞儀をした。

「それでは今から貴女を元の世界に戻します。神の御加護があらんことを…。」

エリス様がそういうと天井が光り輝き、足元には魔方陣が浮き出した。

「一段落したらまたこちらにいらしてください。」

「はいっす！」

「まゆたん ばいばい。」

「またなまゆたん！」

「はいっす！」

今帰るっすよゆんゆん。我はずつとゆんゆんと一緒にいるっすからね。

## この記憶喪失に回想を：★

…あれ？ここはどこ私は誰？あーこのセリフは鉄板だなく、というか本当に自分は何れ？ここは一体どこ？

周りを見ると大体が野原、少し遠くには村も見える。

…とりあえずは喋り方がイマイチ、ちよつと変えてみよつかな？

どこでヤンス？…違うな。どこでゲス？…これも違う。どこジャン？…これもだめ。どこジャ？…だめ。どこっス？…良いかもしれない！あーあーここはどこっスか？自分は誰っスか？うん♪これがしっくりくるっスね。さてとこれからどうするっスかね？

「おい、お前は誰だ？」

？人の声っスね、振り向けばそこにはおっさんがいた、誰っスかねこのおっさん。

「見たところ眼の色が赤い、ということとは紅魔族の者か？しかし見ない顔だな。」

「紅魔族？何スかそれ？」

？  
そんな民族聞いたことないっス、なんなんっスかね。…というか民族ってなんだっけ？

「紅魔族じゃなかったら一体どこから来たんだ？お前、名前は？」

「どこから来たのかわかんねーっス、名前も思い出せ無いつス、おっさんの名前はなんて言うっスか？」

「我が名ははひよいぎぶろー！数多の魔道具を作りし者！なるほど記憶喪失か…厄介だな。」

なんスかその自己紹介、そういうの興味無いつスよ。

ともかく自分は会話を続ける。

「えつと…おっさんはなんでここに来たっすか？」

「うむ、家の外にいたら遠くが光ってたもんで気になってな、来てみたらお前がいたというわけだ。」

なるほど、もしかしてその光が自分だったりするっスかね？もしかして自分ってば光の巨人！…無いつス、というか光の巨人ってなんだったっスかね？ダメっス、思い出せねえっス。

「…とりあえず服を着てくれないか。」

おお！よくみなくても自分は服を着てなかったっス、ナイスバディでグラマラスっス、でもどうすればいいっスかね？何も持ってないっス。

「えつと…持ってないからおっさんの貸して欲しいっス。」



「ふん、仕方ないか、ほれ貸してやるよ。」

そう言っておっさんは渋々ではあるっすけどボロい上着を貸してくれたっす、まあ自分には別に寒くもないんすけどね、借りれる物、貰えるものはとりあえずいただきっす。

「とりあえずありがとっす、それにしてもどうするっすかね？」

「どうするとは？」

決まってるっす。

「住むところっす。」

「うむ確かに、記憶が無ければ帰るべき家にも帰れないしな。」

そうっす、どうするっすかね?…あ。

腕を組んで悩んでいるとちよいどいい人物が目の前にいたことを思い出した。

「おっさんの家に泊めてほしいっす。」

「さて、ウチはかなり生活を切り詰めてるんだ、お前まで養うのは無理だ。」

「今欲しいのは寝床っす、食べ物はこちらでなんとかするっすからおっさんは寝床を提供してくれば良いっす。ねー、頼むっすよ。このグラマラスボディな弱い自分を見捨てるんっすか？」

自分がそう言うとおっさんはなんだか呆れた様子でokしてくれたっす、なんか腑に落ちないっすけど結果オーライっすよね。

その後にはひよいざぶろーのおっさんと共に家に向かったつス…けど。

「お帰りなさい…後ろにいる人は？と云うか裸!?まさか…。」

「ま、まて！光っていたところの近くに居たんだ、着るものもなかったからワシの上着を急遽貸したんだが…お前が用意してくれないか？それに記憶喪失らしくてな、寝床を貸して欲しいと言われた。だから魔法を撃とうとするのはやめてくれ！」

「おっさん嫁がいたんスか!?!」

「お前がまず驚くところはそれか!?!」

いやー驚くつスね、てつきり独り身だとばかり思ってたつス。

「お姉ちゃんは誰?」「!」

自分が驚いた理由、それはおっさんの嫁の後ろにそれはもう可愛い天使…いや妖精とも取れる様な幼い子がいたからである。

「か、可愛い!可愛いっス!誰っスかこの子!」

「うんうん、そうだろう!なにせうちの子だからな!名前はこめっこだ。」

おっさんと喋っていると不信心は拭えたらしく、こめっこちゃんが自分に寄ってきて口を開いた。

「おなか減ったよ、何か食べ物持ってない?お姉ちゃん。」

ああ、もし何か持っていたならなんの躊躇もなくこめっこに差し出したのに、今

持つてるのはおっさんから借りた上着一枚っス、というか少し冷えてきたっスね。ごめんなさいっスこめっこちゃん、そう思いながら今はこめっこちゃんに謝るしかなかった。

何はともあれ、おっさんは嫁のゆいゆいに冷たい目をされたけど、自分に矛先は来なかつたっス。それどころかゆいゆいはおっさんが頼んだ通り服を用意してくれた：試着した時胸のあたりが窮屈だつて言つたら微妙な顔をされたっスけど、なんでっスかね？



次の日、自分はおっさんの家で目を覚ました。とりあえず食い物探さないとっスね、そう思つて起きると。

「まゆたんさん、朝ごはんできてるわよ。」

らしいっス。ちなみにまゆたんとは自分の名前、名前が無いのは不便らしいっスからおっさんに決めてもらつたっス。

それはともかく確か自分は寢床だけを要求したはずっス：まあいいか、貰えるものもらつた方がハッピーっス。

とりあえず少ないけれど朝食とか言うものを済ませて里を散策していると馬が見えた。

「おーい、おはようっス紅魔の皆さん。」

自分が人を見つけジャンプしながら両手を振ると皆んなこつちを見て妙ににやけた顔で手を振り返してくれた。

少し話していると自分は気に入ってもらえたらしく馬に乗せて貰えるらしい、ただし条件は乗りこなせる様になっても並行して走る馬の飼い主より前に出ないことらしい、危険がない様にとのこと。

それにしてもここの人達はフレンドリーっスね、なんか目線が合っていない気もするっスけど仲良しなのはいいことっス

「そうそう、上手いねまゆたんちゃん！」

「いやあー、どうもっス♪」

十分後くらいにはスタスタと補助歩かせることに成功した、どうやら自分は乗馬が上手いらしい。

パツカパツカ、ボヨンボヨン。

「おおお！」

パツカパツカ、ボヨンボヨン。

「うおー！」

「うへへ、そんなに歓声上げられると照れるっスねえ。」

里の男の人達は馬が一步進むごとに歓声を上げてくる。こつちとしてはそこまですごいことをやった気はしないんっすけどね。

一通りの動きができたところで馬に乗せてくれた里の人達にお礼を言い食べ物の探索に戻ろうとすると…。

「ハアハア、まゆたんちゃん、とても有意義な時間をありがとう、せっかくだウチの野菜をあげるよ。」

「ウチで焼いたパンも持っていくといい！」

「ありがとうっす！」

皆んな優しいっすね、食べ物までくれるなんて太っ腹っす。そう考えながら自分は貰った食料を置いておくためにこめっこの家へと歩いた。

「おーい、誰かいるっすか？」

呼ぶとゆいゆいが「どうしたの？」ででてきたっす。

「近くの住人から食糧確保したんでおすそ分けっす！」

自分はそう言うゆいゆいの前に貰った大量の野菜やパンを無造作に床へと置いた。  
すると。

「えっと、これどうしたの？」

ゆいゆいは不安そうにこつちを見ながらそう言う。特に隠す必要もないので自分は里の人と乗馬体験した後にはみんなからもらったことを伝えた。

「そ、そう。よかったわね…。」

ゆいゆいは何故か引きつりながら返事をする。譲ったものをしまいに行ってしまった。

その夜、自分はおっさん、ゆいゆい、こめつこと一緒に夕食を囲むことになった。よく考えてみたら記憶がない自分は料理を知らなかったのだ、結局貰った食糧は皆ゆいゆいに渡しその分夕食を、ご馳走になるという事になり今に至ると言うわけ。

「悪いな、あれだけの食糧をもらってしまつて。」

食事をする中でおっさんは不意に自分に喋りかけてきた。

「いやいや、いいんつスいいんつス、自分が持つても食べられないんじゃ意味ないっスから。」

「いや、家はかなり助かっている。そうだ恩返しと言っていいかわからないがまゆたん、本を読みに行つて見ないか？何か自身について何かわかるかもしれない。」

図書館っスかね？というか自分は言葉を読めるんつスかね？んー、行つてみればわかるか。

「わかつたつス、じゃあそれでおっさんが納得するなら。」

その後幾つか話すと、自然な形でいつの間にか会話は終了し、寝支度を済ませて就寝と流れ作業のように夜は過ぎて行つた。

◇◆◆◇◆◇  
 ……

朝つス。自分は身支度ゆいゆいが用意してくれた朝ごはんを堪能してさつそく本の元へおっさんと家を出た。ちなみにこめつこにぼんやりする記憶？にあつたおはようのチューーというのを試みたんつスけどやる前すぐに二人に止められたつス：なんでつスかね？

「ここで好きなだけ読むと良い、昼になれば迎えに来る。」

そう言つて通されたのは大きい家の一部屋、中には沢山の本であふれていた。

「うおー！すごい本の量つス！テンション上がるつスー！ありがとうつスひよいざぶろー♪」

「…初めて名前で呼んだな、それよりせめてわしの嫁にはさんをつけてくれ。」

「了解つス！」

その後、おっさんは去つていった。いやーつい名前で呼んじやつたつスね、まあおっさんはおっさんなんで今まで通りおっさんつて呼ぶつスけど。

おっさんがいなくなった後、自分はとりあえず役立ちそうなものを見つけるために本

のタイトルを見て回った、その中に。

「ん？これだけ言葉が違うっすね、日本語？」

そこに一冊だけあったのは日本語で書かれた本だった、作者は桐島 啓介（きりしま けいすけ）と言う名前らしい。

「えーと、バカでも分かるイリユージョン魔法…スか？」

本を開くとそれぞれの魔法が事細かにそして丁寧に書かれていた、自分は途端にこの本の虜になり時間の許す限り読み進めようと決意した。

「まゆたん、昼だZ…その本は！」

「おー！おっさん、もうそんな時間っスか？」

「そんなことよりその本、お前は読めるのか!？」

おっさんは変なことを言うっス、日本語なんて読めて同然…ん？

「もしかしておっさんはこれ読めないんっスか？」

「当たり前だ、それにしてもそんな昔に書かれた文字を読めるお前は一体何者なんだ？」

「んー、そう言われてもわからないものはわからないっスよ。」

実際わかればと思っつてここに来たんっスからね、ぼんやりする記憶？に過去から未来に行くつてのがあったっスけどもしかしたらそれかも…と言っつても証拠もないんっスけどね。



お昼ご飯はすぐ済んだ、昨日自分がもらって来た食材はそのぶんではぼ使い切ったらしいので自分はまた調達のために里を散策しに行こうとしていた：が。

「今まで見ていて思ったが、お前は常識が無きすぎる！」

らしいっす。なので昼はみっちりおっさんとゆいゆいさんでみっちり常識というものを叩き込む時間になったっす。まあ割とすぐに解放してもらって食材調達に出たんっすけど、昨日馬に乗せてもらった人達に行くわして同じような展開に。

そうして何故か朝ごはん↓本↓昼ごはん↓常識習得↓乗馬をかねた食材調達↓夜ごはん↓寝る、というようなローテーションがいつの間にか完成され、日々が過ぎていった。

「ふはははは！我が名はまゆたん！あまたの言語を理解し失われし魔法、古代魔法を使いし者！！」

紅魔族として立派に成長（中二病）しました。ちなみにイリユージョン魔法は今では古代魔法と名前が変わっていた、我が読んだ本は相当古いものだったらしい。

「いやー、自己紹介ってこうするのが礼儀だったんっすね、知らなかったっすよ。」

ちなみに冒険者カードというものも日々の中で貰った。ちなみにその数値が変らしく一時間係者が騒がしくなったのだけけどそんなことはどうでもいい、我は見事魔法を使うアークウイザードというのになれた。

「うむそうだな…それは良いんだが。」

ふと見るとおっさんの顔が暗くなっていく、おっさんの代わりなのかゆいゆいさんが前に出て話し始めた。

「あのねまゆたん、この手紙をアクセルっていう街にいる二人の紅魔族に届けて欲しいの。一人目は私たちのもう一人の子供のめぐみん、二人目はゆんゆんって子。」

ゆいゆいさんの手元を見ると確かに二通の手紙がそこにあつた。

…こうして私は紅魔の里を出た、随分とあつさりとおっさんにはアクセルでこれから過ごしてくれと言われ不思議だったけど二人のうちのどちらから一人、または両方とパーティを組んでいけば大丈夫だろうとアクセルへ向かう、手紙の不必要な一文を切り取りながら。途中馬車に乗せてもらう代わりに逆向きで馬に乗ってくれと言われいう通りにすると馬車の人は満面の笑みを浮かべてアクセルに着くまで我を見ていた…なんでつすかね？

そして。

「あ、あなたは？」

「よくぞ聞いてくれたっす、我が名はまゆたん！あまたの言語を理解し失われし魔法、古代魔法を使いし者!!ちなみにあんためぐみんっすか？ゆんゆんっすか？パーティいるっすか？」

「え？えつと私はゆんゆん、パーティは…一応は募集中ですけど…ひ、ひとりもいません。ところであなたは紅魔の…」

「じゃあ我とパーティ組むっス！友達になりたいっスよ。後手紙預かってるっス。」

我は聞きたいことは聞けたのでゆんゆんの言葉を遮りとりあえず言わないといけな  
いことを言っておいた…んっスけど。

「え？私と…友達？」

そう言葉を残していきなりゆんゆんは泣き始めた、後で話を聞くと嬉し過ぎて嬉し涙  
を流してしまったらしい。

そうこれが我とゆんゆんの初めての出会い。そして一生友達宣言をした我にゆんゆ  
んが泣いたこと、初めて二人でクエストを受けたこと、めぐみんにあったことはまた後  
の話。

「…\*\*たん」

いろいろなことがあつたっス。たまに一緒の布団で寝たり、お風呂で洗いつこした  
り。

「…まゆたん！」

ん？

「もう、やっと起きた。もう目的の場所に着いたのにまゆたんったら全然起きないんだ

もん。それに頭の輪っかと背中羽はどうしたの…って、わっ!」

「どうやら今まで夢を見ていらしい、我は起きるなやゆんゆんに抱きついた。ゆんゆんの言つてた輪っかと羽、どうやら本当に天使（見習い）になつたらしい。そんな事より。」

「ゆんゆん、この事はちゃんと後で話すつス、それよりごめんなさいつス、約束破るつス。」

「約束を…破る?」

「我はゆんゆんと一生友達でいるつて言つたつスけどあれは嘘つス、友達のままじゃ嫌つス。」

「そんな、イヤだよ!まゆたん、私…やつとちゃんとした友達ができたのに!」

「ごめんなさいつス、でも我はゆんゆんとそれ以上に…“親友”になりたいつス。」

「!」

抱きついているせいでそれを聞いたゆんゆんの体温が熱くなつていくのがわかる、そして我の手をほどき今度はゆんゆんが抱きつき返す。

「ありがとうまゆたん、私嬉しい。」

とつても嬉しいひととき、でも。

「グルルルルウ…。」

「！」

今回受けたクエストは縄張り争いに勝ったマンティコアの討伐、我らはすでにマンティコアの縄張りの中だったのだ。

「ゆんゆん、今の二人ならきつと勝てるっス！」

「そうねまゆたん、今なら何も怖いもの無しよ！」

…こうして我とゆんゆんは親友になったっス。

## この死後の世界にお別れを。

「お待たせしました、佐藤和真さん。無事まゆたんさんの帰還が確認されました。」

まゆたんが消えてからさほど時間がたたないうちにエリス様は俺たちに向き直りそう言った。

「あの、俺達ってどんなふうに死んだんですか？」

「…とても残酷な死に方をしました。あなたは腹部を真つ二つにされてしまいシヨック死と言う形で、零さんは和真さんに遮られ真つ二つとは行かないまでも危険な状態ではあります。」

「ヒイツ！」

真つ二つ!!?と言うかまたシヨック死で…。

「じゃあ俺はこの後どうなるんですか？エリス様。」

「和真さんは一度生き返っていますので天界規定によりまた異世界に転生ということではできません。なので赤ん坊からのスタート、記憶も引き継ぎません。」

「いやー!!」

「零(さん)!!」

エリス様が話し終わると零はその胸ぐらに掴み掛かり揺さぶり始めた、ちようど俺が異世界に来た時にアクアに揺さぶられたのを思い出すなこれ。

「あつ、ちよつと、揺らさないで下さい！」

「(カズマさんとお別れは嫌です！まだ恩返しきれてませんです！)」

頭の中に零の声が響いているみたいだな、というより俺に恩を感じているというのは意外だった、だが今まで俺に対して素直だったのは納得がいく。…そしてエリス様の揺れている胸！いい眺めだな。

「さあ！帰って来なさい二人とも！」

「え？」

唐突にこの空間からアクアの声がした気がしたが気のせいかな。俺はエリス様の絶景を見ることで忙しい。

「(この胸！この無駄に大きい胸これ見よがしに見せびらかして、私に対する嫌味なのですか！)」

「や、やめてください！でないパツ：服がはだけてしまいますから！」

うん、零に聞してはもうすでに本来の目的からずれてるな、はだけろ。

「ねー、ちよつと聞こえてるなら返事して欲しいんですけどー。」

「アクア？本当にアクアなのか？」

「何言ってるの？ばかなの？あんたの体に復活魔法かけたからもうこっちに戻って来られるわよー？」

え？確かエリス様は…。

「アクア、こっちにいる女神様が天界規定とやらで二度も生き返ることはできないって言ってるんだがいいのか？」

「はあ!?誰よそんな馬鹿な事言った女神は！カズマ、ちょっとその女神の名前教えなさい。」

「名前か？名前はエリス様なんだが。」

「エリス？この世界でちよつと国教として崇拜されてるからってお金の単位にまでなったあの上げ底エリス？和真、エリスが私の言った事に少しでも反論したら胸パッド無理矢理にでも奪ってという事聞かせなさい。」

「ん？ぱつと…パット？胸パット!？」

何だと！あの素晴らしい胸は偽物なのか!…だがそれもありません。

そう思い再度エリス様の方へと顔を向けると…。

「お、お願いですから私の胸パット返してくださいー!」

「やー!」

パットは零に握られ走り回りそれをエリス様が追いかけていた。どうやら零が胸を



激しく揺さぶったせいで落ちてしまったようだ。

「あー、アクア？ 悪いがそれはできなくなつた、零がすでにパットをとつて逃げ回つてる。」

「はあ!? ぷくすくす W、ザマア無いわね、私を差し置いて調子こいてるのが悪いのよ! ぷくすくすくす W。」

こいつは本当に女神だったのか疑うぞ……。まあ良いか。そう考えている間にもアクアは言葉が続けた。

「じゃあ次の手ね、エリスの恥ずかしいホクロの位置を教えてあ「え? この声本物のアクア様!? やめてください! お願いしますから!」じゃあ、カズマをさっさと生き返らせなさい。」

エリス様は零を追いかけるのをやめ、しぶしぶではあるが「はい」と言う空が転生した時と同じようになつていた。

「和真さんといいましたね、本当はこんな事ダメなんですからね、ハア。この事は…内緒ですよ。」

メインヒロインだよ! うちの駄女神とは比べ物にならないくらいヒロインしてるよ エリス様は! 取り替えたい…が、そんなことできていたら苦労してない。俺は悔しさを噛み締めながら死後の世界を後にした。

―零 side 1

色々あつて結果、私の願いであるカズマさんを生き返らせることは出来た。さてこのパットは返してあげ…もらおうかなこれ。

「あの一、そろそろ返してもらえませんか？」

案の定エリス様はまだパットを取り戻そうとしていた、追いかけてまででは無いですが。

「ほしい。」

「ダメですよ。ハア、戻るときまでに返してください。」

いいじゃないですか一セットくらい、あの世界にないのですよ？いくら探してもないので。生前は小さいのは可愛いと思っていた私でもいざ自分の身となるとちっさいのつて意外に気にしちやうですよ。私だつておっぱい欲しい！

「…ウン」

「嘘言つたらダメですよ、考えてる事はこちらにはわかるんですから。」

何と言う事だろうか、前回の事を忘れていた。かくなる上は！

「諦める。」

「最初からそうしてください。」

結局ここから帰るまでのみになってしまったけどせつかくの機会、少しの間だけでも

味わうとしようか。そうして自身の凹凸のないところにパットをつけ操陰で固定する、固定しないと無残にずり落ちるのですよ。あ、若干生暖かい。

「はあ、もういいですか？それでは今後についてご説明しますね。まずあなたはもう死ぬまでここに来る事はないでしょう、今まではこちらの不手際のせいで起こった零さんのトラブルに対処するため三回ほどお越しいただきましたが今回で対処は終了するので来る必要がなくなるからです。二つ目、願いについてですがこれは幼児化ですね、これは対処が終了次第解除という事でしたので帰った際には一つ目の願い通りの姿に戻ります。三つ目、零さんはまゆたんさんほぼそのものである生前まで使っていた言語を放棄することになりました、ですので今住んでいる世界の言語のみの知識しかいれることができません。以上が今後においての簡単な説明になります。」

長い説明が終わりエリス様が指を鳴らすと天井に穴があく。夢にまで見た言葉のある生活、幼児体形は今となつては名残惜しいけどみんなとガールズトークする日々が待っています。

「あの一、そろそろパット返してください。」

あー、忘れてましたね、そうそうパットパット。

「パットなに？」

「嘘は良くないですよ零さん、返さないと私も貴女を返しません。」

何という職権乱用、なんて強情なのかしら。まあ嘘ですけど。私はパットをしつぶ返し元いた穴の真下へ戻るとエリス様は何か唱えていた…のかな？すると体がふわりと浮き穴へと吸い込まれていつているような感じ。

「御神零さん、神のご加護があらん事を。」

その言葉を聞くと同時に私の意識は途切れた。

ー少し戻って雪山ー

「カズマ！アクア、カズマが起きましたよ！」

「やっと起きた？ったく、あの子頭固いんだから。」

カズマが目を覚ますと自分の体にアクア以外の仲間が急に抱きしめ自分の名前を心配そうに連呼していた。和真としては照れくさくもあり嬉しくも思えた光景ではある、やはり生き返ってよかったとそう思える。ただ…。

「カズマ、なに照れてんのよ♪何か言いなさいよ。この女神である私の力あつてこそ蘇生できたんだから何か言うことあるでしょ？」

カズマは思った、アクアは結局アクアであると、つまり。

「女神なら断然エリス様の方が良かった。」

なのである。

「はあ?!なにいきなり馬鹿なこと言ってるのよこのヒキニート!いいわよその腐った考えを「ちよつと待っててください!」なに?」

一触即発かと思えたアクアの怒りを遮るようめぐみんはいきなり仲裁に入ったのだ。どうやら零の様子がおかしいということらしい。

「光ってる?」

「光っているな。」

「光ってるわね?」

「はい、さつきから光っているのです。アクア、何なのでしょうこれ?」

「知らないわよ、こんなびっくり人間初めて見たもの、宴会芸で使えないかしら?」

そんな馬鹿な事を言っているアクアは御構い無しに光はすぐに止み、零の目は覚めたのだ。

「お、目が覚めたか零…って何でそんなに震えてんだ?」

「もどる…なにいい!!」

「なにー!!?」

## このパーティに帰還を

俺たちは無事に死後の世界から戻ってこられた、しかし零は俺たちが思っていた以上に言葉を話せるようになるのを待ち望んでいたらしく話せないとわかるといきなり大声で泣き始めてしまった。

「なあ、そろそろ泣き止んでくれよ、もう街に入ったんだぞ？」  
「うぎゅづう……。」

……あれから結局零は街についても泣き止むことは無かった。周りからジロジロ見られるわ一部の女冒険者からやばい目で見られるわ踏んだり蹴ったりだ。

「おい。師匠く！みんなく！」

「ん？」

声の方を見るといつもの二人組、ゆんゆんとまゆたん、何しに来たんだ？

「まゆたん体力無いのに走りすぎだよ、もう。」

「はあはあ、すまないっスゆんゆん。それより探してたんっスよ、特に零を。」

「零に？というかそのアホ毛はどうした？」

「あ、これっスか？」

よく見ると頭には今までなかったはずのアホ毛がそこに鎮座していた。話を聞くとどうやら天使の輪の擬態らしい、一度擬態を解いて見せてくれたのでどうやら本当のようだ。

「最初はまゆたんが人間じゃないって聞いて驚きましたけど、でもまゆたんは私の大切なし、親友だから。そんなのは些細なことだよねまゆたん。」

「そうっすね、ゆんゆんと我は親友っす。最初で最高の親友っす。」

「まゆたん……！」

「ゆんゆん！」

「ちよつとこの百合二人いきなり道端でイチヤイチャし始めたんですけど。」

「ボツチを長年こじらせるとこのようになるのですね。」

「百合百合しいな、これはこれでありって感じだな。」

「お、おいみんな反応がなんだか辛辣じゃ無いか？」

「むっ？」

辛辣？めぐみんはともかく俺は違うんじゃ無いかい変態クルセイダーのダクネスや、俺はただ互いの名前を呼びあつて抱きしめあつているのがとても微笑ましいと思っただけだよ、ただ少し互いに圧迫しあつている胸に目がいっているだけだね、うん。

「ところでまゆたん、何か俺たちに……というより零に何かあるんじゃないかなかったか？」

「そうっすね、実はさつきエリス先輩から言伝を頼まれたんっす。えっと確かドクシャノキボウ?とかいうので言語を習得させるのが失敗したそうっす、しかも今回はこちらの不手際という形ではなく不幸な事故というふうになって、そういう場合は一切責任は取れないらしいっす。だからもう前のように入れ直しが出来なくって：あ!でもとりあえず幼児化は維持してもらえることになったっす!」

まゆたんはそう淡々と話した。つまりもう言葉を取り戻すことはできないということなのか?と聞くかどうかやらそうでは無いらしい、一体どういうことなんだ?」

「実は我のように形がある状態でこの世界にあるのなら取り込むことができるはずっす。詳しくはアクア先輩が知ってるはずっすから、じゃあそう言うことで。」

アクアが居れば零をもどせる、そうまゆたんは一方的に喋ってゆんゆんとともに帰ってしまった、またいつかあの百合は見せてもらおう。

「今の話、わからないところがいくつかあるのですが。」

「どうしたんだいきなり?」

帰っていくまゆたんたちの背中を見送っていると不意にめぐみんが話しかけてきた、どうやら俺達の会話にイマイチついていけなかったらしい。あたりまえか、まだ俺達が転生者とは言っていないしアクアのこととは冗談だと言ってきた、まあアクアはあれで女神なのか俺ですら疑うレベルだし。だが正体を明かすのにはいい機会かもしれない。



「なあダクネス、めぐみん、実は今まで言っていないかったが俺達は異世界から来た転生者なんだ、アクアも一応これでも本物の女神らしい。」

「ちよっ！一応つてなによ！見ての通り紛うことなく正真正銘100%本物の女神よ私  
は！」

「「そういう夢を見たのか。」」

「違うわよ！て言うかなんでカズマも混ざってるのよ!？」

「仕方がない、アクアは一応女神なのであつてそんなにも女神主張されると否定するほかない。そう仕方がないのだ。」

「まあそれはともかくカズマ達が異世界人？と言うのは信じられません；が、零の謎のスキルの件もありますからね、全くの嘘というわけでもなさそうです、それにまゆたんについていた天使の輪も本物としか思えませんし。」

「まあ嘘でも本当でも今の俺たちには特に意味はないしな。それでアクア、まゆたんが言つてたことは本当なのか？」

「転生話は置いておいてまゆたんが言つていたこと、とはアクアが零をもどせると言つていた事だ、もしできるなら戦力増強のためにしておきたい。」

「まあいけるんじゃない？」

「…アクアにちゃんとした回答を期待した俺が馬鹿だった。つとそんな事よりクエス

ト報告だな、ただまだぐずっている零と一緒に入ったらどんな風に誤解されるかたまつたもんじゃない、しかしかねはひつようだ。そして俺は不安を抱えながらギルドへと歩いた。

## この家なしパーティに豪邸を1

俺達はあの後無事にクエストの報酬は受け取った、しかしその日は妙に敵意のある気配がした：と言うか絶対零の周りにいた女子達だろうが！、敵感知も反応してたしたまに見えるうさ耳は以前見たことあるんだよちくしょう！：はあ。

次の日には零の機嫌は治ったんだが、今は何故か零に連れられて知らない道を進んでいた。

「なあ、一体どこに行こうと：つて雑貨屋か？ここがいったい何なんd：コレは！」  
店に入ると俺は啞然とした、何故なら店の中にいた店員：巨乳だったのだから！  
― zero side 1

やったです、カズマさんの顔に笑顔が戻りましたよ！まあ大抵の男の人は巨乳に惹かれますよね：私はちっばい好きでしたけど。

「またきた。」

「あら、レイさんいらっしやいませ、このお二人は？」

ふたり？！私の他にはカズマさんしかいないはず：そう思っていた。

「二人でどこいくのかと思ったら雑貨屋なんか来ちゃって、どうしたのよ？」

「アクアさんだった、どうやら二人で隠れて美味しいものでも食べに行つたのだと勘違いしてこつそりついて来たらしい。」

「ちよつとなんかここ臭うんですけど……つてこの臭いはアンデット臭？まさか貴女アンデットじゃないでしょうね。」

「ヒイツ！何で私がリッチーだとわかつたんですか!？」

「リッチー!?!今貴女リッチーていつたわね！神の理を冒涇した存在がよくのこのこと店なんて出されてられるわね！神の名の下にこの店を燃やしッターイ！」

あまりにもアクアさんが邪魔なので弁慶の泣き所をパーンしてやりましたよ、後悔はしていない。

「ところでこのお二人はレイさんのお友達ですか？」

「あ、えつと俺は冒険者のカズマ、こつちの五月蠅い方は一応アークプリーストのアクアだ、どうぞよろしく……えつと？」

やっぱリカズマさんにはどストライクなようで無駄にキメ顔で自己紹介です。最近普通にしていた方がかつこいいんじゃないかと思つてしまう私、TSの影響？それとも末期なだけ？それはさておきもう少しサプライズも準備しよう。

「私はウイズです。初めましてカズマさん、アクアさん。」

「ああ、よろしくウイズうっぷ!？」

「ヒヤアン!？」

カズマさんの挨拶が終わるのと同時に私は彼の背中を強く押したのだ、その結果カズマさんの顔はウイズの余分な二つの脂肪の間にダイブしたのだ。

「だ、大丈夫ですかカズマさん!？」

大丈夫ウイズ、逆に大丈夫だからね。

「ああ俺は大丈夫だ、それよりウイズ? 君こそ怪我はなかったかい (キリツ)」

この様子ですからね、今は頬が緩みそうなのを我慢してカツコつけを維持しているみたい、どうやら喜んでくれるよう、作戦は成功と言えるでしょうね。

「ええ、私は大丈夫ですけど?」

「ちなみにウイズはリッチーだと言っていたね」

「そうです、これでもノーライフキングとも呼ばれているリッチーです。」

「ちようど今、スキルポイントに余裕があるんだ、よければいいんだが何か教えてはもらえないだろうか。(キリツ)」

相変わらずのキメ顔、ウイズもわかっていらしく苦笑いをこらえている顔をしている。そこに…。

「ちよつとカズマ! 女神の従者のくせに神を冒瀆した存在であるリッチーのスキルを覚えるとかありえないんですけど!!」

「誰が従者だ、誰が!」

「…女神?」

また私は置いてけぼりで話が進んでいく、私はそれが少し好きじゃない、

「そう、わたしはアクシズ教団が崇めるめがアーツ…ちよつとまた弁慶はやめて!わたしを一体なんだと思ってるのよ零!」

アクアさんの話すことは大抵が無駄話なので

今度は逆の足の弁慶にパーンである。

「あ、アクシズ教!?あの頭のおかしな人が多いというあの!」

「頭がおかしい人が多いとかアクアの信者たちはどうなってるんだよ…。」

いつのまにかカズマさんのイケメンモード(笑)が解けてしまってますね、目標は達成したのでいいですけど。

「そういえばカズマさんはスキルを覚えたんですけどね、それであればドレインタツチなんてどうでしょう?敵の体力や魔力を吸い取ったり逆に相手に分け与えたりできるスキルです。あ、でも。」

「ん?」

アクアさんを拘束している間にもふたりの会話は進んでいく、今はともかく恩を返すために楽しい時間を過ごして欲しいのですよ、なにを離してるのか詳細は分かりません

けど。

「このスキルは相手がいないと発動できないものでして、もちろん少ししか吸いませんから…それで誰か手を出してもらえませんか？」

「よしアクア、勝手についてきたからには手伝ってもらうぞ、手を貸せ。あと零はもう離してやれ。」

そう言うときカズマさんはわたしをヒョイツと抱き上げてアクアさんをウイズに近づけた…バイトでもさせるんでしょうか？人気がないこの店で？

「チツ、わかったわよ…ほら、いくらでもどうぞ？さあ。」

なんだかよくわからない内にアクアさんが間に入りウイズと握手していた。その時のアクアさんの表情は本当は女神なんてものではなく悪魔じゃないのかと疑いたくなる黒さだった、ウイズは案の定その顔を見て怯えている様子。まあビビりみたいですし。

「で、では失礼します…ってあれ？魔力が吸えない？」

「ほらほら、魔力でもなんでも吸って見なさいよ、さあ？って痛いわよ零！…じゃなくてカズマ？？なにをするのよ！これはリッチーと女神の戦いなの、簡単に吸われるなんて女神のプライドが許せないわ！」

今回は違いますよなんで確認しない内に私を怒鳴るんですか、私はそうそう人に暴力

を振るうことなんてありませんよ。今回はカズマさんがおもむろに鞘付きの剣をだしてアクアさんの頭部に当てただけです。その怒りを表すため私はめいっばいに頬を膨れさせる。

「話が長くなるだけだからさっさと吸われろ、なんなら次喰らわせるのはスティールでも良いんだぞ。」

「…わかつたわよ。」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「…よし、これで習得つと。」

どうやら今までやっていたことはスキルを見て覚える事だったらしい、カズマさんしかできないのか私にもできるのか知らないけど。

それにしてもアクアさんウイズの手を握ったまんまです、どうしたんでしょ？

「あの、アクアさん？そろそろ離してもらえないですか？というかアクアさんに触れると手がピリピリするのですが…というより明らかに透けてきたんですが!?!消えちゃいますから！お願いですからはなしてください！」

確かに透けている、服がじゃなくて体も含めてだ、これ人に見られたらやばくないですか？そのタイミング悪く滅多に開かない扉がベルを鳴らしながら唐突に開かれた。

「あのーウイズさんはいらっしやいま…フグッ。」



∴私は危険を感じいきなり入ってきたおじさんを気絶させた。

## この宿無しパーティに豪邸を2

「ここがその豪邸か」

俺達は今クエスト中、と言うのも元はウイズに対する依頼をこっちに譲ってもらったのだ。ウイズは街では聡明な魔法使いで通っているらしくたまに頼みに来る人がいるんだとか。ちなみに今回は除霊、最近になって元貴族の別荘に霊が現れ続けているらしいが霊ならアクアがいるから安心だから肝心なのは報酬、なんと依頼主の豪邸にいく依頼を達成すればこの豪邸に住んで良いという。

「まったく太っ腹だよな豪邸さん。」

「しかし聞いた話では祓つてもまたすぐに霊が寄ってきてしまうそうですよ、大丈夫なのですか？」

「大丈夫、私がいるじゃない。なんたって私は女神にしてアークプリーストなのよ、いわば対アンデットのエキスパートよ！みてなさい。」

みんなが歓声をあげるとアクアはおもむろに豪邸に手を伸ばしブツブツ言い出した、まあ実際一応は女神だし上級職だし上手くやってくれるだろう。

「この屋敷には貴族が遊び半分で手を出したメイドとの間にできた子供その隠し子が幽

閉されていたようね。」

…そう思っていた時もありました。といふかなんでそんな事までわかるんだよ。

― zero side 1

私達は豪邸の霊を調べるのに夢中になって、アクアさんを門の前に置き去りにし各自割り当てた部屋で早々に荷ほどきを済ませて今は集まって掃除の終盤、そろそろ終わる頃？

「これで掃除は一通り終わったな。」

「部屋割りも決めたし、荷物も運び込んだし、あとは夜を待つだけだ…ってどうしたんだ零？」

「…。」

…別に何もありませんよ、そう何も。

「きつと今頃お化けが怖くなったのでしよう、まったくあの不思議な力を持っていてもまだ中身は小さい子供ですね、いや本当に！」

一つ言うとかズマさんは散々私が女でないと主張しましたが結局男とも同年代くらいだとも信じてもらえなかったようです。

「おぼけ こわい ちがう。」

ともかくそれです、お化けなんて怖くないのですよ、急に脅かされるのが嫌いなだけ

です…すみませんやっぱり怖いです、お化け屋敷なんかは生前小学校低学年の頃に一度母親の後ろで目をつぶりながらついて行ったつきり完全拒否なのですよ、あれは完全に相対してはいけないジャンルです。

「口ではそんなことを言っても私にはお見通し、さあ白状するのです!」

「やめてやれぬぐみん、自分が年上だからとそんなことばかりやっていていつか痛い目を見るぞ、私はむしろ大歓迎なのだ。」

「それにしてもアクアのやつ遅い、「好きなものはぬいぐるみ、そして冒険者達の冒険話、でも安心して、この子は悪い子じゃな」…まだやってたんだが。」

そう言いながら一度開けた窓を速攻で締めるとすぐに気を取り直したカズマさんは「解散!」と声をあげその掛け声で少しだけキョトンとしながらもみんなはこの部屋を後にした、号令的なものも無かったんでしょうか?この異世界。

「ちよつと、なんでみんないないのよ!」

みんなが分かれてから数分後、やつとアクアさんが大声を上げて入ってきました、それにしてもあれだけ気づかないってビックリですね。それはともかくすでにみんなも私も夕食は終えているのでとは各自部屋で待機、アクアさんはアンデットにはめっぴう強いらしいのでおそらく任せることになるでしょう。



日も完全に落ち夜になった、さつきなぜかスケスケのパジャマ？に着替えていたダクネスが部屋から出て入ってしまった。退治にでも行くんでしようか？霊は物理で倒せないイメージがあるので正直ダクネスの行動は疑問に思えてなりません。ああそういえば同じくらいにアクアさんが悲鳴をあげてましたね、アクアさんでもきつとおぼげが怖かったんでしょう、あれでもやっぱり女の子ですね。

そんな的外れな思考を巡らせながら私はベッドの掛け布団を被って丸まっていた。

「ターンアンデットターンアンデットターンアンデット花鳥風月〜ターンアンデットターンアンデットターンアンデット！」

アクアさんの声が家中に響き渡る、ターンアンデットはたしか成仏させるスキルだったはず、ならもう何も心配はいりませんね、そう思った私は警戒を解き布団を被るのをやめて寝る準備。

「コンコンコン」

ドアを叩く音が聞こえてきた、もう寝る準備も済ませたのに誰なんでしょうか？…?!?

警戒を解いていたのがいけなかった、何故ならドアを開けるとそこにいたのは明らかに霊が憑いている人形たちなのだから。

「なう—————?!?!」

悲鳴をあげる私は部屋の中で追い回されぐるぐると回っているがこれではジリ貧、ならば別の部屋に行くしかない、私は隙を見て廊下へ逃げ出しすぐさま別の部屋に入った。

「ふあゝ、どうしたんだよ零。」

「カズマカズマかじゅまー!!」

カズマさんを見るとどうやら私が走ってきた音で目を覚ましてしまった様子、しかし今は関係ないここまでピンチなんだから。そうこうしているうちに閉めたドアから私の部屋の時より大きく叩く音がし始めた。

「カズマ にんぎよう ろうか 霊 たくさん!」

「あのどんどん叩いてるやつか、くっ!逃げ道がないぞ。…よし、ここにいてもラチがあかない、強行突破だ!」

そう言うときカズマさんはドアを勢いよく開け人形を弾き飛ばし強引に突破した、私はずいといふとカズマさんにおんぶしてもらい顔をカズマさんの背中に埋めていました…怖いですし。とここで再度ドアの開閉オンが私の耳に入ってきた。

「…どい?」

「アクアの部屋だ、アクアなら簡単に除霊できるだろうしな〜と、あれ?アクアはどこってうわー!!」

「ふぁーっ!!」

悲鳴をあげるのも無理はない、アクアさんの部屋のベットにはアクアさんでない者がいたのだから。闇夜に赤く光る目、ピンク色の…パジャマ? おや、よく見るとめぐみんちゃんでした、というか同様に悲鳴をあげた時点で気づくべきでしたね。

「なんだよめぐみんか、危うく気絶するところだったぞ。」

「それはこちらのセリフです、何故カズマがこの部屋にとびこんでくるんですか、アクアが帰ってきたと思ったのに。」

辺りを見渡してもアクアの姿はない、やっぱりまだ霊との戦闘から戻ってきてないらしい。

「ということはアクアはまだ除霊中ってわけか、そういえばなんでめぐみんもアクアの部屋に?」

「それは…人形があちこち動いておりまして、アクアに身の安全を守ってもらおうのと、一緒にトイレにと思ひまして。」

「お前もか、俺も零が部屋に入ってきておきたんだが幽霊? が入るのも時間の問題だったんでアクアの部屋に来たんだが、当てが外れた。」

「あの…。」 「ん?」 カズマでも構わないのでトイレに付いてきてくれませんか?」

「ん…まあいいぜ、せっかくだし俺も出しとくか、正直人形は厄介だが。」



「カズマ、本当にいますか?」

「…いるよ、一体何回聞けば気がすむんだお前は。」

なんとか人形のお化けの目をかいくぐり今はトイレの前に、めぐみんちゃんはトイレの中ですが。

「…そうですか、あのこの状態はかなり恥ずかしいのでできれば大きめの声で歌でも歌ってくれませんか?」

歌ですか。

「誰が悲しくてこんな夜中に歌「うーうー、きつとくるーきつたくるー」なんでよりにもよってそのチョイスなんだ零。」

とりあえず覚えている曲を歌ってみましたがこれはダメなようですね。

「トウルルルル、トウルルルル、トウルルル。」

「どうしてその曲が出てくるんだよ。」

これもダメ? まゆたんと一緒に思い出せた曲は随分くせ者揃いですね。

「さつきから不安になるような歌ばかりですが大丈夫なのですか!」

「だいじょーぶ。…さいたーさいたー、ちゅーりーぶーのーはーなーがー。」

「それだ!」



「どうやら今回は良かったらしいです、しかもかなり好印象。とりあえずそのまま私は覚えているところまでは歌いましょうかね。」

「あ、もういいですよ終わりでしたから。ありがとうございます。」

その声とともにめぐみんちゃんは無事に用をたすことができた、それに変わるように「じゃあ俺な」とカズマさんがトイレに入って行ってしまいました。

「ヒマー…ッ!」「ヒイツ!…もしかしなくてもいますよね人形が。」

退屈しているとフラグ回収の如く突如不穏な音が小さく響く、恐る恐る見てみると案の定に人形が廊下の角から顔をのぞかせていた。

「カズマカズマカズマカズマカズマ!!」

カズマを連呼しながらドンドンとドアを叩いても当然開けてくれない、これは…。

「あける。」

決意した私達は勢いよくドアを開け入ると同時にトイレへと転がり込んだ。

「ちよっ!何入ってきてるんだよ、痴女か!」

「仕方ないじゃないですか、すぐそこまで人形が迫ってきていたのですから!つて待つてください今こちらを向かれたらっ!」

「ッ!」バタッ

「あ…。」



眼が覚めると既に太陽は昇って朝を過ぎてしまっていた、どうやらカズマさんの…あれを見てしまったせいで気絶したみたい。でもおかしいです、私は今は女の子ですけど生前は男でした、ちなみに今回いくつかわかったことがある、まず女体化の影響がここまでできていたこと、それと…カズマさんのが生前の私のよりも大きいという事である。

## この古代兵器に終止符を

無事家が入りここので暮らしに慣れ始めた頃、冒険者仲間であるダストとキースに連れられない夢を見せてくれるというサキュバスの店に入った俺は素晴らしい夢サービスに驚愕し即利用を決意した。もちろんアクア達にサキュバスのことはバレないよう一日宿も取って、今はその翌日。

「アクアー！アクアはどこだー！」

俺は怒りを抑えずドタバタと走りながら家に帰ってきた。そしていつもアクアがいるリビングのドアを開け鬼の形相をしてジリジリと詰め寄った。

「アクア！お前俺の身体に一体何したんだ！」

「何って一晩帰らないっていうから悪いものが寄ってこないように対悪魔用のバリアをかけてあげただけだけど？」

「…やっぱりお前のせいだよ（ポソツ）。」

「カズマ何か言った？」

こっちからしてみれば迷惑甚だしい、しかしまずアクアを黙らせるには俺が怒っている理由から話さなければならぬんだが…。

―昨晚―

風呂には行った、宿は一晩借りた、これであとはサキュバスが来てくれるだけだ。

「あ、お客さんまだ起きていたんですね、さっそく始めますか？」

そう言つて窓から現れた白いシヨートヘアで露出多めのサキュバスは俺が寝ているベットの横に降り立った。

「は、はい！よろしくおねがいます。」

緊張してガチガチになつてはいるが俺は言う通りにベットに寝そべり寝る体勢をとつたが。

「では始めていきますよ…つてあれ？どうして!？」

「ど、どうしました?！」

話を聞くとどうやら俺にかけるはずの魔法が効かなかつたらしい、他の魔法もダメらしく今晚は無理だと言う。俺は少々淫夢サービスを断念したが代わりにサキュバスのお姉さんからお詫びとしてかなりの枚数の割引券をもらつてしまった。

◆◆◆◆◆

つまりこいつのおかげで割引券を手に入れることができたが、そのかわりサービスを受けられなかつたわけだが、そんなことを言つたら間違いなくあの店がサキュバスごと破壊されかねん。

「デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！住民の皆さんは直ちに避難を。冒険者の皆さんは装備を整え冒険者ギルドへ！」

俺がアクアへの返事に悩んでいると急に街にけたたましく警報が響いた、それと同時に俺がここに入ってきたのと同じドアがドツ！と勢いよく開けられた。

「おいカズマ、ギルドから呼び出しくらつてるぞ！後、ミスターケイがデストロイヤーのことでギルドで話があるらしい！」

「何?！」

突如現れたダスト、どうやらデュラハン討伐に最も貢献した俺達のパーティーをKとは関係なくギルド側が呼びに来たらしい、しかしなんでミスターKがデストロイヤーを? つくづく謎が多いおっさんだな。

「これは後で名前を隠してる理由とかデストロイヤーにこだわる意味なんか色々聞きたいとな。」

「カズマ何を言っているのですか? ミスターケイはミスターケイじゃないのですか?」「あれ?！」

そうだKはアルファベット、つまり生前の世界の文字だ、じゃあKは…。

「これは聞きたいことを追加しないとな! ミスターK!!」

そう言いながら俺はちようどついたギルドのドアを勢いよくこじ開けた。

「カズマか…その様子だと俺の正体に気づいたみたいだな。」

「ああ、あんたは転生者だよな。」

転生者、それを聞きギルドの中は一瞬のうちにどよめく、そしてミスターKが頷くと更にその声は大きなものになった。

「俺の本当の名前は」桐島 啓介（きりしまけいすけ）。「あー！」つなんだ！人が喋ってる時に。」

周囲がざわめいている中で唐突に大声を出したのはまさかのまゆたんだった、名前を聞いて声を張り上げたんだから何か知ってんだろう。

「どうしたんだよまゆたん、急に声なんかあげて。」

「その名前は知ってるっす、古い魔法…イリユージョン魔法を創って本にした製作者の名前っす！あれだけ古い本の製作者がなんで生きてるっすか！」

俺が想像していた以上に重大発言だな、古代魔法とまゆたんが読んでいる魔法を作り上げた張本人が目の前にいる、まゆたんのいう通りかなりの歳月が経つるにもかかわらず死んでないどころか中年程度の歳にしが見えない。

「あの本を読む奴がいたとはな、ということはお前も転生者か？」

「違うっす、事情があつてこれ以上は話せないっすけど。」

「そうか…それでは話を戻そう、その話の中でお前らが疑問に思つてることも理解でき

そうだしな。まず俺はデストロイヤーを造った1人だ。」

その言葉を言い終えた直後、ギルド内の人々の驚愕の思いが固まった絶叫で満たされた、一部耳を塞いでいたがそれも数人だ（ちなみに零も耳を塞いでいたがめぐみんは驚嘆していた）。

「厳密に言えば俺ともう1人との合作だ、俺が魔力の制御回路を作りもう1人があのフォルムと内部構造を作り上げた。俺達はすぐさま試運転をしたんだ、しかしそれで暴走を……。デストロイヤーが国を破壊し次の目標へと向かう途中俺はなんとか降りてデストロイヤーを止める方法を考えた、しかし思いつかなかった。そこで考え付いたのが思考する力は残した状態での自分自身の封印だ。長い月日俺は考えた、そしてついにヤツを破壊する魔法を作り上げるのに成功したんだ。これで俺が古くから存在するのはわかっただろ。」

「ちよつと待ってくれ！魔法つてそんなに簡単に作れるもんなのか……つてそうか転生特典か。」

俺はアクアを、零は操陰を、ミツルギは魔剣グラムをそれぞれもらった。つまりこの人も俺達と同様に何かしらの特典をもらったということだ。

「そう、俺の手に入れたのは魔法創造。イメージした魔法を創ることができるスキルだ。」

デストロイヤーを消し去る方法は手に入れた、場所も今デストロイヤーは破壊に最適な環境に向かっている。これは俺のけじめだ俺だけでやる、だからお前らは隠れてろ。」

「ちよつと待つてくください！あれほど巨大なものを破壊するなんて並みの魔力では出来ないことです、死ぬ気ですか!？」

「…俺があれを作ったんだ、ケジメはつけなければならぬ。」

めぐみんの質問にK：いや桐島は言葉を濁しているが丸わかりだ、自爆まがいの方法でデストロイヤーを破壊する気があると思えない。

「ケイ、俺達は何度もあんたに助けられたんだ!」

「そうだそうだ、俺達にも少しくらい恩を返させてくれよ!」

突如として冒険者数人の言葉を皮切りに次々と賛同の声を上げていく。俺と同じく魔法習得に協力してもらった奴の他にも戦闘のコツを習った奴、モンスターへの注意点や弱点を教えてもらった奴はかなりいたらしく、ほぼ全ての冒険者は彼の手ほどきを受けたことがあるらしい。

「あのカズマさん、なんとか出来ませんか？私共も誰も受けたがらないクエストなどで桐島さんに助けられました。」

「…ちなみにデストロイヤー警報で言っていましたけどどの位接近してるんで「た、大変です！デストロイヤーがついに森を突破しました」なに!？」



「確か森から街の壁まではそこまで距離に余裕はなかったはず……こうなったら！」

「零、先に行つてデストロイヤーを足止めしていてくれ。」

「あい！」

「待つてくれあれには強力なバリアが張られている、ただのジリ貧だ！俺が行くしか方法は無い！」

桐島は少し命を大事にしてほしいものだ。つたく今まで苦しんだんだ、後悔したんだ、償いはそれで十分だ。

「ならアクア、お前ならバリアの一つや二つ解除できるだろ、えつと元なんだっけ？」

「女神よ現在進行形で！見てなさいよそのくらい朝飯前なんだから。」

「頼んだぞ。めぐみんお前はバリアの解除ができたら爆裂魔法を最大火力でぶち込んでやれ！……つてどうしたためぐみん？」

「あの、申し訳ないのですが流石の私でもデストロイヤー相手では1発で仕留めるのは厳しいかと……。」

これはまずい、めぐみんの魔法でできないとなると流石に厳しい、他にあれが放てる奴はいないのかそう考える俺の元に2人分の足音が近づいてきた。そう……。

「あの、爆裂魔法なら私もお手伝い出来るかと。」

「力足らずっすが師匠の弟子の我まゆたん」

もついに爆裂魔法習得、ウイザードながらその力存分に振るうっス！」

「ウイズ！まゆたん！」

よし、これなら流石の古代兵器も無事ではいられないだろう、そうすれば桐島が体を張らなくて済む！

「よし、やるぞー！」

ー零 side ー

足止めを指示された私は持ち前の身体能力を使いすぐさまデストロイヤーが迫る門へと向かった。

「ですとろいやー きてる。」

報告通りこちらに向かっているデストロイヤーはすぐ近くでおそらく5分もしないうちにこの門は突破されるでしょう、しかしそれをさせないのが私の役目！

「おおきい かずおおい かたい あつい じょうぶ とおさない！」

【四連式 黒大壁・ブラックウォールズ】

操陰はイメージが強ければ強いほど技の完成度が上がるスキル、初めての物なら物体の特徴を口にするだけでもかなりの効果がある。

「ゴゴゴガゴッ！ガゴッ！ガッ！」

デストロイヤーは轟音を立てて一つ二つと壁を破壊し、三つ目の壁にヒビをいれなが

らもなんとか足止めには成功した。

「零！待たせたわね！」

しばらくデストロイヤーの進行を食い止めていると壁の上からアクアさんの声、振り返ると門の前にはたくさんの冒険者、壁の上にはアクアさん、めぐみんちゃん、まゆたん、ウイズさんの姿が。

「今まで良く持ちこたえてくれたな、ありがとう。あとは私たちに任せろ。」

「そうだな、でも俺が合図を出すまでは待つてくれよ。」

いつのまにか近くに来ていたダクネスとカズマさん、どうやら準備は整ったらしい。

「ところでなんでダクネスもこんなところに来てるんだ？そろそろ作戦も始まるからいや、私はここに残る。」にげ…って、今なんて？」

「ここに残ると言ったのだ…：そうだな2人には話しておこう、私の本当の名はダステイネスフォードララティーナ、この近隣を治めるダステイネス家の娘だ。私はクルセイダーとしてダステイネス家の娘として皆を守る義務がある…この事は皆には内緒に。」

「マ、マジかよ…！」

カズマさんは驚いてますけど話がほとんど聞いたことがない言葉なので私にはさっぱりです、でも。

「ダクネス、ララテイーナ？」

「なっ……！レイ、ララテイーナはよしてくれ、今まで通りダクネスと呼んで欲しい。」

「？どうやらララテイーナはお気に召さなかったらしい、いつも通りダクネス、ですね。というわけだ、私はここに残る。2人はみんなの元へ行っていてくれ。」

カズマさんは気をつけろよと言って私とともに門へと向かった。

## この二次創作（一期）に終止符を

「ガゴゴゴゴ」と不吉な音を立てながら最後の黒壁を突破した。

「アクア今だー!」

「セイクリッドブレイクスペルツ」!!

アクアがそう叫ぶと背後から突如として計5つの魔法陣があらわれ結界を砕かんとばかりに5つの光線が束になってデストロイヤーめがけ発射された。しかしデストロイヤーの結界は堅く思うように割れてはくれなかった。

「これでもダメなのか!」

「あ…ひび!」

「え?!…はっ!本当です!ヒビですヒビが入ってます!!」

結界はアクアの技で見事に砕けその効力を失っていく、それとともに魔法使い二人の足音が壁の上でピタリとやんだ。

「やりましょうまゆたんさん!…ところでめぐみんさんはどちらに?」

「ん?あれ、どこっスカー師匠。」

めぐみんはというと。

「あわわわわ…。わ、ワタシハダイジョウビ。」

この様子である。

流石のめぐみんもデストロイヤーを前にして足がすくむらしく、声も震わせ壁のてっぺんにも登れていなかった。

「あんなもの、わ…。我が爆裂魔法の前にすれば無力ですよ。」

「師匠。」

「ひゃい!?!」

「【クリエイトウオーター】!!」

そのまゆたんの水魔法はめぐみんの顔へ勢い良く発射された。そんな攻撃が来るなど考えもしていないめぐみんはまともにくらいびしよ濡れである。

「なっ、何をするのですか!」

「大魔法使いである師匠がそんな様子でどうするんっすか! 師匠の爆裂魔法に対する気持ちはその程度っすか!」

「ふっ…。弟子に教えられるとは、私もまだまだだったということですね…。目が覚めましたよ我が一番弟子まゆたん。さあ! 古代の兵器、我が爆裂道の糧になるがいい!」

まゆたんの言葉によってめぐみんはいつもの勢いを取り戻し力強く壁のてっぺんへと登りきった。

「めぐみんさん！」

「師匠！」

「やりましょう！」

「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたもう、覚醒のとき来たれり、無謬の境界に落ちし理、無行の歪みとなりて現出せよ！」「エクスプロージョン！」「」

三人は詠唱を終えるとその最強の威力と言われる魔法を同時にデストロイヤーへと放った。

「ドゴオオン!!」

その轟音とともにデストロイヤーは崩れ落ち、その巨体は沈黙した。

「やったか……！」

「俺この戦いが終わったら結婚するんだ。」

ーカズマ side ー

さつきからフラグとしか思えないセリフがとびかってるんだが。

「さあ帰って祝杯よ！報酬はおいくらかしら♪」

「ちよっ！」

プラグが重なり案の定デストロイヤーの目が不穏に点滅し始める。

「被害甚大につき自爆機能を作動します、乗組員は直ちに避難してください。」

悪い予感の中した…というより。

「ヤバァー!!」

ここに集まった冒険者皆「ダメだ」「無理だ」と逃げていく、誰だってそうする、俺だってそうする。

早々とめぐみんを回収し共に逃げるためダクネスのもとに行った。しかし。

「私は最後まで引くわけにはいかない、領民より先に騎士が逃げるなどあつてはならない。」

ダクネスさすは…。

「それに街を吹き飛ばすほどの爆弾に身を晒しているかと思うとどうだ。「ん？」なんだこの湧き上がる興奮は、果たして私は耐えられるのだろうか、いやいくら頑丈だからとはいえ無事ではすまないだろう…もう辛抱たまらん！カズマ私は突撃する、いつてくりゅ!!」

「おい、ダクネスさんが突撃してるぞ！」

「ー!」

「そうか爆破する前に破壊するつもりなんだ！」

「街を守るために!?!」

あー!あのド変態行きやがった!!後ろもそれを見て誤解し始めるしどうなってるんだ



!

「俺たちもやるぞ！」

「おーっ！」

「この街（主にサキュバス）に世話になってきたんだ！守らなきゃ漢がすたる！」

「「ウオーッ!!」」

後ろの方から次々と冒険者達がデストロイヤーに向けて走り出し、ある者はロープで侵入ルートを確保し、ある者は魔法で壁を壊し侵入、気がつけば大多数の冒険者達がデストロイヤーの内部へと入って行った

「カズマさん、もしかしたら制御装置を見つけれれば自爆を止められるかもしれない。」「

「ダクネスそんなこと絶対考えずに突っ込んでいったよな。」

しかしその暴走のおかげで勝機が生まれたのは事実だ、後でシユワシユワでも奢ってやるか。

「じゃあめぐみん、俺たちは行ってくる、お前は置いて行くからな。」

「まあ仕方がないでしょう。」

爆裂魔法を撃つためぐみんを背負ったままではさすがに動きにくい、もし爆裂魔法未使用で動けたとしても爆裂魔法をデストロイヤー内部で撃たれた場合こっちも巻き添

えをくらいかねない。

「見つけたぞー！」

どうやら中に入った冒険者の一人が核にあたる部分を見つけたらしい、俺達はアクア・零・ウイズとともに冒険者の案内で底へと向かった。

「ここだ。」

周りを見渡すと動力源のコロナタイトという物らしい不気味に光輝く球体、椅子にガイコツ、日本にいた頃に見覚えのあるような機械類がそこにはあった。

「このガイコツは…Kの言っていた開発者の一人か？」

「そうみたいね、あ！日記があるわ。」

ちよっ!?

「えーと、何々？『国のお偉いさんが無茶言ってきた、こんな低予算で機動兵器を作れと言う、無茶だ。動力源をどうこういわれたけど知るか、伝説のコロナタイトでも持って来いといつてやった。」

【数週間後】…：ほんとに持って来ちゃったどうしょ（汗）相方はなんかしんないけど乗り気になっちゃってるし…：こいつ事の重大さわかってないんじやね？これでうまくいかなかったら死刑かもなんだズエ!?!動いてくださいお願いします！

【さらに数ヶ月後】…：ヤツベエ出来ちゃったよヤツベエ、俺達ヤツベエ、景気付けに俺の

鼻くそつけちやおつと、鼻くそとか俺ヤツベエW。

【数日後】終わった…ただ今暴走中つて　あつ！国滅んだヤツベエ滅んじやったよヤツベエ！…でもなんかスカツとした。相方はなんか慌てて修理してるみたいだけどもういいだろ？国すでに滅んじやったんだから無理だろ？じやあ俺はもうここで余生暮らしちやおうだつて俺は降りられないしなく、あれ？あいつ落ちてら、死ぬんじやねえの？この高さだし。これ降りられる構造ないとか担当者馬鹿だろ!?!あ、この構造作った担当者俺でした。』…おしまい。」

「馬鹿か！」

…今の文書にあった相方、その人がつまりはKなんだろう。確かに本人が作ってしまつたとはいえなんとかしようとしていたのは確からしいな。

「とりあえずダストたちは先に逃したけどどうすんだこれ？」

「おー　ぴかぴか。」

どうやら零が遅れて到着、ん？もしして。

「丁度いい所に来たな零、このピカピカをお前の操陰でなんとか出来ないか？」

零はその言葉に対して自身の頭を横に振つた。本人曰く操陰の耐久力が有限なのと伸ばせる距離にもある程度制限があるかららしい。

「おいアクア、女神パワーでなんとかできないか!？」

「無茶言わないでよー！アンデットとか呪いならできるとも魔力の暴走をどうこうできるわけないでしょう！ウイズ、あんたはなんかないの!?ねえ！」

「た、例えば転移魔法で…」「それだー！」でもこれは転移先を登録する必要がありますが、私は街中にしか置いていないので…残る方法はランダムでの転移しか。」

ランダムな転移、つまりは最悪どこかの街のど真ん中に転移する可能性もあるか…。だが今できる方法はそれしかない、コレはもう限界だ、いつ爆発してもおかしくないだ。

「ウイズやってくれ。大丈夫、全責任は俺がとる。こう見えても俺は運がいいらしい！」

「分かりました…あのカズマさんお願いが。」

「な、何でしょう。」

「その…吸わせてもらえませんか？」

「喜んで。」

俺は鈍感系主人公とは違うんだ、いまさら何を？なんて野暮なことには言わない。うん、役得。

「では。」

お父さんお母さん、俺は異世界で今大人の階段を登りま…まああああああ!?

至福の時間を堪能しようと目を閉じ、大人な妄想を繰り広げている最中の脱力感と魔力消費である。

吸わせてもらおう、つまりは魔力が足らなかつたという事だつた。何のことはない良く考えれば分かることだ、なにせウイズ自身に教えてもらったスキルの「ドレインタッチ」なのだから。ははあ…。

「ちよ、ちよつと！カズマさんが干物になつちやう！」

「っ！す、すみません!?!…ですがこれでレポートの魔法が使えます！」

「…そ…そうか…。」

ギリギリまで（魔力を）吸われた俺はそう答えるとバタリと倒れた。

「それではいきます。」

そう言つてウイズが呪文を唱えると煌々と輝いていたコロナタイトは一瞬にして消えた。

「せ、成功したのか?…ウイズ。」

「え?あ、はい。ランダムにはありますが転移自体は成功です！」

そうか、これでもう爆発する心配はない訳か…そう安堵していたがすぐに揺れはじめ、ウイズに魔力を搾り取られ床に横たわっていたせいで硬い床と何度も頭を無抵抗に打ち付ける羽目になつてしまった。

「いってー！動力源 は取り除いたはずなのになんで動いてるんだー!?」

「…！もしかしたら魔力を貯蔵できる場所があつてその魔力で動いている…なんてことはないですよね？」

「概ね正解だ、だがお前らのおかげでもう大丈夫だ！」

唐突にミスターKの声が聞こえてくる、上を見るとこの世界に不釣り合いなモニターにミスターKが映り込みそこから声は聞こえてきた。

「本来なら緊急停止させた後でないと搭載した魔法をいじれないようにバリアを施してあるんだがさっきの一撃で半機能停止になり、しかもメインのエネルギーであるコロナタイトからの魔力供給も断ってくれた、そのおかげで施した魔法の修正ができた。…。」  
そう言つて一方的に機内放送は切られた、と同時に強烈な縦の揺れと轟音が三度鳴り響きデストロイヤーは完全に沈黙した。



デストロイヤー襲来から数週間が経つた。周りは日を追うごとに以前と変わらない日常へと戻つていった、俺はといえばデストロイヤー戦の成果が実る時をゆつくりと静かに待つていた…

…が。

「冒険者サトウカズマ、貴様には現在国家転覆罪の容疑がかけられている。」  
…俺がなにをしたっていうんですか。

## このすば二期

### この物語に二期突入を

「冒険者サトウカズマ、貴様には現在国家転覆罪の容疑がかけられている。」

いつものようにギルドに入ると半ば強制的に連れてこられてこのありさまである。

…で、この人なんて言ってます？

「ちよつとカズマ、また一体なにをやらかしたの!?!ほら謝って!」

いくらあれから日数が経つていると言っても毎日言葉を教えてもらえるわけではないのです。

「またってなんだ!俺がなにもしてないのは知ってるだろ!?!」

これはわかる、たしかにこの所アクアさんがした門破壊やデストロイヤー撃破のような大したことは起きていない。

「貴様の指示で転送されたコロナタイトが領主殿の家を爆破したのだ」

「なっ!?!」

「幸い死人は出なかったが、貴様はテロリスト又は魔王軍の手先ではないかと疑われている。」



「ちよつとまつてください！デストロイヤー戦においてカズマの機転がなかったらもつと被害が出ていたかもしれません。」

うーんと、デストロイヤーを倒したカズマはすごいってことですかね？

「めぐみん……！」

「せいぜいカズマはセクハラとか小さい犯罪をやらすくらいです。」

セクハラって…。

…いや、思い当たる節はある。

「検察官殿、何かの間違いだ。」

「ダクネス……！」

「この男にそんな度胸はない、屋敷で薄着の私をあんな獣のような目で見ておきながら夜這いの一つもかけられない男だぞ、こいつは。」

こんな長文で聞いたことがない言葉が多すぎるせいで全くもってわからないですよ、度胸？夜這い？

「べつ！別に見てねえし!!お前ちよつとエロい身体してるからって図に乗るなよ、こつちだつて選ぶ権利あるんだぞ！」

…やつぱりポッキュボンが好みですかカズマさんは。私は自身のまな板ボディを見て差が歴然なのを再確認し溜息をつく。

「なっ！サキュバスに操られていたとはいえ風呂場であんなことをさせておいてよくそんなことがっ！…ブツ殺してやる!!」

「そんなことはない、問題なのは…」

そこではない、と女警察官？がいかけた時。

「お待ちください」

「！」

ひとりの女性の一声がギルド内にびしやりと響いた。

「申し遅れました、私は紅魔族出身のウィザード、まゆたんと申します。」

まゆたん!? 本場にまゆたんなんだろうか、その自己主張の激しい巨乳は確かにまゆたんと変わらないインパクトだ、だがあまりにも性格方面が変わりすぎている。

「本場にまゆたんなのか…!?」

「ええ、真正銘カズマさんの良き友人、まゆたんです。」

…信じられない、あの清楚とは程遠いまゆたんが姿勢を正しあたたかな笑みを周りに振りまいている、その様子は周りにも予想外のように皆同じく信じられない様子だった。

「何も心配はいりません、清悦ながら私がカズマさんの弁護士として裁判に立たせていただきます。よろしいですね？ 検察官様。」

その姿はまるでベテランの弁護士のように自身に満ち溢れていた。それに圧倒されたのか相手の検察官はまゆたんの弁護をその場で了承した。

そして時は過ぎ……。

「それでは裁判を始めます。」

「ちよつとまてい!!」

## この裁判に逆転を（前編）

「ちよつとまてい!!」

裁判の初つ端、カズマさんは大声をあげてそう言い放った。

「カズマさん、どうしましたか？」

「裁判は始まっているのです、私語は慎んでくださいサトウカズマ。」

私と検察側のセナさんは冷静に対応する、それにしてもどうしたのでしょうか？

「検察の人たちに連行された後いつの間にか終わっててこわいんだが！俺なにされたの!?!」

確かにスピーディだったのは認めますが記憶が飛ぶようなハードスケジュールでも薬を使われたのでもなかった、おそらく今か取り調べ中かまたはその両方の時での極度の緊張状態が記憶の欠如を引き起こしているのでしょうか。

「まあまあ、カズマさん私に任せておいてください。」

そう、今の私は弁護士、慌てているカズマさんの代わりに冷静でいなくては。相手は検察官のセナさん、被害者は貴族のアルダーブ、今は検察側でふんぞり返っている。対してこちらは被告人和真とその弁護人の私まゆたん。あちらはベテランと権力者、こち

らはどちらもただの冒険者。

「それでは検察官は前へ。」

—裁判開始—

「領主という地位の人間の命を脅かしたことは国家を揺るがしかねない事件です、よつて被告人サトウカズマに国家転覆罪の適用を求めます。第一証言者をここに。」

そう言つて検察官のセナさんは一人を証言台へと招き入れた。

「クリス!」

「あははあ…、なんか呼び出されちゃつて。」

ツ！なぜあの方が!?それにクリス?

「どうしてあなたがここに!?あな「ストップ!」」

「ん?証言者の方どうしましたか?」

「え!いや、まゆたんとはちよつとした知人で、知り合いが出てくるからまゆたんもびつくりしたんだと思うよ裁判長さん。」

クリスさんは私に「とりあえずこの私はクリスで通つてるから、そういうことにしておいてください。」と告げた後、証言者台へと歩いて行き証言へと移つた…そういうことなら仕方ないです。

「あなたは公衆の面前でステイールを使われパンツを剥がされたと?」

「そうだけど、でもあれは…。」

「私、見たんです！路地でパンツを振り回していた男を！」

そう不意に声をあげたのは傍聴している中の一人の魔法職系冒険者と思われる女の子だった。

「その男とは！」

セナさんの問いに彼女はその時の悲惨さを悲しんでか涙を浮かべその男へ指を向ける…カズマさんですね。

「事実である確認が取れただけで結「異議あり！」ッ!?？」

「裁判長、検察官は証言者クリスさんの証言がまだ途中なのを無視し終わらせようとなりました。これでは証言としては不十分、証言の続行を要求します。」

私はすかさずセナさんの不備を追求した、これで少しは私の評価はあがり弁護もしやすくなるでしょう、クリスさんならきつと続きはカズマさんにとって有利になる証言をしてくださるはず、お願いいたします。

「異議を認めましょう。クリスさん、続けてください。」

「えつとあれは、カズマに盗賊のスキルを教えた時に私から勝負を仕掛けたんだよ、たま運悪く、パンツを引き当てられちゃったけど。」

「つまり被告人は証言者クリスさんの勝負を受けた結果偶然あのような形なってます」

ただけだと？」

「まあそうなるかな、私も最初ステイールを見せるためとはいえカズマの財布を取っちゃったし。」

「これでは証拠にはなりにくいでしょうね、では次の証言者の方は前へ。」

私の予測通り和真さんにとって良い証言です、次もどんどん行きましょう。

「ミツルギキョウヤさん、貴方は被告人に魔剣を奪われ売り払われたと聞きました。」

「ま、まあその通りです、ですがあれはこちらから仕掛けた勝負、しかも完膚なきまでに正面からやられてし舞う結果に。僕はあれで自分がまだまだ井の中の蛙だったことを思い知らされました、今では慢心していた当時を悔やみ初心に帰って日々修行と労働の毎日です。」

「なっ！」

「証言者は検察側から二名となっております、ほかに追加で証言される方はいらつしやいますか？それともほかに証拠はありますか？ないなら・・・。」

思わぬところでまた良い証言、検察官も思わぬ事態に困惑しているよう。これは勝ちましたね。アルダープもこちらをにらみつけていますが無駄ですよ。

「いいえまだです！被告人はアンデットにしか使えないスキル、ドレインタッチを使つたという目撃情報があります！最も大きな根拠として貴方に魔王軍幹部との交流はな

いかと尋ねました、その際魔道具が嘘を探知したのです！」  
え。あああああああああああああああ！！



## この裁判に逆転を（後編）

さて、どうすべきでしょうまさかカズマさんがドレインタッチを覚えているなんて知りもしませんでした。報告で聞いた魔王軍との交流ならまだ言い訳がきく、しかしさらにアンデット専用スキルの所持・・・いったいどうすれば。

「もういいだろう、そいつは間違いなく魔王軍の関係者だ。わしの屋敷に爆発物を送り付けたんだぞ！すぐに死刑にしろ！」

ん？交流と関係者は違う、今はテロリストまたは魔王軍の手先疑惑を解ければよし、ならば。

「カズマさん、よく覚えていないでしょうがああ魔道具はカズマさんの事情聴取でも使用されたいわゆる嘘発見器のようなものです。察しの良いカズマさんならこの時点でわかるかと思いますが・・・。」

「ん？ああ、なるほどわかったぜまゆたん！いいか魔道具よく聞いとけよ、俺は魔王軍の手先でも、テロリストでもなんでもない！」

嘘を感じして鳴る魔道具は当然の如くカズマさんのその言葉を聞いても作動することにはなかつた。

「裁判長、これは……。」

「これでは検察官の主張は認められませんね。」

予想は的中これで一安心のはずです、が……。

「よって被告人サトウカズマは証拠不十分により無」

「ダメだ裁判長、ワシに恥をかかせる気か？」

無罪判決を下そうとした裁判長の言葉は苦しくも相手のアルダープに阻まれてしまった。

「なんだそれ、きたないぞ！」

「ふん、冒険者風情が」

考えられる手ではあった、裁判長もアルダープの権力には逆らえなかったもよう、最悪死刑が決まってしまった際は私の正体を明かしてでも……そう思った時だった。

「被告人は有罪……よって判決は死刑に」裁判長、私の話を聞いてもらえないだろうか。「な、なんででしょう？」

ふと声のほうへと目をやるとそこにはダクネスさんがカズマさんの前に立ちふさがっていた、そしておもむろにペンダントのような代物を出した途端周りの見物人や裁判長までもがどよめいた。アルダープだけは実に不満そうな顔でそのペンダントを見つめていたが。

「それは王の懐刀ともいわれる名家、ダステイネス家の紋章！」

王の関係者!? ダクネスさんがまさかそんな偉い方だったなんて!!

「〜」

「〜」

カズマさんとダクネスさんが訳知り顔にごにごによ言っている、もしかカズマさんは知っていたんでしょか。

「すまないまゆたん、私的な理由であまり知られてほしくなかったのだ。」

唐突にダクネスさんから弁解が入った、もちろん人にも私にも知られたくない事情の一つや二つはあるのだ。

「いえそんな、謝る必要なんてないですよ」

そう私への対応を早々に済ませダクネスさんはアルダープへと向す。

「この裁判私に預からせてもらえないだろうか。なかつたことにしてほしいといっているわけではない、時間をもらえればこの男の潔白を必ず証明して見せよう。」

「いくらダステイネス家の意向があろうとたかが冒険者、しかもワシの家を壊してくれた罪人などを野放しにしていいいものか！」

「故意ではないとはいえ勿論こちらにも非はある、だから今回の申し出は私からあなたへの借りになる、だから私にできることならなんでも1つ言うことを聞こう。」

「っ!!・・・なんでも?」

「そう、なんでもだ。」

ダクネスさんとの話し合いの末、アルダープに不安の残るような笑みがうかんだ、一先ずダクネスさんの言葉によって峠は超えたようですね。

「そうだ、カズマは悪くない!」

「カズマ!カズマ!カズマ!カズマ!」

…死罪を免れたと分かった途端にコレである。

あ、痺れを切らした裁判官の投げた木槌が音を響かせクリンヒットしましたね。

「…えー、他ならぬダスティネス家のご令嬢の頼み、貴女の言葉を信じましょう。よって被告人サトウカズマの判決を保留とする。」

判決を聴き再度冒険者達は歓喜を挙げる。それを止めるものは誰も…

「続いてミスターケー、本名キリシマケイスケの裁判を開始します。」

…いたようです。